

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第97集

久 禰 添 遺 跡

長野県佐久市大字太田部久禰添遺跡発掘調査報告書

2002.3

佐久建設事務所
佐久市教育委員会

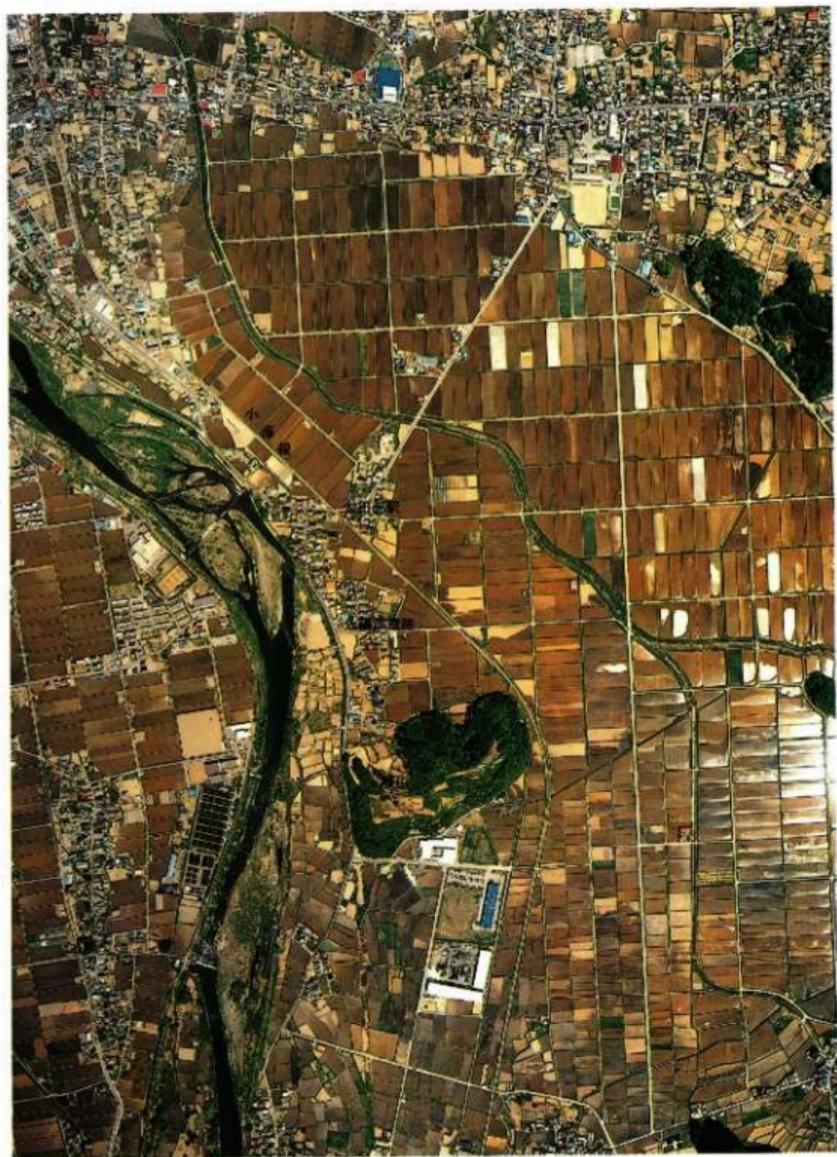
佐久市埋蔵文化財調査報告書 第97集

久 禰 添 遺 跡

長野県佐久市大字太田部久禰添遺跡発掘調査報告書

2002.3

佐久建設事務所
佐久市教育委員会



写1 久彌谷遺跡 周辺航空写真(垂直)



写2 久瀬添道跡 航空写真(南から)



写3 久瀬添道跡 航空写真(西から)



图4 B区1号井户出土陶器

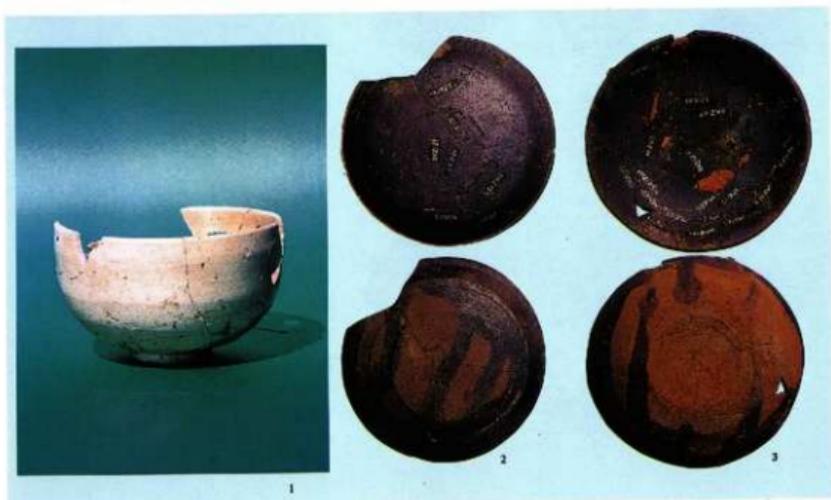


图5 A区出土陶器

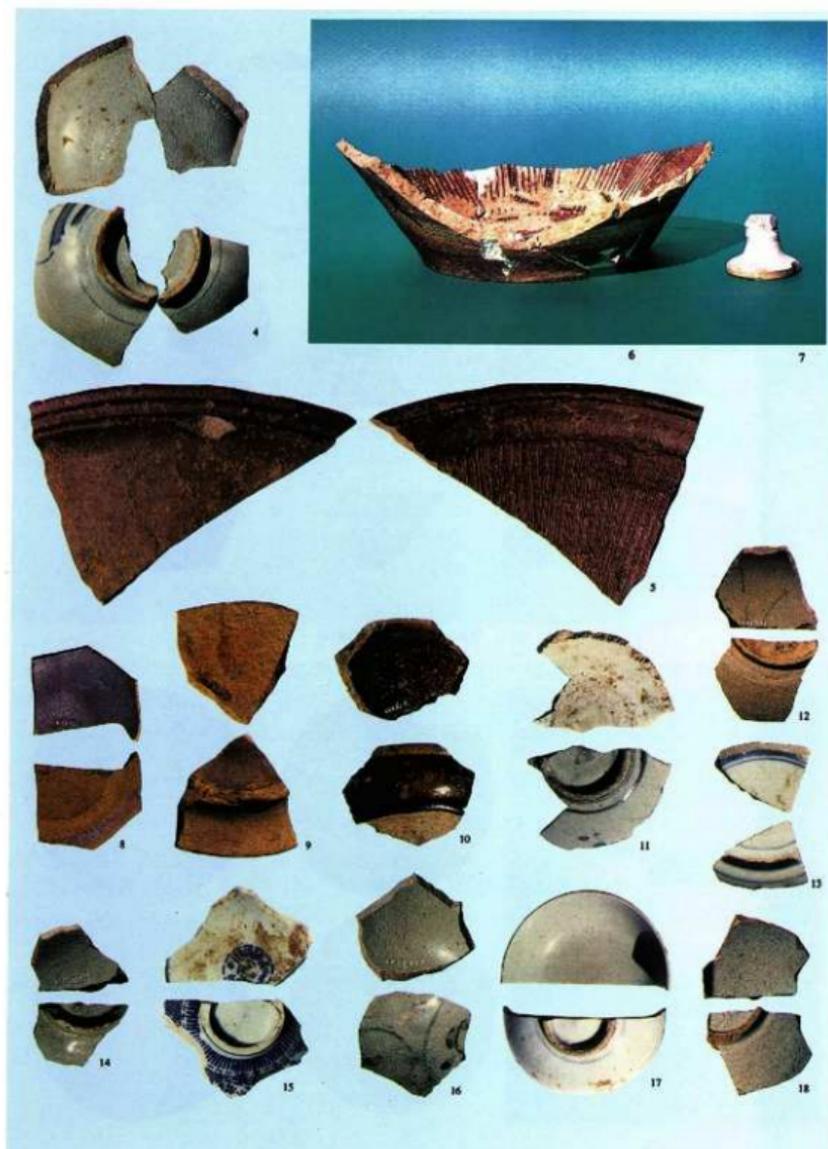
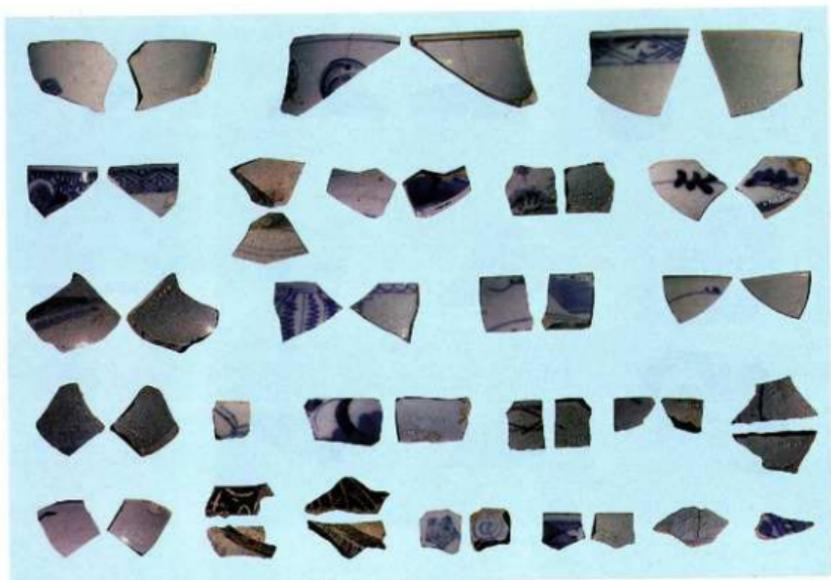


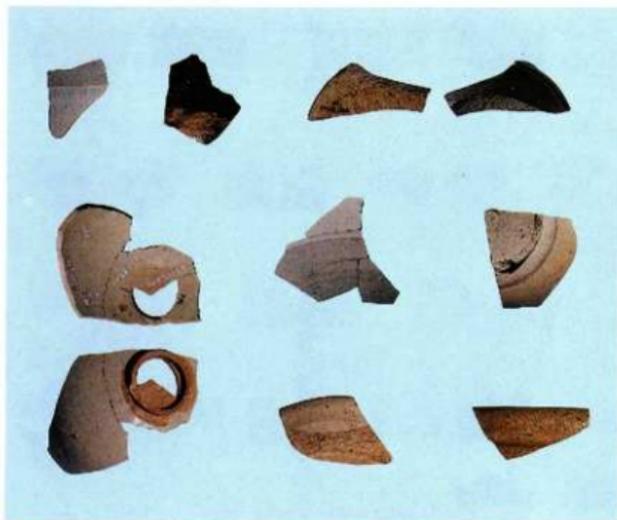
图6 A区遗址出土陶器



写7 A区出土近世肥前系陶磁器



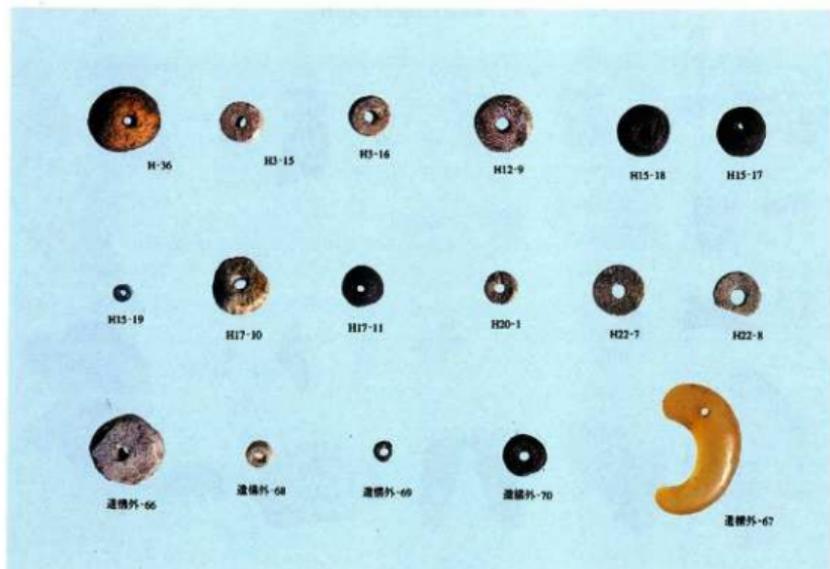
写8 A区出土近世瀬戸系陶磁器



写10 A区出土近世瀬戸系陶器



写9 A区出土中世青磁



写11 久保浜遺跡出土土環

例 言

1. 本書は平成9年度から行われた佐久建設事務所による緊急地方道路整備事業（県道川上佐久線）に伴う発掘調査の報告書である。
2. 調査委託者 佐久建設事務所
3. 調査受託者 佐久市教育委員会
4. 遺 跡 名 久福添遺跡（OKZ）
5. 所 在 地 長野県佐久市大字太田郡字石田197-1, 197-2, 197-3, 宇西屋敷206, 207-1, 208-1, 209, 210, 211-1, 211-2, 211-3, 212-2, 212-3, 213-1, 221-1, 221-2, 222, 223-1, 223-2, 224, 字久福添225
6. 調査年度及び面積 久福添遺跡 B区 平成9年度 1,904㎡
久福添遺跡 A区 平成10年度 1,233㎡
久福添遺跡 C・D・E・F区 平成12年度 1,250㎡
7. 調査担当者 久福添遺跡A・B区 林 幸彦
久福添遺跡C・D・E・F区 林 幸彦 須藤 隆司 上原 学
8. 本書の執筆・編集は上原が行った。
9. 本書及び出土品は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

凡 例

1. 遺構の略号は以下のとおりである。
H-竪穴住居址 D-土坑 P-ピット M-溝状遺構 Ta-竪穴状遺構
2. スクリーントーンによる表示は以下のとおりである。

遺 構

地山断面  焼 土  粘 土  貼 床 

掘 方  柱痕・井戸断面 

遺 物

須臾器断面  黑色処理  灰釉・石器使用面 

羽口鉋滓  赤色塗彩 

3. 挿図の縮尺は以下のとおりである。
遺構 住居址-1/80 土坑-1/80 溝状遺構-1/40 井戸跡-1/40 竪穴状遺構-1/40
遺物 土師器・須臾器-1/4 石器・石製品-1/1, 1/2, 1/4, 1/5, 1/6 鉄製品-1/3 玉類-1/1
4. 写真図版中の遺物番号と実測図番号は同一である。
5. 遺構の標高は各遺構ごとに統一し、水糸高を標高とした。
6. 土層・遺物の色調は「新版 標準土色帖」による。

目 次

巻頭カラー

例 言

凡 例

第 I 章 発掘調査の経緯

第 1 節 立地と経過	1
第 2 節 調査体制	2
第 3 節 遺跡の概要	3

第 II 章 遺跡の環境

第 1 節 自然環境と遺跡の立地	4
第 2 節 基本層序	6

第 III 章 遺構と遺物

第 1 節 竪穴住居址	11
第 2 節 土坑	56
第 3 節 溝状遺構	59
第 4 節 竪穴状遺構	61
第 5 節 井戸跡	62
第 6 節 遺構外遺物	66
第 7 節 ビット	73

まとめ	74
-----	----

写真図版

图 版

第1图	久福添遺跡 位置図 (1:100,000)	1	第43图	H17号住居址・遺物実測図	41
第2图	久福添遺跡 位置図 (1:10,000)	5	第44图	H17号住居址遺物実測図	42
第3图	久福添遺跡 基本層序模式図	6	第45图	H18号住居址実測図	42
第4图	久福添遺跡 調査区位置図 (1:1,000)	7	第46图	H18号住居址遺物実測図	43
第5图	B区遺構配置図	9	第47图	H19号住居址実測図	43
第6图	A・C・D・E・F区遺構配置図	10	第48图	H19号住居址遺物実測図	43
第7图	H1号住居址実測図	11	第49图	H20号住居址・遺物実測図	44
第8图	H1号住居址炭化材出土状況実測図	12	第50图	H21号住居址実測図	44
第9图	H1号住居址遺物実測図 (1)	12	第51图	H22号住居址実測図	44
第10图	H1号住居址遺物実測図 (2)	13	第52图	H22号住居址遺物実測図	45
第11图	H1号住居址遺物実測図 (3)	14	第53图	H23号住居址実測図	46
第12图	H1号住居址遺物実測図 (4)	15	第54图	H24・31号住居址実測図	46
第13图	H2号住居址実測図	16	第55图	H24号住居址遺物実測図	47
第14图	H2号住居址遺物実測図	17	第56图	H25号住居址実測図	48
第15图	H3号住居址実測図	18	第57图	H25号住居址遺物実測図	48
第16图	H3号住居址遺物実測図 (1)	19	第58图	H26号住居址実測図	49
第17图	H3号住居址遺物実測図 (2)	20	第59图	H26号住居址遺物実測図	49
第18图	H4号住居址実測図	21	第60图	H27号住居址実測図	50
第19图	H4号住居址遺物実測図 (1)	21	第61图	H27号住居址遺物実測図 (1)	50
第20图	H4号住居址遺物実測図 (2)	22	第62图	H27号住居址遺物実測図 (2)	51
第21图	H5号住居址実測図	23	第63图	H28号住居址実測図	52
第22图	H5号住居址遺物実測図	23	第64图	H28号住居址遺物実測図	53
第23图	H6号住居址実測図	24	第65图	H29号住居址実測図	54
第24图	H6号住居址遺物実測図	25	第66图	H30号住居址・遺物実測図	55
第25图	H7号住居址実測図	25	第67图	土坑実測図 (1)	56
第26图	H8号住居址実測図	26	第68图	土坑実測図 (2)	57
第27图	H8号住居址遺物実測図	26	第69图	土坑実測図 (3)	58
第28图	H9号住居址・遺物実測図	27	第70图	M1・2号溝状遺構・遺物実測図	60
第29图	H10号住居址実測図	28	第71图	Ta1号壑穴状遺構実測図	61
第30图	H10号住居址遺物実測図	28	第72图	1号井戸跡実測図	62
第31图	H11号住居址・遺物実測図	29	第73图	1号井戸跡遺物実測図 (1)	63
第32图	H12号住居址・遺物実測図	30	第74图	1号井戸跡遺物実測図 (2)	64
第33图	H13号住居址実測図	31	第75图	2号井戸跡実測図	65
第34图	H14号住居址実測図	31	第76图	2号井戸跡遺物実測図	66
第35图	H14号住居址遺物実測図	32	第77图	遺構外遺物実測図 (1)	66
第36图	H15号住居址実測図	33	第78图	遺構外遺物実測図 (2)	67
第37图	H15号住居址遺物実測図 (1)	34	第79图	遺構外遺物実測図 (3)	68
第38图	H15号住居址遺物実測図 (2)	35	第80图	遺構外遺物実測図 (4)	69
第39图	H15号住居址遺物実測図 (3)	36	第81图	遺構外遺物実測図 (5)	70
第40图	H16号住居址実測図	38	第82图	遺構外遺物実測図 (6)	71
第41图	H16号住居址遺物実測図 (1)	39	第83图	遺構外陶磁器実測図	72
第42图	H16号住居址遺物実測図 (2)	40	第84图	ピット実測図	73

表目次

第1表	H1号住居址遺物観察表	15	第30表	H18号住居址遺物観察表	43
第2表	H1号住居址石類観察表	15	第31表	H18号住居址石類観察表	43
第3表	H1号住居址玉類観察表	15	第32表	H19号住居址石類観察表	43
第4表	H2号住居址遺物観察表(1)	17	第33表	H20号住居址玉類観察表	44
第5表	H2号住居址遺物観察表(2)	18	第34表	H22号住居址遺物観察表	45
第6表	H2号住居址石類観察表	18	第35表	H22号住居址玉類観察表	45
第7表	H3号住居址遺物観察表	20	第36表	H24号住居址遺物観察表	47
第8表	H3号住居址玉類観察表	20	第37表	H24号住居址石類観察表	47
第9表	H3号住居址石類観察表	20	第38表	H25号住居址遺物観察表(1)	48
第10表	H4号住居址遺物観察表	22	第39表	H25号住居址遺物観察表(2)	49
第11表	H5号住居址遺物観察表	24	第40表	H26号住居址遺物観察表	49
第12表	H6号住居址遺物観察表	25	第41表	H27号住居址遺物観察表(1)	51
第13表	H8号住居址遺物観察表	27	第42表	H27号住居址遺物観察表(2)	52
第14表	H8号住居址石類観察表	27	第43表	H27号住居址石類観察表	52
第15表	H9号住居址遺物観察表	27	第44表	H28号住居址遺物観察表	54
第16表	H10号住居址遺物観察表	28	第45表	H28号住居址石類観察表	54
第17表	H11号住居址遺物観察表	29	第46表	H30号住居址遺物観察表	56
第18表	H12号住居址遺物観察表	30	第47表	H30号住居址石類観察表	56
第19表	H12号住居址玉類観察表	30	第48表	土坑観察表	59
第20表	H14号住居址遺物観察表	33	第49表	土坑遺物観察表	59
第21表	H14号住居址石類観察表	33	第50表	M2号溝状遺構石類観察表	60
第22表	H15号住居址遺物観察表	37	第51表	1号井戸跡遺物観察表	64
第23表	H15号住居址玉類観察表	37	第52表	1号井戸跡石類観察表	64
第24表	H15号住居址石類観察表	37	第53表	2号井戸跡遺物観察表	66
第25表	H16号住居址遺物観察表	40	第54表	2号井戸跡石類観察表	66
第26表	H16号住居址石類観察表	40	第55表	遺構外玉類観察表	71
第27表	H16号住居址玉類観察表	40	第56表	遺構外石類観察表	72
第28表	H17号住居址遺物観察表	42	第57表	遺構外陶磁器観察表	72
第29表	H17号住居址玉類観察表	42			

写真目次

巻頭カラー

- 写1 久禰添遺跡周辺航空写真(垂直)
 写2 久禰添遺跡航空写真(南から)
 写3 久禰添遺跡航空写真(西から)
 写4 B区1号井戸跡出土陶磁器
 写5 A区出土陶器
 写6 A区遺構外出土陶磁器
 写7 A区出土近世肥前系陶磁器

- 写8 A区出土近世瀬戸系陶器
 写9 A区出土中世青磁
 写10 A区出土近世瀬戸系陶器
 写11 久禰添遺跡出土玉類

本文中

- 写1 佐久平周辺航空写真(南から)
 写2 井戸底面出土杵材
 写3 2号井戸跡半截状況

写真図版

- 図版1 久瀬遺跡C・D・E・F区垂直写真
 図版2 久瀬遺跡遠景(千曲川左岸から)
 久瀬遺跡遠景(南から)
- 図版3 久瀬遺跡航空写真(南から)
 久瀬遺跡E区垂直写真
 久瀬遺跡F区垂直写真
- 図版4 B区調査風景
 A区調査風景
 C区調査風景
 E区調査風景
 E・F区調査風景
 平成12年度遺構確認状況(北から)
 A・B区工事終了状況(北から)
- 図版5 H1号住居址全景(東から)
 H1号住居址検出状況
 H1号住居址炉跡
 H1号住居址全景(西から)
 H1号住居址炭化物除去状況
- 図版6 H1号住居址炭化物出土状況(1)
 H1号住居址炭化物出土状況(2)
 H1号住居址炭化物出土状況(3)
 H1号住居址炭化物・土器出土状況
 H1号住居址炭化材除去状況(南から)
- 図版7 H2号住居址全景(南から)
 H2号住居址カマド(南から)
 H2号住居址ビット1
 H2号住居址ビット3
 H2号住居址カマド掘方
- 図版8 H2号住居址掘方(南から)
 H3号住居址全景(南から)
 H3号住居址カマド(南から)
 H3号住居址カマド突き口部
- 図版9 突き口天井部土器除去状況
 H3号住居址カマド前面集石
 H3号住居址カマド掘方
 H3号住居址掘方(南から)
- 図版10 H4号住居址全景(南から)
 H5号住居址全景(南から)
- 図版11 H5号住居址掘方(南から)
 H6号住居址全景(北から)
- 図版12 H6号住居址土器出土状況
 H6号住居址炭化材出土状況
 H6号住居址遺物除去後(北から)
 H6号住居址掘方(北から)
 H7号住居址全景(北から)
 図版13 H8号住居址全景(南から)
 H8号住居址カマド確認状況
 H8号住居址カマド(西から)
 H8号住居址カマド掘方(西から)
 H8号住居址掘方(北から)
 図版14 H9号住居址全景(東から)
 H9号住居址掘方(南から)
 H10号住居址全景(東から)
 H10号住居址掘方(西から)
 H11号住居址全景(東から)
- 図版15 H11号住居址全景(南から)
 H11号住居址カマド(南から)
 H11号住居址カマド掘方(南から)
 H11号住居址掘方(東から)
 H12号住居址全景(北から)
 H12号住居址掘方(北から)
 H13号住居址全景(西から)
 H14号住居址全景(南から)
- 図版16 H14号住居址検出状況(南から)
 H14号住居址張り出し部(東から)
 H14号住居址土器出土状況
 H14号住居址掘方(南から)
 H15号住居址全景(南から)
- 図版17 H15号住居址カマド(南西から)
 H15号住居址カマド(南から)
 H15号住居址土器出土状況
 H15号住居址カマド掘方(南から)
 H15号住居址掘方(南から)
- 図版18 H16号住居址全景(南から)
 H16号住居址カマド
 H16号住居址カマド(石除去後)
 H16号住居址カマド掘方
 H16号住居址掘方(南から)
- 図版19 H17号住居址全景(南から)
 H17号住居址カマド(南から)
 H17号住居址掘方(南から)
 H18号住居址全景(北から)

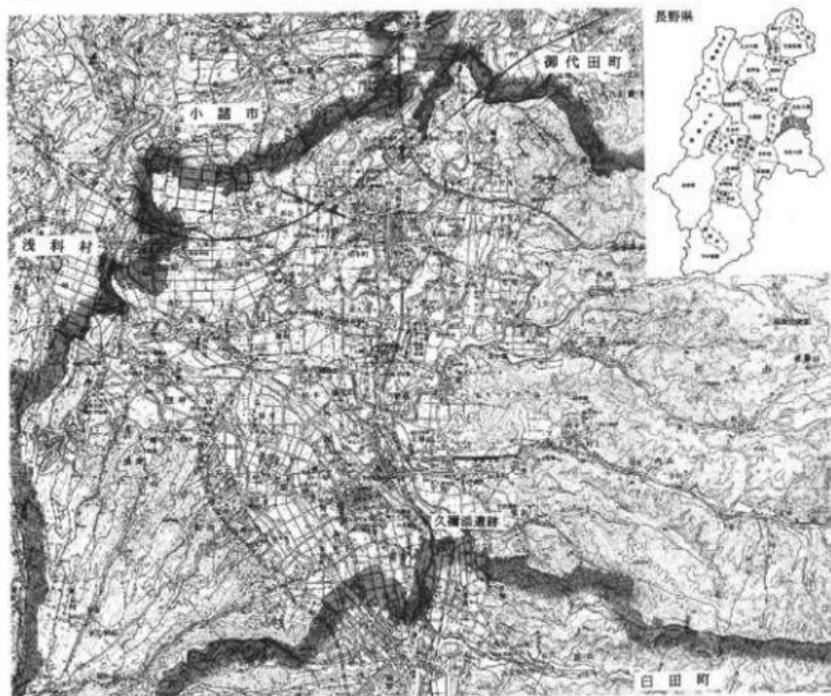
- 図版20 H18号住居址掘方（北から）
H19号住居址全景（西から）
H20・26号住居址全景（西から）
H21号住居址全景（北から）
H21号住居址掘方（北から）
H22号住居址カマド
H23号住居址全景（西から）
- 図版21 H24・31号住居址全景（南から）
H24・31号住居址掘方（北から）
- 図版22 H25号住居址全景（南から）
H27号住居址全景（南から）
- 図版23 H27号住居址炉跡
H27号住居址土器出土状況
H27号住居址土器出土状況
H27号住居址遺物除去状況（南から）
H28号住居址全景（北から）
- 図版24 H29号住居址全景（南から）
H30号住居址全景（南から）
H30号住居址出土石斧
- 図版25 D1号土坑
D2号土坑
D3号土坑
D4号土坑
D5号土坑
D6号土坑
D7号土坑
D8号土坑
- 図版26 D9号土坑（集石あり）
D9号土坑（集石除去後）
D10号土坑
D11号土坑
D12号土坑（集石あり）
D12号土坑（集石半載状況）
D12号土坑（集石除去後）
D13号土坑
- 図版27 D14号土坑
D15号土坑
D16号土坑
D17号土坑
D18号土坑
D19号土坑
D20号土坑
D21号土坑
- 図版28 D22号土坑
D23・26号土坑
D24号土坑
D25号土坑
M1号溝状遺構（南から）
- 図版29 M2号溝状遺構（北から）
1号井戸跡全景
- 図版30 1号井戸跡確認状況
1号井戸跡半載状況（1）
1号井戸跡半載状況（2）
2号井戸跡確認状況
- 図版31 2号井戸跡全景
2号井戸跡半載状況
- 図版32 T a 1号竪穴状遺構全景
T a 1号竪穴状遺構確認状況
T a 1号竪穴状遺構集石除去状況
T a 1号竪穴状遺構確認状況
- 図版33 H1号住居址遺物
- 図版34 H2・3号住居址遺物
- 図版35 H3号住居址遺物
- 図版36 H3・4号住居址遺物
- 図版37 H4・5号住居址遺物
- 図版38 H5・6・8号住居址遺物
- 図版39 H8・9・10・11・12号住居址遺物
- 図版40 H14号住居址遺物
- 図版41 H15号住居址遺物
- 図版42 H15号住居址遺物
- 図版43 H15号住居址遺物
- 図版44 H16号住居址遺物
- 図版45 H16・17号住居址遺物
- 図版46 H17・18・19・20・22号住居址遺物
- 図版47 H22・24・25号住居址遺物
- 図版48 H25・26・27号住居址遺物
- 図版49 H27・28号住居址遺物
- 図版50 H28・30号住居址遺物
- 図版51 D17・19・25、1号井戸跡遺物
- 図版52 1・2号井戸跡遺物
- 図版53 遺構外遺物（1）
- 図版54 遺構外遺物（2）
- 図版55 遺構外遺物（3）
- 図版56 遺構外遺物（4）

第I章 発掘調査の経緯

第1節 立地と経過

久瀬遺跡は佐久市南部の大字太田部地籍に所在し、千曲川右岸の沖積地上に展開する弥生時代から平安時代の複合遺跡である。標高は686～689mを測る。調査対象地は千曲川右岸の段丘端を通る県道川上佐久線にはほに沿った南北方向に細長い地域で、調査地域の南端は白田町との境界に接し、通称「雑山」と称する独立丘段が存在する。

今回、緊急地方道路整備事業（県道川上佐久線）が行われることとなり、平成9年度から平成12年度にかけて工事区間の遺構確認を、工事計画にあわせ随時行った。その結果、平成9年度区間からは竪穴住居址1軒、井戸跡1、土坑等が、平成10年度区間からは中世から近代の陶磁器が、平成12年度区間からは住居址及びこれに伴うと思われる土器が認められた。このため開発主体者である佐久建設事務所と協議の結果、遺跡の記録保存を目的として、佐久建設事務所から委託を受けた佐久市教育委員会が主体となり、平成9年から12年度にかけて3回の発掘調査を行った。



第1図 久瀬遺跡 位置図 (1:100,000)

第2節 調査体制

平成9年度

教 育 長	依田 英夫					
教 育 次 長	市川 源					
埋蔵文化財課長	須江 仁胤					
管 理 係 長	榑沢 慶子					
埋蔵文化財係長	大塚 達夫					
埋蔵文化財係	林 幸彦	三石 宗一	須藤 隆司	小林 眞寿	羽毛田卓也	
	富沢 一明	上原 学				
調 査 主 任	佐々木宗昭	森泉かよ子				

平成10年度

教 育 長	依田 英夫					
教 育 次 長	北沢 馨					
埋蔵文化財課長(兼)管理係長	須江 仁胤					
埋蔵文化財係長	萩原 一馬					
埋蔵文化財係	林 幸彦	三石 宗一	須藤 隆司	小林 眞寿	羽毛田卓也	
	富沢 一明	上原 学				
調 査 主 任	佐々木宗昭	森泉かよ子				

平成12年度

教 育 長	依田 英夫					
教 育 次 長	小林 宏造					
文化財課長	草間 芳行					
文化財係長	萩原 一馬					
文化財係	林 幸彦	須藤 隆司	小林 眞寿	羽毛田卓也	富沢 一明	
	上原 学	山本 秀典	出澤 力			
調 査 主 任	佐々木宗昭	森泉かよ子				

平成13年度

教 育 長	依田 英夫 (～6月)	高柳 勉 (7月～)				
教 育 次 長	小林 宏造 (～5月)	黒沢 俊彦 (5月～)				
文化財課長	草間 芳行					
文化財係長	萩原 一馬 (～5月)	森角 吉晴 (5月～)				
文化財係	林 幸彦	須藤 隆司	小林 眞寿	羽毛田卓也	富沢 一明	
	上原 学	山本 秀典	出澤 力			
調 査 主 任	佐々木 宗昭	森泉 かよ子				

平成9～13年度

調査員 浅沼ノブエ 阿部和人 荒井利男 飯澤つや子 磯貝はな 市川昭 井出徳四郎
岩崎重子 碓水知子 江原富子 小幡弘子 柏木貞夫 柏木三郎 柏木義雄
柏原松枝 金井保夫 川多アヤ子 木内明美 木内節夫 菊池喜重 神津ツネヨ
神津よしの 小須田サクエ 小林裕 小林よしみ 小山正吉 小山澄江 桜井牧子
佐々木正 佐々木久子 佐藤剛 佐藤志げ子 沢井早月 篠崎清一 島田幹子
清水佐知子 田中章雄 角田すづ子 角田トミ江 土屋貞子 東城友子 東城幸子
中島武三郎 中島照夫 中島とも子 並木ことみ 花岡美津子 花里八重子
林幸男 比田井久美子 平林泰 細萱ミスズ 堀籠因 真嶋保子 増野深志
武者幸彦 桃井もとめ 山崎直 山村容子 渡邊久美子 渡辺長子

第3節 遺跡の概要

遺跡名	久瀬添遺跡
所在地	長野県佐久市大字太田部字石田197-1、197-2、197-3、字西屋敷206、207-1、208-1、209、210、211-2、211-3、211-1、212-2、212-3、213-1、221-1、221-2、222、223-1、223-2、224、字久瀬添225
調査期間	平成9年10月21日～平成9年12月11日（現場） 平成10年9月14日～平成10年10月19日（現場） 平成12年5月23日～平成12年8月22日（現場） 平成9年12月12日～平成14年3月20日（整理）
調査面積	平成9年度 1,904㎡（B区） 平成10年度 1,233㎡（A区） 平成12年度 1,250㎡（C・D・E・F区）
遺構・出土遺物	平成9年度 遺構 竪穴住居址 弥生時代 1軒 井戸跡 1 土坑 8基 遺物 弥生式土器 近世陶磁器 石製品 平成10年度 遺物 中近世陶磁器 平成12年度 遺構 竪穴住居址 弥生時代 3軒 古墳時代 19軒 奈良・平安時代 3軒 不明 5軒 溝状遺構 2条 土坑 18基 井戸跡 1 ビット 遺物 縄文土器 弥生式土器（壺・高坏・甕） 土師器（坏・高坏・甕・鉢・甌・手づくね土器・壺） 須恵器（坏・蓋・甕・壺） 石類（擦り石・敲き石・凹石・編み物石・砥石・多目的石器 播り鉢・石臼・石包丁・打製穂積具・石製模造品・石鏃 打製石斧・石匙・磨製石鏃・磨製石斧・横刃形石器） 鉄製品（鎌他） 中近世・近代陶磁器

第Ⅱ章 遺跡の環境

第1節 自然環境と遺跡の立地

佐久地域は、周囲を山地・台地に囲まれた盆地状を呈し、一般に佐久平と呼ばれ、北には現在も時折白煙をのぞかせる雄大な浅間山が聳える。南には蓼科山が存在し、東には浅間山と蓼科山をつなぐように北関東山地の北端がのび、群馬県との県境をなしている。西には御牧原・八重原といった台地が広がり、蓼科北端の裾野と接している。そしてこの佐久平を大きく二分するかのように一級河川である千曲川が沢筋からの支流を集めながら水量を増し佐久市内に流れ込む。佐久市内にはいと、野沢付近まで北流していた川筋をやや北西方向に変え、蓼科山麓の支流を集めた片貝川、浅間山の東麓に源を発す湯川、関東山地からの支流である田子川、志賀川などを集める滑津川といった河川と合流し市外へ流れ出る。

また、佐久地域は地質学的に南北で大別でき、この境界は、佐久平のほぼ中央である志賀川が滑津川と合流して千曲川に注ぐ東西線を境として、河川の北側段丘上は680m、南側は650mを測り、30m内外の比高差の断崖を認めることができる。北部地域は、北に聳える浅間山（黒斑山・前掛山・中央釜山からなる三重式成層火山）の山麓末端部の平坦な台地で、この台地の表面に堆積した軽石流は雨水による浸食に弱く、長い年月の間に深く削りとられ、浅間の麓から放射状に幾筋にも浸食谷（田切り地形）を形成し、切り立った断

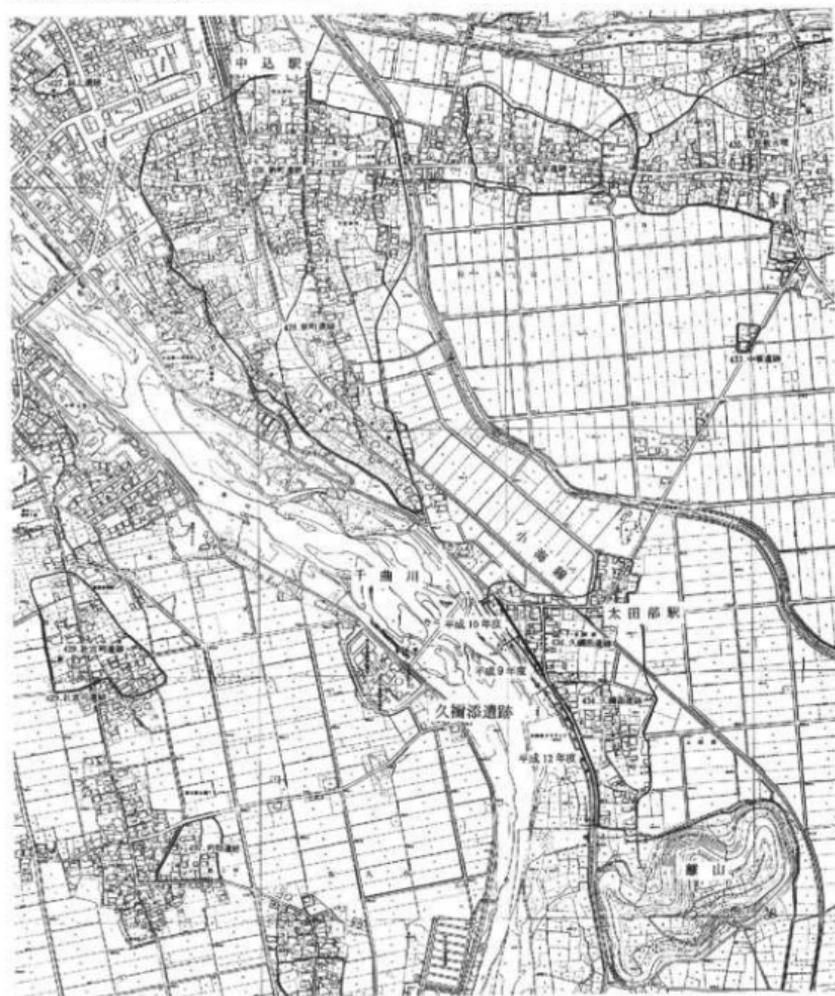


写真1 佐久平周辺航空写真（南から）

崖により台地を細長く分断している。

これに対し、南部地域は千曲川の氾濫源沖積地と沼津川の谷口扇状地で、河床礫層と沖積粘土層地帯で地下水位も高く、安定した土地である。このため南部一帯は広く水田として利用されていた。

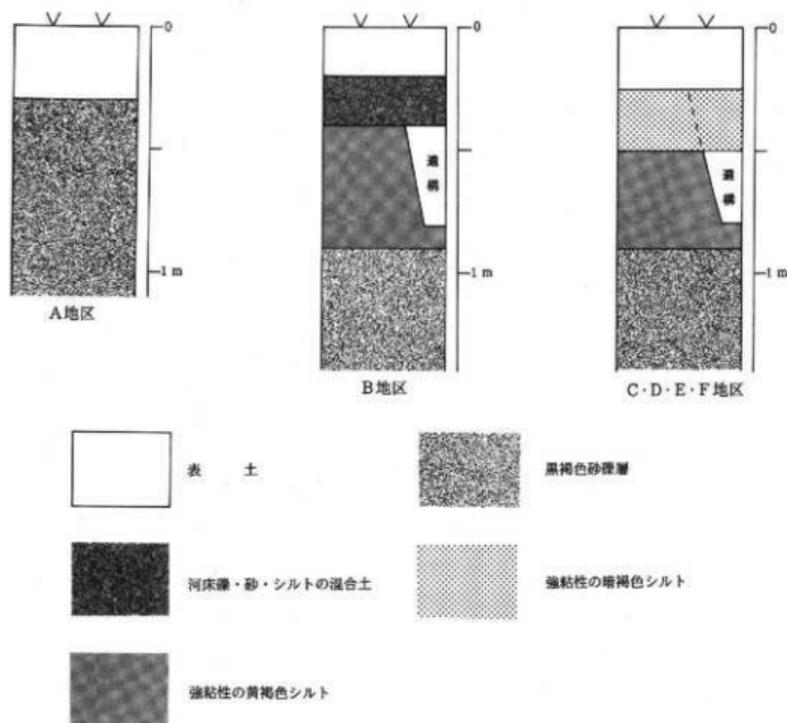
今回調査対象となった久瀬遺跡は、佐久市の南端、南部地域の湯川右岸に沿った比高差10m弱の氾濫源沖積地上に展開し、周辺地域は現在も水田として広く利用されている。(北佐久郡志自然観察会)



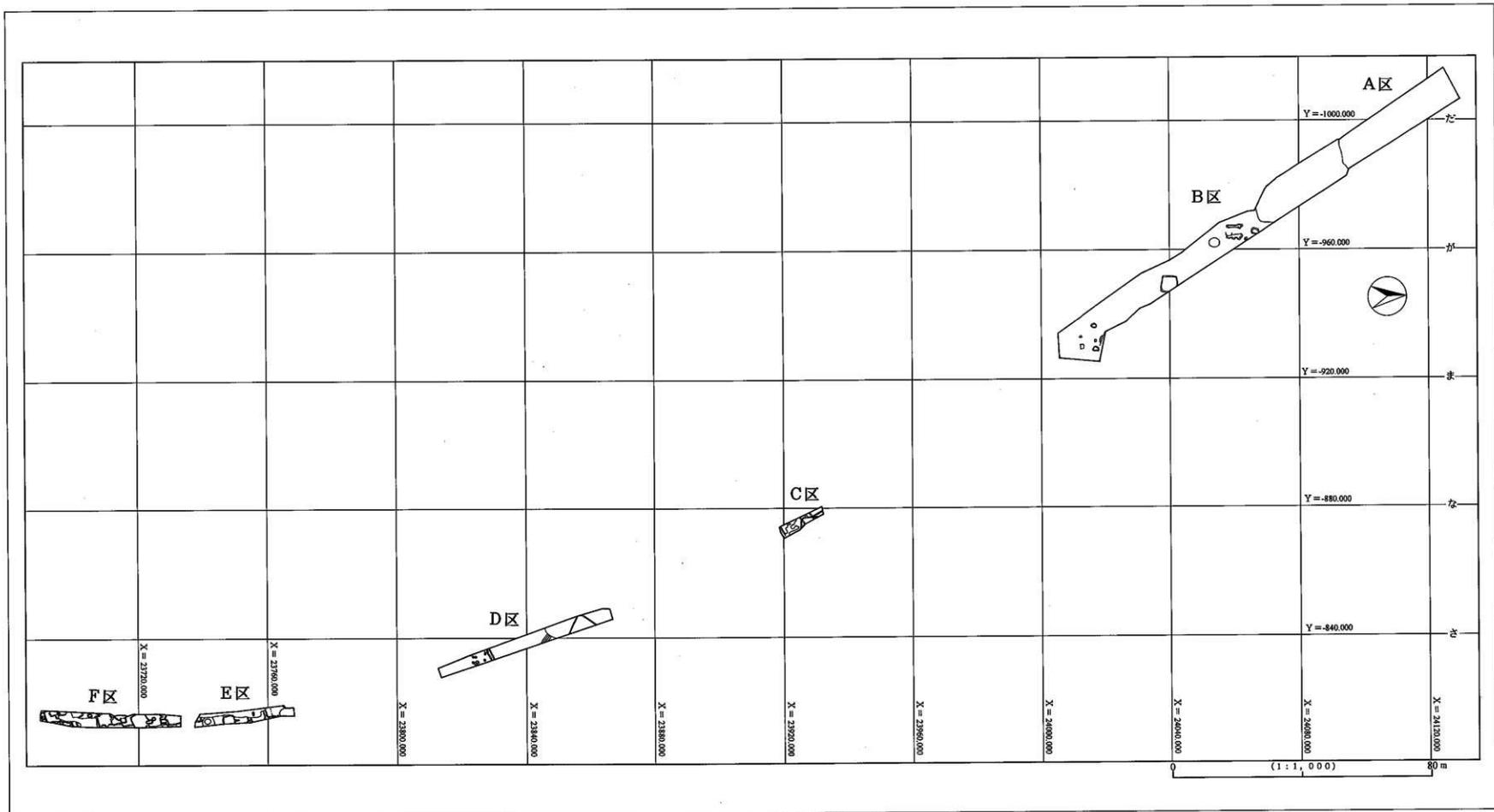
第2図 久瀬遺跡位置図 (1:10,000)

第2節 基本層序

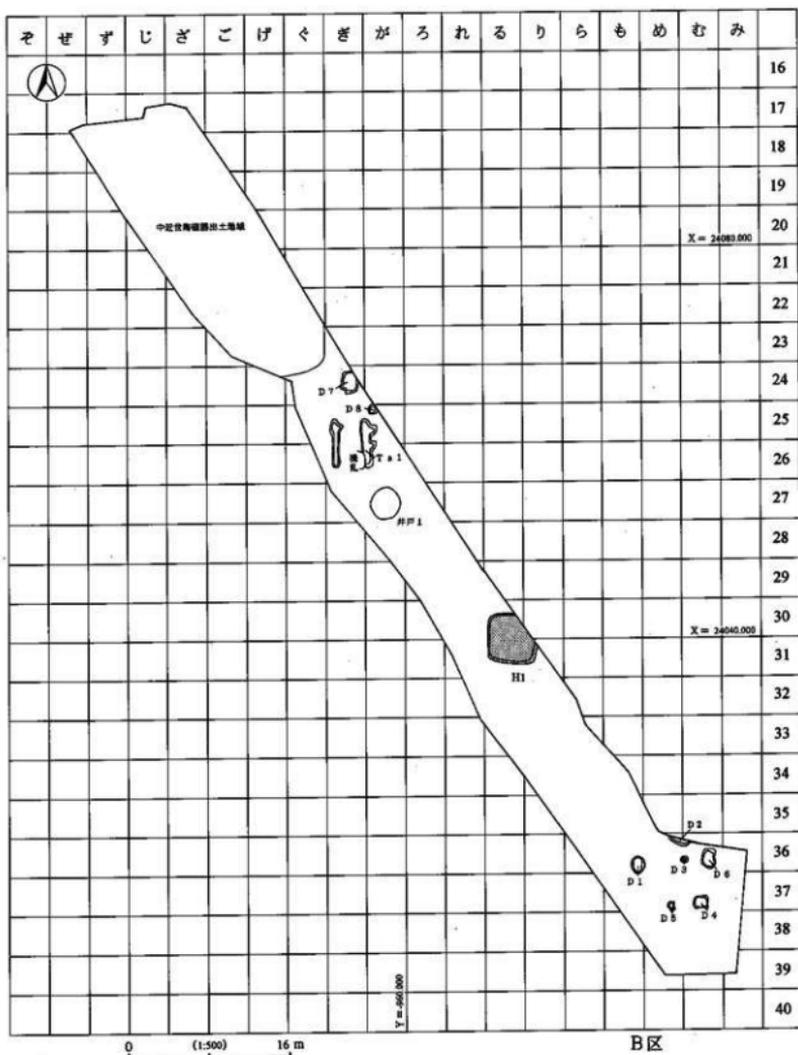
久禰添遺跡は南佐久から北流してきた千曲川右岸の氾濫源沖積地に所在し、湯川の河床との比高差は10m弱と低地帯に展開することから、基本的には氾濫源特有の川床礫層、沖積粘土層、砂層の堆積によって構成されている。平成9年度に発掘が行われた久禰添遺跡B区は、表土下に河床礫・砂・シルトの混合土、強粘性の黄褐色シルト質土、黒褐色砂礫層が堆積し、弥生時代の遺構は強粘性の黄褐色シルト質土に埋り込まれ、上面及び覆土は河床礫・砂・シルトの混合土に覆われていた。また、平成10年度に発掘が行われた久禰添遺跡A区は、表土直下に砂礫層が厚く堆積し、中近世の遺物はこの上面付近から出土した。平成12年度に発掘が行われた調査区南のC～F区では、表上下に強粘性の暗褐色シルト質土、やや粒子の粗い黄褐色シルト質土、黒褐色砂礫層が堆積していた。調査では表土直下の暗褐色土から遺物が多量に出土したが、調査面積が南北方向に細長いといった調査区の制約及び遺構の重複の激しさから、この上面での遺構確認は困難であった。このため徐々に掘り下げを行った結果、確実な遺構プランは黄褐色土上面にて確認できた。しかし、調査面積が十分にとれる調査においては暗褐色土上面あるいは中間層で遺構の確認は可能と考えられる。



第3図 久禰添遺跡 基本層序模式図



第4图 久保涂道路調査区位置図 (1:1000)



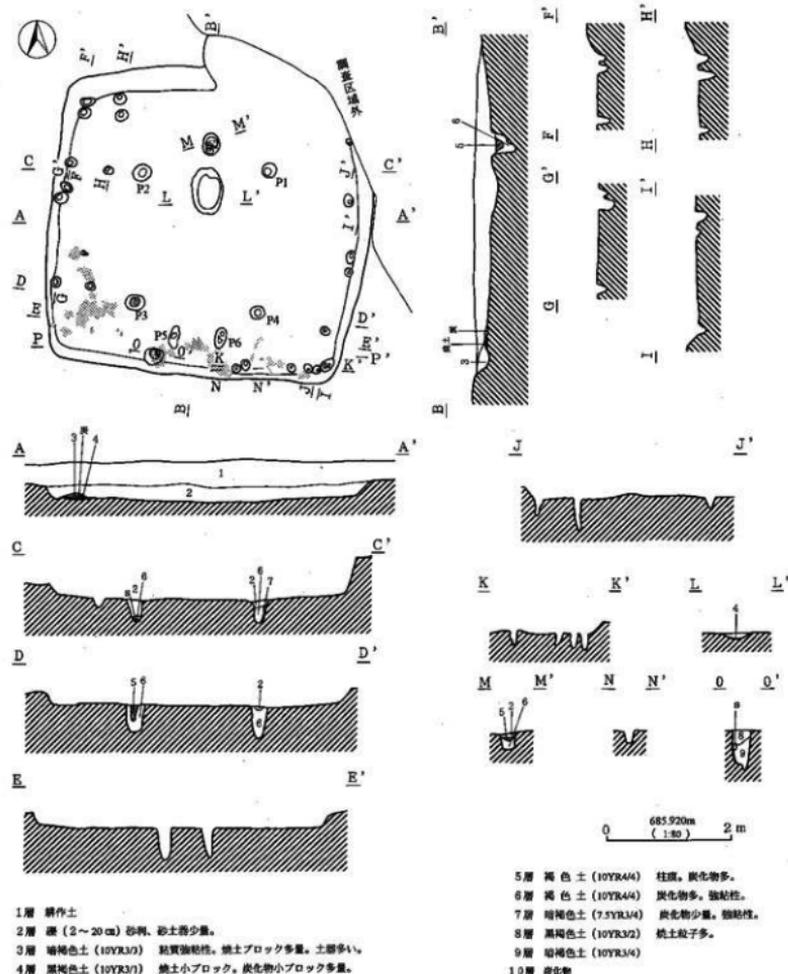
弥生時代

第5図 B区遺構配置図

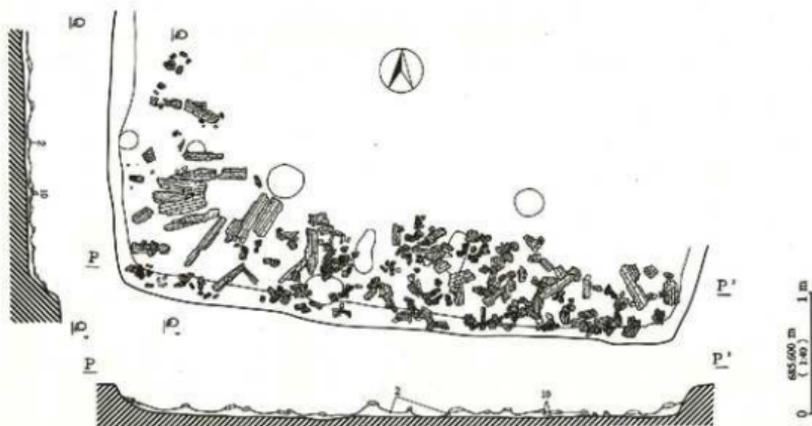
第三章 遺構と遺物

第1節 竪穴住居址

H1号住居址



第7図 H1号住居址実測図



第8図 H1号住居址炭化材出土状況実測図

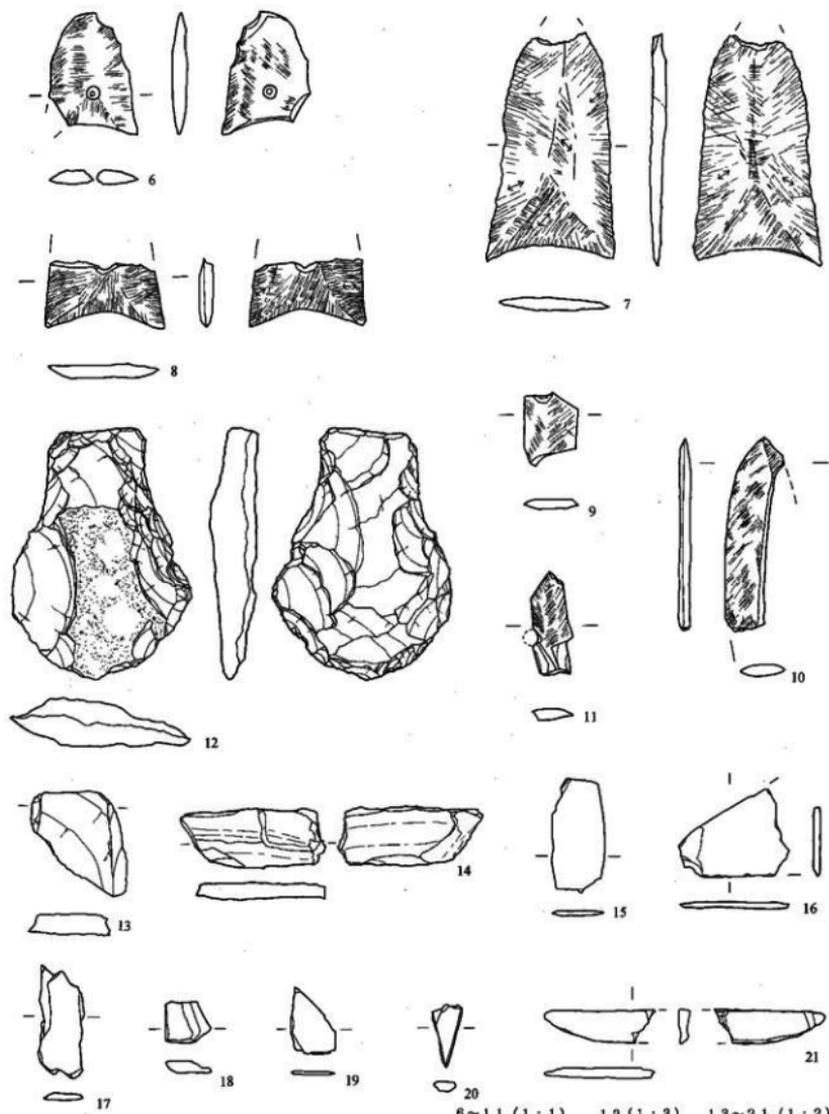
遺構はB区画-30グリッドに位置し、北東コーナーは調査区外となる。規模は南北5.0m、東西5.12m、床面までの深さは25cmを測る。平面形はやや隅丸の方形である。床面は固く土間状を呈し、ピットは大小28個認められた。P1~P4は主柱穴で、P5、6は位置的に入り口に関するものと考えられる。壁際に見られる小ピットは壁柱穴である。P1とP2のほぼ中間に竪跡と思われる南北80cm、東西45cm、深さ10cmの窪みが存在する。また南壁付近の帯には床面上に焼土が堆積し、その上部に多量の炭化材が認められた。こうした状況から本住居址は焼失住居址と考えられた。床下は、はっきりとした掘方は認められなかった。

遺物は弥生式土器、石製品、土製丸玉が出土した。土器の状態は悪く、表面の調整痕は大半が摩耗していた。図示したのは36点である。1は手づくねの器台形土器で内外面に赤色塗彩を施す。2は小型壺の口縁部の破片で外面赤色塗彩を施す。3は壺の口縁から胴上半部の破片で口縁外面に波状文、頸部に縞状文の痕跡が僅かに認められる。4は壺または壺の底部である。5は壺または壺の頸部付近の破片で表面に細かなハケ目を施す。6・9~11は千枚岩、7・8は粘板岩の磨製石鏃である。12は輝石安山岩製の打製石斧だが、石鏃・石錐の可能性も考えられる。13~30は千枚岩の剥片で、本住居址から多数出土している。千枚岩は磨製石鏃の石材として利用されていることから、住居内にて石製品の製作を行っていた可能性が推察できる。32・33は石核である。31・35は剥片、36は土製の丸玉である。

本住居址は、弥生時代後期前半と考えられる。

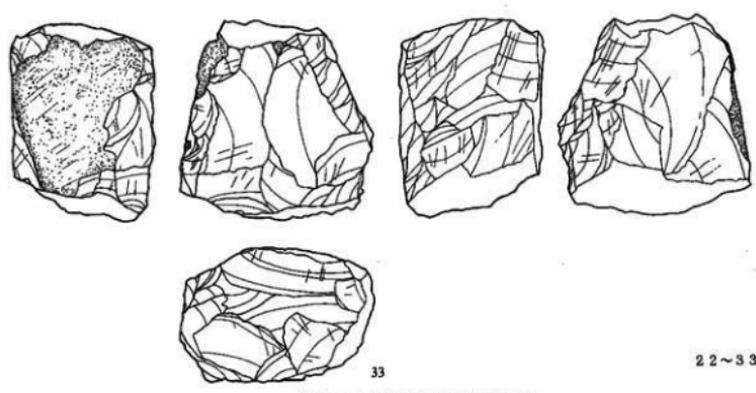
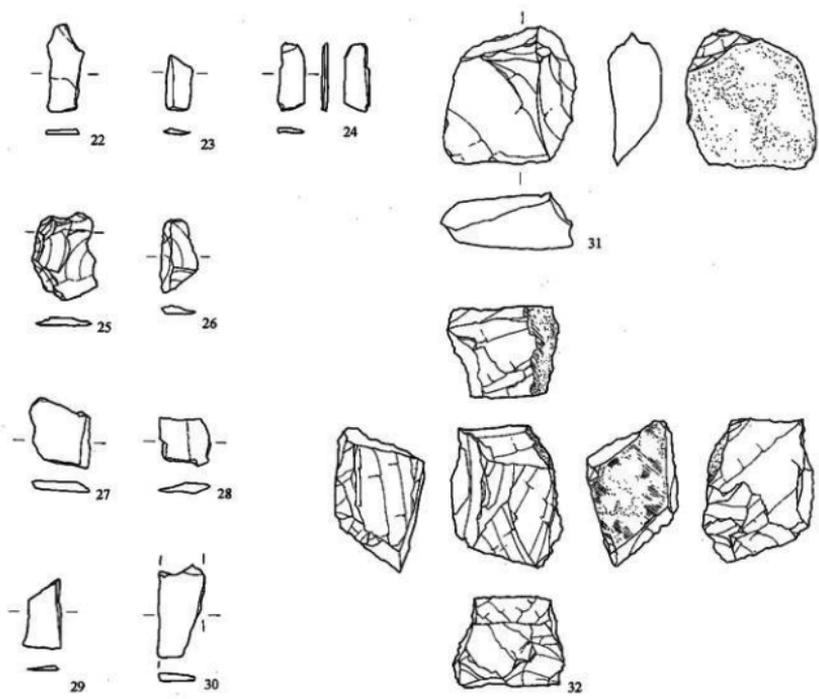


第9図 H1号住居址遺物実測図(1)



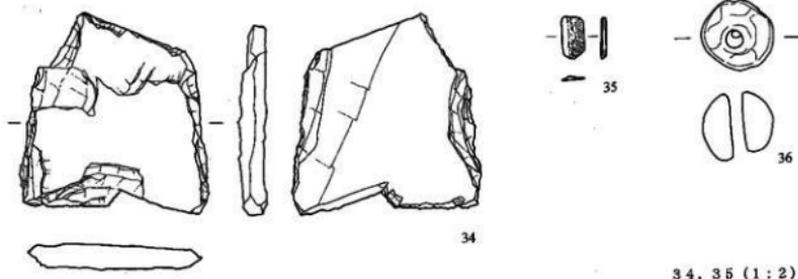
6~11 (1:1) 12 (1:3) 13~21 (1:2)

第10图 H1号住居址遺物実測圖(2)



22~33 (1:2)

第11图 H1号住居址遗物实测图(3)



第12图 H1号住居址遺物実函図(4)

34, 35 (1:2)

番号	器種	器形	口径cm	底径cm	器高cm	調整・文様	残存率・部位	焼成	色澤(外側/内側)
1	弥生式土器	器内形土器	4.1	5.5	5.1	手づくね 内外面赤色塗彩	97	良	赤色 赤色
2	弥生式土器	皿	[15.1]	-	-	外周赤色塗彩	口縁破片	良	赤色 黄褐色
3	弥生式土器	鉢	[22.4]	-	-	口辺外周波状文 器底波状文 内面ナア	口縁底部破片	良	鈍い黄褐色 鈍い黄褐色
4	弥生式土器	-	-	7.8	-	底部周縁方形刻み	底部	良	褐色 鈍い黄褐色
5	弥生式土器	-	-	-	-	外周縁ハナ目 ナア 内面ナア	底部破片	良	鈍黄褐色 黄褐色

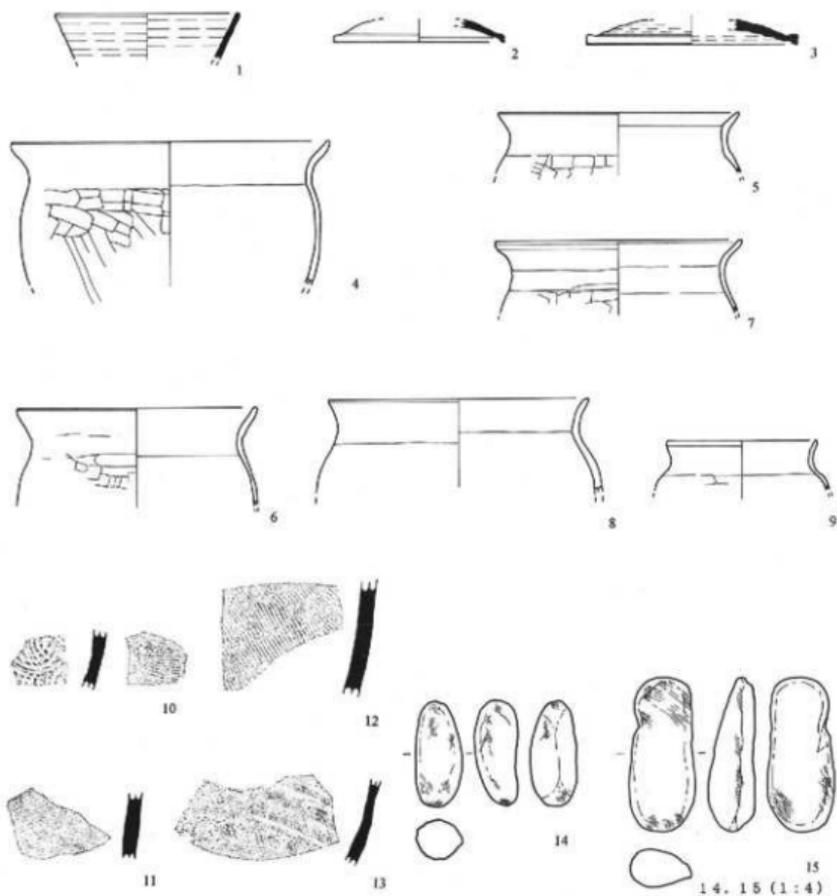
第1表 H1号住居址遺物観察表

番号	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	番号	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
6	磨製石器	千枚岩	2.5	1.8	0.3	1.1	21	剥片	千枚岩	1.4	4.5	0.45	3.2
7	磨製石器	粘板岩	4.7	2.7	0.25	3.9	22	剥片	千枚岩	3.6	1.5	0.2	1
8	磨製石器	粘板岩	1.4	2.4	0.3	1	23	剥片	千枚岩	2.3	1.05	0.25	0.8
9	磨製石器	千枚岩	1.4	1.1	0.2	0.4	24	剥片	千枚岩	2.75	1.05	0.2	1
10	磨製石器	千枚岩	3.9	1.2	0.25	1.1	25	剥片	礫砂岩	3.6	2.6	0.35	3.2
11	磨製石器	千枚岩	2.1	0.85	0.25	0.5	26	剥片	千枚岩	2.9	1.5	0.3	1
12	打製石斧	輝石安山岩	15.3	10.8	2.9	420	27	剥片	千枚岩	2.85	2.5	0.35	3
13	剥片	千枚岩	4.3	3.9	0.8	18.4	28	剥片	千枚岩	1.95	2.1	0.4	1.7
14	剥片	千枚岩	2.4	5.9	0.8	14.6	29	剥片	千枚岩	2.85	1.55	0.2	0.8
15	剥片	千枚岩	4.65	2.15	0.2	2.8	30	剥片	千枚岩	3.75	1.85	0.3	3
16	剥片	千枚岩	3.6	4.5	0.3	4.7	31	剥片	輝石安山岩	5.7	5.4	2.2	70.3
17	剥片	千枚岩	4.6	1.8	0.3	3.7	32	石核	チャート	5.9	4.5	3.7	107.3
18	剥片	千枚岩	1.8	1.9	0.5	2.3	33	石核	チャート	8.2	7.8	5.5	480
19	剥片	千枚岩	2.7	1.8	0.15	1	34	剥片	千枚岩	8.2	7.7	1.2	74.4
20	剥片	千枚岩	2.7	1.3	0.4	1.1	35	剥片	黒曜石	1.7	0.95	0.25	0.4

第2表 H1号住居址石器観察表

番号	出土位置	種別	長さ(mm)	径(mm)	孔径(mm)	重量(g)	材質	色調
36	野区	土玉	14.8	14.5	2	2.5	土製	鈍い褐色

第3表 H1号住居址土玉観察表



第14図 II 2号住居址遺物実測図

番号	器種	器形	口径cm	底径cm	器高cm	器壁・文様	残存部・部位	器底	器色 (内面)
1	須恵器	杯	[14.9]	-	-	ロタロナデ	口縁破片	良好	黒色 灰色
2	須恵器	盃	[13.8]	-	-	ロタロナデ	破片	良好	灰色 灰色
3	須恵器	盃	[17.0]	-	-	ロタロナデ	破片	良好	灰色 灰色
4	土師器	壺	[25.6]	-	-	口縁破ナデ 外壁ヘラナデ 内面ヘラナデ	口縁・口縁破片	良	褐色 褐色

第4表 II 2号住居址遺物観察表(1)

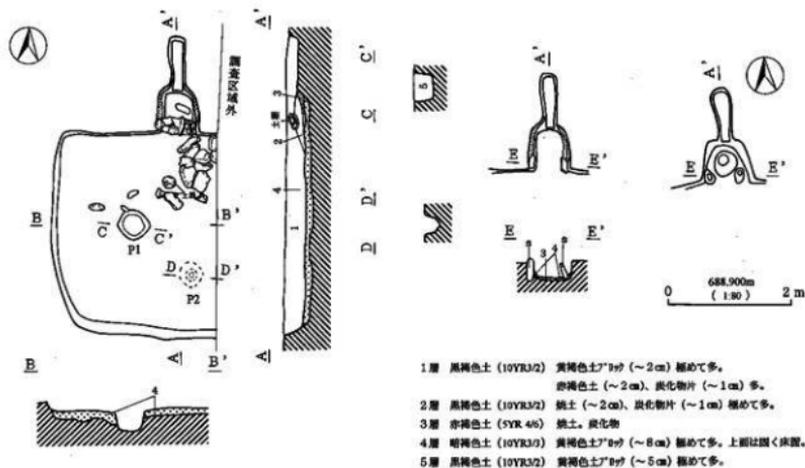
5	土師器	壺	[19.4]	-	-	口辺横ナデ 外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	口縁~胴部破片	良	赤褐色 灰褐色
6	土師器	壺	[19.2]	-	-	口辺横ナデ 外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	口縁~胴部破片	良	鈍い赤褐色 鈍い赤褐色
7	土師器	壺	[20.0]	-	-	口辺横ナデ 外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	口縁~胴部破片	良	鈍い赤褐色 鈍い赤褐色
8	土師器	壺	[20.5]	-	-	口辺横ナデ	口縁~胴部破片	良	鈍い赤褐色 鈍い赤褐色
9	土師器	小型壺	[12.1]	-	-	口辺横ナデ 外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	口縁~胴部破片	良	灰褐色 灰褐色
10	須恵器	-	-	-	-	外面平行タタキ 内面同心円当具痕	破片	良好	灰色 灰色
11	須恵器	-	-	-	-	外面平行タタキ・自然輪付着	破片	良好	赤褐色 赤褐色
12	須恵器	-	-	-	-	外面平行タタキ・自然輪付着	破片	良好	灰褐色 灰褐色
13	須恵器	-	-	-	-	外面平行タタキ・自然輪付着	破片	良好	灰色 暗灰色

第5表 H2号住居址遺物観察表(2)

番号	器種	石材	長さ(m)	幅(cm)	厚さ(m)	重量(g)	番号	器種	石材	長さ(m)	幅(cm)	厚さ(m)	重量(g)
14	磨り石	輝石安山岩	8.5	3.7	3.5	147.2	15	磨き石	ホルンヘルス	12.5	5.3	3.7	340

第6表 H2号住居址石類観察表

H3号住居址

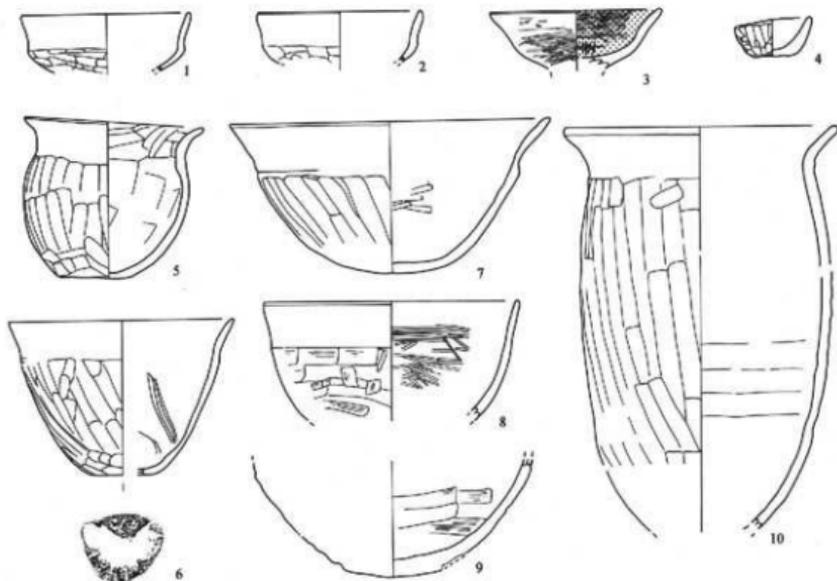


第15図 H3号住居址実測図

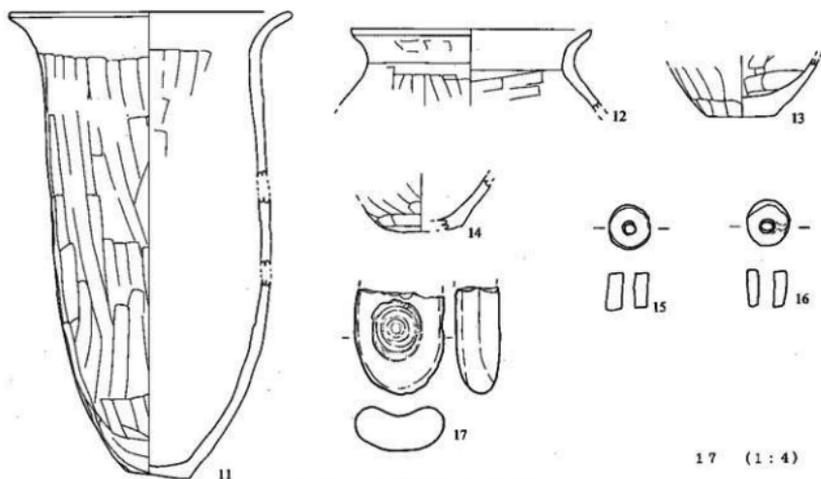
遺構はE区え-103グリッドに位置し、東側は調査区外となる。形態は確認状況から方形と考えられる。規模は南北3.3m、東西は確認規模で2.6m、床面までの深さは35cm内外を測る。床面はほぼ平坦で固くしまっている。ピットは床面上で1個、掘方で1個確認でき、P1は主柱穴と思われ、深さは40cmを測る。カマドは北壁に構築され、火床部は北壁から東西60cm、南北70cmの規模で張り出し、煙道は更に80cm北にのびる。火床には焼土が堆積し、支脚と思われる石が横たわっていた。焚き口部の両袖先端には補強として石材が埋め込まれ、両石材上部に土師器壺を2個連結し天井として使用していた。またカマド手前の住居址床面上に

は、径40cm内外の河原石を中心とする集石が存在した。集石の性格は不明である。掘方は全体に12cmほどの厚みを持ち、非常に固くしまった黄褐色土ブロックを含む暗褐色土を埋め込み、上面を床面として利用していた。

遺物は土師器の坏・甕・鉢・瓶、白玉、凹石が出土した。図示したのは17点である。1、2は明瞭な稜を有する坏で、1は底部を欠損し、2は口縁から体部にかけての破損品である。口辺は稜から僅かに外傾し、口縁附近でやや内傾気味に立ち上がる。3は高坏の坏部破片である。坏底部から丸みを持って立ち上がり口縁付近で更に外傾する。外面ミガキ、内面ミガキ・黒色処理を施し光沢を持つ。4はミニチュアの手づくね土器で外面はヘラ削りを施す。5は小型甕でヘラ削りされた平らな底部から丸みを持って立ち上がり、頸部に緩やかに外反し口縁部に至る。6は底部多孔式の甕で底部の一部は破損している。7、8、9はやや大型の鉢で7は残存率良好で丸底の底部から開き気味に立ち上がり、体部と口辺の境に稜による僅かな段を持った後、ほぼ同角度で口縁部に立ち上がる。8は口縁から体部にかけての破片、9は底部から体部にかけての破損品である。8は7に比してやや小ぶり、9は7とほぼ同型体と考えられる。10、11は長胴甕でともに最大径が口縁部にくる。10は底部破損品で、胴部は緩やかな曲線で立ち上がり、口縁は「く」の字を呈する。11は小径の底部から開き気味に立ち上がり、胴中央部からほぼ直線的に立ち上がり、口縁部は「く」の字を呈する。12は甕の口縁破片である。13、14は甕の底部と考えられる。15、16は滑石製の白玉、17は凹石で楕円形の3分の1程度が欠損しており、中央部に窪みが認められる。本住居址は7c前半、古墳時代後期の住居址と考えられる。



第16図 H3号住居址遺物実測図(1)



第17図 H3号住居址遺物実測図(2)

番号	器種	器形	口径cm	底径cm	器高cm	調査・文様	残存率・部位	焼成	色調(外側) 内側
1	土師器	杯	[13.8]	-	-	口辺横ナア 外面ヘナナナ 内面ヘナナナ	口縁50	良	鈍い褐色 鈍い黄褐色
2	土師器	杯	[13.5]	-	-	口辺横ナア 外面ヘナナナ 内面ヘナナナ	口縁破片	良	鈍い褐色 褐色
3	土師器	高杯	[14.0]	-	-	内外面ミガキ 内面黒色地埋	杯底25	良	明褐色 黒色
4	てづくね	鉢形	6.2	3.6	3.1	外面ヘナナナ 内面ナア	100	良	褐色 褐色
5	土師器	小型壺	[14.6]	[6.0]	12.8	口辺横ナア 外面ヘナナナ 内面ヘナナナ	40	良	赤褐色 褐色
6	土師器	瓶	18.3	5.1	12.5	口辺横ナア 外面ヘナナナ 内面ヘナナナ	90	良	鈍い褐色 鈍い褐色
7	土師器	鉢	26	9.底	12.3	口辺横ナア 外面ヘナナナ 内面ヘナナナ	60	良	鈍い黄褐色 鈍い黄褐色
8	土師器	鉢	[10.5]	-	-	口辺横ナア 外面ヘナナナ 内面ミガキ	口縁~体部破片	良	淡黄褐色 赤褐色
9	土師器	鉢	-	9	-	外面ヘナナナ 内面ハナナナ	底部~体部	良	鈍い褐色 鈍い褐色 灰白色
10	土師器	壺	22	-	-	口辺横ナア 外面ヘナナナ 内面ヘナナナ	80	良	鈍い褐色 褐色
11	土師器	壺	23.2	5.2	28.2	口辺横ナア 外面ヘナナナ 内面ヘナナナ	80	良	鈍い褐色 褐色
12	土師器	壺	[19.4]	-	-	口辺横ナア 外面ヘナナナ 内面ヘナナナ	口縁~頸部破片	良	淡黄褐色 淡黄褐色
13	土師器	壺	-	5.6	-	外面ヘナナナ 内面ヘナナナ	底部~頸部	良	赤褐色 赤褐色
14	土師器	壺	-	6.6	-	外面ヘナナナ 内面ヘナナナ	底部破片	良	明褐色 赤褐色

第7表 H3号住居址遺物観察表

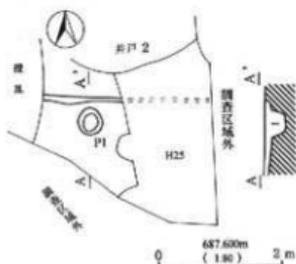
番号	出土位置	種類	長さ(mm)	径(mm)	孔径(mm)	重量(g)	材質	色調
15	Ⅱ区床上	白玉	7	8.5	2.15	0.9	滑石	灰白色
16	Ⅱ区床上	白玉	6.9	8.4	2.5	0.9	滑石	灰黄色

第8表 H3号住居址玉類観察表

番号	器種	石材	長さ(mm)	幅(cm)	厚さ(mm)	重量(g)
17	凹石	安山岩	8.65	7.2	3.6	300

第9表 H3号住居址石類観察表

H 4号住居址

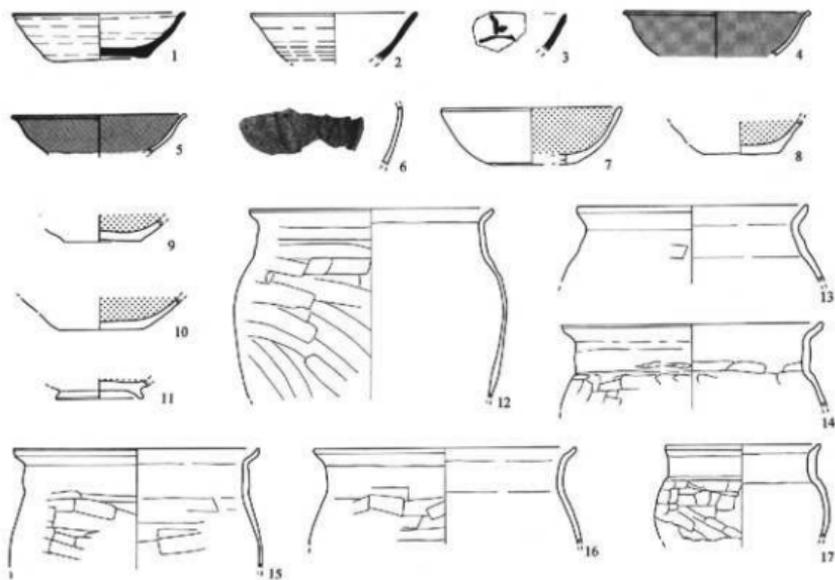


1層 五洲色土 (H99X02) 灰化層 (~5cm), F-JK層部。
第18図 H 4号住居址実測図

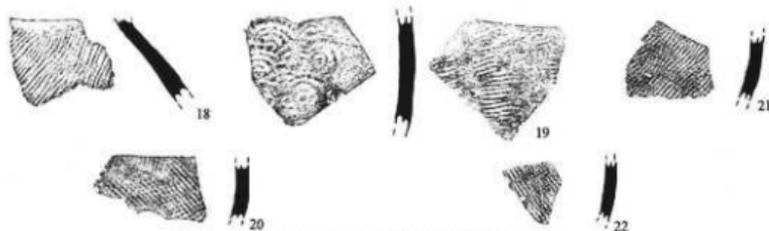
遺構はE区え-106グリッドに位置する。西は攪乱、南及び東側は調査区外となり、東はH25を切る。確認できたのは一部の北壁と僅かな床面で、北壁長2.8m、床面までの深さは12cmを測る。床面は固く、ピットが1個認められた。その他、カマド等の施設は確認できなかった。

遺物は土師器の坏・甕、須恵器の坏・甕、灰釉陶器が出土した。図示したのは22点である。1~3は須恵器の坏で、1は回転切りの底部から開き気味に立ち上がる。2、3は口縁付近の破片である。4~6は灰釉陶器で4、5は口縁付近の破片、6は甕の胴部破片である。7~10は土師器の坏で7は底部から口縁の破片、8、9、10は底部から体部にかけての破片で8、

9は底部回転切り、内面黒色処理を施す。10は底部へら削り、内面黒色処理を施す。11は碗で糸切り後高台張り付け、内面黒色処理を施す。12~16は甕の口縁から胴部にかけての破片で、器厚が薄く作られた武藏型の甕で口縁の形態は13を除き「コ」の字状を呈する。14、15は同一個体の可能性が考えられる。17は小型甕の口縁から胴部にかけての破片で、外面横、斜め方向のへら削りを施し、口縁は「コ」の字を呈する。18~22は須恵器甕の破片である。本住居址は平安時代、9世紀後半と考えられる。



第19図 H 4号住居址遺物実測図(1)



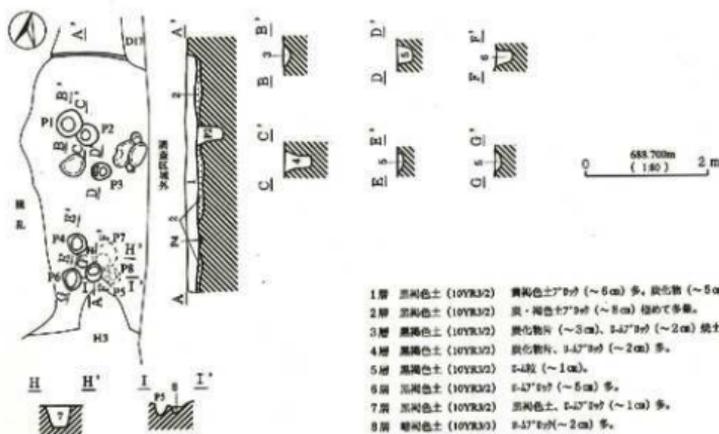
第20図 H4号住居址遺物実測図(2)

番号	器名	器形	口径cm	底径cm	器高cm	図 形・文 様	残存率・部位	規 定	色調(外観) (内観)
1	須恵器	杯	14.1	3.7	7.8	底面同心糸切り コクログナデ	80	良好	----- 緑灰色 緑灰色
2	須恵器	杯	[13.0]	—	—	コクログナデ	口縁破片	良好	----- 緑灰色 黒灰色
3	須恵器	杯	—	—	—	コクログナデ 外面黒書「上」	破片	良好	----- 赤灰色 赤灰色
4	灰釉陶器	碗	[15.0]	—	—	コクログナデ 内外黒灰釉	口縁破片	良好	----- 灰オリーブ色 灰オリーブ色
5	灰釉陶器	碗	[14.0]	—	—	コクログナデ 内外黒灰釉	口縁破片	良好	----- 灰白色 灰白色
6	灰釉陶器	皿	—	—	—	外面黒灰釉	割縁破片	良好	----- 明緑白色 灰白色
7	土師器	杯	[14.4]	—	4.5	内面黒色地埋	割縁破片	良好	----- 明緑白色 灰白色
8	土師器	杯	—	6	—	内面黒色地埋	底面・体部破片	良	----- 明緑白色 黒色
9	土師器	杯	—	6.5	—	底面同心糸切り 内面黒色地埋	底面・体部破片	良	----- 明緑白色 黒色
10	土師器	杯	—	6.5	—	底面同心糸切り 内面黒色地埋	底面・体部破片	良	----- 明緑白色 黒色
11	土師器	碗	—	7.1	—	底面同心糸切り 黄土張り付 内面黒色地埋	底面100	良	----- 明緑白色 明緑白色
12	土師器	碗	[19.8]	—	—	口辺線ナデ 外面ヘラ張り 内面ヘラナデ	口縁・器部破片	良	----- 赤褐色 緑・赤褐色
13	土師器	壺	[18.4]	—	—	口辺線ナデ 外面ヘラ張り	口縁・器部破片	良	----- 灰色 灰色
14	土師器	壺	[21.0]	—	—	口辺線ナデ 外面ヘラ張り 内面ヘラナデ	口縁・器部破片	良	----- 灰色 灰色
15	土師器	壺	[19.7]	—	—	口辺線ナデ 外面ヘラ張り 内面ヘラナデ	口縁・器部破片	良	----- 灰色 灰色
16	土師器	壺	[20.9]	—	—	口辺線ナデ 外面ヘラ張り 内面ヘラナデ	口縁・器部破片	良	----- 灰色 灰色
17	土師器	壺	[18.4]	—	—	口辺線ナデ 外面ヘラ張り 内面ヘラナデ	口縁・器部破片	良	----- 赤褐色 灰・赤褐色
18	須恵器	—	—	—	—	外面平行タタキ	割縁・器部破片	良	----- 赤褐色 赤褐色
19	須恵器	—	—	—	—	外面平行タタキ 内面同心凸出糸敷ナデ	割縁破片	良	----- 赤褐色 赤褐色
20	須恵器	—	—	—	—	外面平行タタキ	割縁破片	良	----- 赤褐色 赤褐色
21	須恵器	—	—	—	—	外面平行タタキ	割縁破片	良	----- 赤褐色 赤褐色
22	須恵器	—	—	—	—	外面平行タタキ	割縁破片	良	----- 赤褐色 赤褐色

第10表 H4号住居址遺物観察表

H5号住居址

遺構はE区エー102グリッドに位置する。西は攪乱に破壊され、東は調査区外となり、H3、D13に切られる。規模、平面形は不明で、床面までの深さは12cm内外を測る。壁際に周溝は認められず、床面は固い。ピットは床面上で6個、掘方で2個確認できた。遺構の全体像不明のため主柱穴であるかは確定できない。カマドは確認できなかった。掘方は5～15cmの厚みで炭、褐色ブロックを多量に含む黒褐色土が埋め込まれ、上面を床面として利用していた。

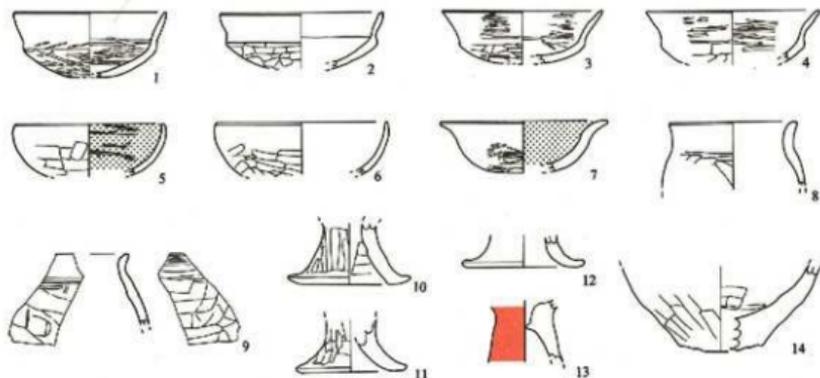


- 1層 赤褐色土 (10YR3/2) 黒褐色土79% (~5cm) 多, 炭化物 (~5cm).
- 2層 赤褐色土 (10YR3/2) 灰・褐色土79% (~8cm) 極めて多量.
- 3層 黒褐色土 (10YR3/2) 炭化物片 (2-3cm), 2-47°9分 (~2cm) 焼土粒 (~1cm) 多.
- 4層 黒褐色土 (10YR3/2) 炭化物片, 2-47°9分 (~2cm) 多.
- 5層 黒褐色土 (10YR3/2) 2-4粒 (~1cm).
- 6層 赤褐色土 (10YR3/2) 2-47°9分 (~5cm) 多.
- 7層 赤褐色土 (10YR3/2) 赤褐色土, 2-47°9分 (~1cm) 多.
- 8層 赤褐色土 (10YR3/2) 2-47°9分 (~2cm) 多.

第21図 H5号住居址実測図

遺物は土師器の坏・壺・鉢・高坏が出土した。図示したのは14点である。1~7は坏である。1~4は明瞭な稜を有する坏で、稜の上部はやや外傾し口縁付近でやや内傾気味に立ち上がる。2をのぞき外面底部から体部にかけて、へら削り後ミガキを施し光沢を持つ。口辺及び内面にもミガキが施される。5、6は稜を持たない丸底の坏で5は内面黒色処理、ミガキを施す。7は丸底の底部から立ち上がり口縁付近で大きく反する。外面ミガキ、内面黒色処理を施す。8は小型甕の口縁破片と思われる。9は鉢の口縁付近の破片、10~13は高坏脚部の破損品である。13は外面赤色塗彩を施す。14は壺の底部破片である。

本住居址は6c後半、古墳時代後期と考えられる。

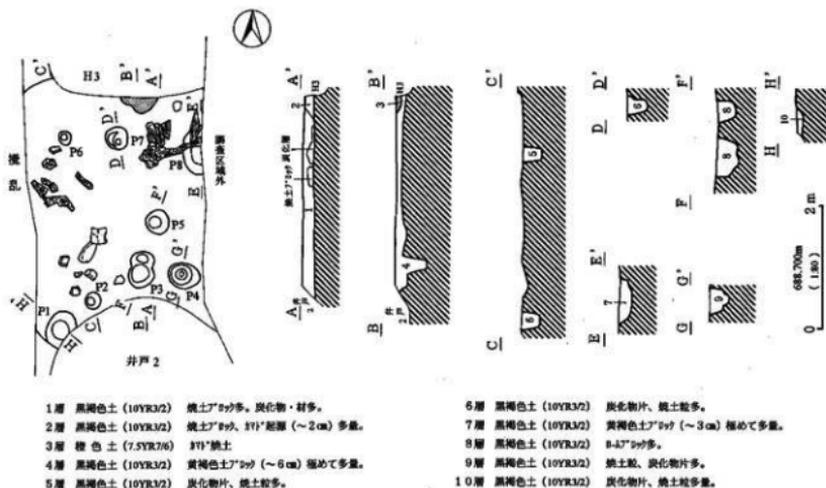


第22図 H5号住居址遺物実測図

番号	器種	器形	口径cm	底径cm	高さcm	調査文様	残存率・部位	長さ	色調 (外側) (内側)
1	土師器	坏	[12.3]	丸底	5.2	口辺ミガキ 外面ヘラ削り後ミガキ 内面ミガキ	40	良	褐色 赤色
2	土師器	坏	[13.2]	-	-	口縁横ナデ 外面ヘラ削り	25	良	褐色 赤色
3	土師器	坏	[13.0]	-	-	口辺内外面ミガキ 外面ヘラ削り後ミガキ 内面ミガキ	口縁~体部破片	良	明赤褐色 鈍い赤褐色
4	土師器	坏	[14.0]	-	-	口辺内外面ミガキ	口縁破片	良	褐色 赤色
5	土師器	坏	[11.8]	-	-	口縁横ナデ 外面ヘラ削り 内面ミガキ・黒色処理	口縁~体部破片	良	黄褐色 赤褐色
6	土師器	坏	[13.8]	-	-	口縁横ナデ 外面ヘラ削り	口縁~体部破片	良	明赤褐色 灰白色
7	土師器	坏	[13.6]	-	-	口縁横ナデ 外面ミガキ 内面ミガキ・黒色処理	口縁~体部破片	良	鈍い赤褐色 赤褐色
8	土師器	小皿	[10.4]	-	-	口辺横ナデ 外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	口縁~胴部破片	良	鈍い赤褐色 明赤褐色
9	土師器	鉢	-	-	-	口辺横ナデ 外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	破片	良	鈍い赤褐色 灰褐色
10	土師器	高坏	-	[10.0]	-	胴部外面ヘラ削り 内面ヘラナデ 縦線横ナデ	胴部50	良	褐色 赤褐色
11	土師器	高坏	-	[9.0]	-	胴部外面ヘラ削り 内面ヘラナデ 縦線横ナデ	胴部破片	良	褐色 赤褐色
12	土師器	高坏	-	[10.0]	-	胴部外面ヘラ削り 内面ヘラナデ 縦線横ナデ	胴部破片	良	明赤褐色 明褐色
13	土師器	高坏	-	-	-	胴部外面ミガキ・赤色塗布 外面ヘラナデ	胴部破片	良	赤褐色 明赤褐色
14	土師器	甕	-	[6.8]	-	外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	底部破片	良	暗赤褐色 明黄褐色

第11表 H 5号住居址遺物観察表

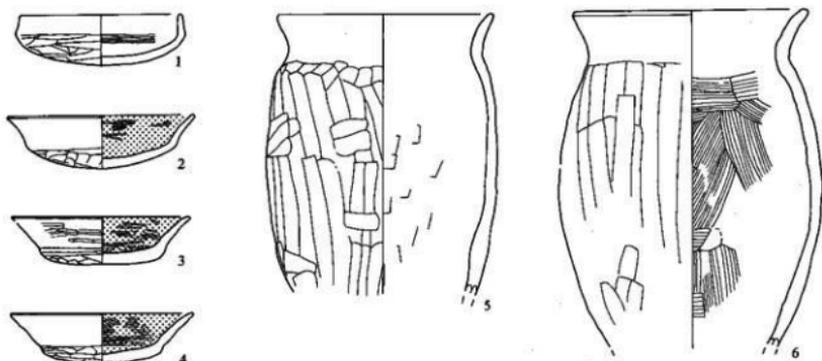
H 6号住居址



遺構はE区えー104グリッドに位置する。西は攪乱に破壊され、東は調査区外となり、北をH3、南を2号井戸跡に切られる。規模、平面形、壁高は確認できない。床面は固く、床直上に炭化材、炭化物、焼土が多く認められた。焼失住居と考えられる。また炭化物、焼土の範囲から北西、南西コーナー付近と思われる住

居址の壁ラインが一部確認できた。床面上では東調査区外との境から土坑が1基認められたが、ピットは確認できなかった。カマド自体は確認できなかったが、北側H3との切り合い境に焼土の堆積が認められることから北カマドの可能性が高い。掘方は5～10cmの厚みで、黄褐色土ブロックを多量に含む黒褐色土が埋め込まれ、上面を床面として利用していた。掘方からピット8個が確認できた。

遺物は土師器の坏、甕が出土した。図示したのは6点である。1は明瞭な稜を有する坏で、後からやや内傾気味に口縁部に至る。2～4は坏で明瞭な稜からやや外反気味に開口縁部に至る。内面黒色処理を施す。5、6は長胴甕で5は胴下半部欠損、6は口縁から胴部にかけて3分の1程度残存し、胴中央部がやや丸みを持って膨らみ最大径となる。本住居址は6c後半、古墳時代後期と考えられる。

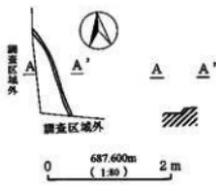


第24図 H6号住居址遺物実測図

番号	器種	器形	口径cm	底径cm	器高cm	調査・文様	残存率・部位	焼成	色調(外側) (内側)
1	土師器	坏	13.2	丸底	4.1	口辺横ナゲ 外面ヘウ削り 内面ミガキ	90	良	黒褐色 鈍い赤褐色
2	土師器	坏	15.3	丸底	4.3	口辺ミガキ 外面ヘウ削り 内面ミガキ・黒色処理	70	良	褐色 黒色
3	土師器	坏	14.4	丸底	4.9	口辺内外面ミガキ 外面ヘウ削り 内面ミガキ・黒色処理	60	良	褐色 黒色
4	土師器	坏	[15.4]	—	—	口辺横ナゲ 外面ヘウ削り 内面ミガキ・黒色処理	40	良	褐色 黒色
5	土師器	甕	17.5	—	—	口辺横ナゲ 外面ヘウ削り 内面ヘウナゲ	70	良	褐色 黄褐色
6	土師器	甕	19.1	—	—	口辺横ナゲ 外面ヘウ削り 内面ハケメナゲ	40	良	褐色 明黄褐色

第12表 H6号住居址遺物観察表

H7号住居址

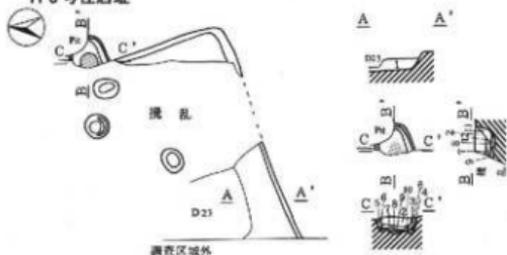


第25図 H7号住居址実測図

遺構はF区南端のお-118グリッドに位置する。西、南側は調査区外で確認されたのは東壁らしき壁面と僅かな床面と思われる平坦面である。本遺構は確認部が僅かなため、土坑の可能性も考えられるが今回は住居址として取り扱う。規模、平面形は確認できない。壁高は10cm内外を測る。

遺物は検出時に土師器の小破片が僅かに出土したが、本住居址に伴うかは不明である。

H 8号住居址

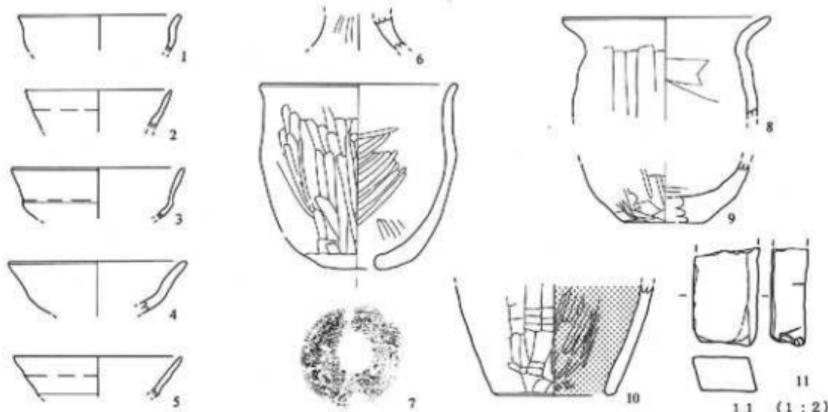


- 1層 軽褐色土 (10YR3/5) 砂、炭化物。
- 2層 黒褐色土 (10YR2/5) 炭化物、焼土。
- 3層 灰褐色土 (10YR4/3) 炭化物、焼土少量。
- 4層 褐色土 (10YR4/4) 砂質70%。
- 5層 暗赤褐色土 (5YR 3/6) 砂質焼土。
- 6層 暗赤褐色土 (5YR 3/4) 焼土粒、焼土70%。
- 7層 暗赤褐色土 (5YR 3/4) 焼土粒、焼土70%。
- 8層 暗赤褐色土 (5YR 3/4) 焼土粒多。
- 9層 暗赤褐色土 (2.5YR3/6) 火床焼土層。
- 10層 灰褐色土 (10YR4/3) 砂多、焼土少量。
- 11層 暗褐色土 (10YR3/4) 砂質土、焼土。
- 12層 暗褐色土 (10YR3/4) 砂質土、炭化物。37°傾斜。

第26図 H 8号住居址実測図

遺構はF区南-east-116グリッドに位置し、西は調査区外となる。付近は大きく攪乱に破壊されている。確認できたのは南東コーナー、東壁、カマドの一部及び南壁の一部、僅かな床面である。平面形は方形と考えられるが、規模は不明である。床面までの深さは残存する南壁で8cmを測る。床面は固く平坦である。ピットは攪乱直下から3個確認できたが、主柱穴かは不明である。カマドは東壁に構築され、火床部が壁外に張り出す形状である。煙道付近は単独ピットに切れ、焚き口部より西側は攪乱に破壊されている。火床中央付近には円形に焼土の堆積が認められ、カマド内壁部は全体に固く焼き締まっている。掘方は確認できた部分で15cmの厚みをもち、砂、炭化物を含む締まった暗褐色土を埋め込み、上面を床として利用していた。

遺物は土師器杯・高坏・甕・甕が出土した。図示したのは11点である。1～5は稜を有する杯の口縁破片で、1は稜からやや直上し口縁附近で外反する。2～5は稜からやや開き気味の立ち上がる。6は高坏脚部の破片である。7は鉢の底部に穴をあけ甕として利用している。外面縦方向のヘラ削り、内面細長い斜め方向のヘラミガキを施す。8は甕の口縁から胴部にかけての破片で外面縦方向のヘラ削りを施す。9は厚底の甕底部破片である。10は甕底部の破片で外面縦方向のミガキ、内面縦方向のミガキ、黒色処理を施す。11は安山岩製の敷き石と思われる。本住居址は6c後半～7c前半、古墳時代後期と考えられる。



第27図 H 8号住居址遺物実測図

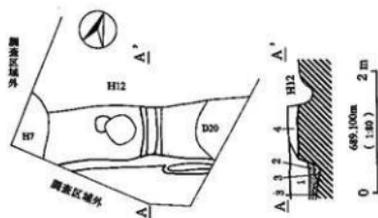
番号	器種	器形	口径cm	底径cm	器高cm	調整・文様	残存率・部位	焼成	色調(外側) (内側)
1	土師器	坏	[13.2]	-	-	口辺横ナデ 外面ヘラ削り 内面横ナデ	口縁-胴部破片	良	褐色 明褐色
2	土師器	坏	[12.0]	-	-	口辺横ナデ	口辺破片	良	明褐色 鈍い黄褐色
3	土師器	坏	[14.0]	-	-	口辺横ナデ 外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	口縁-胴部破片	良	明黄褐色 褐色
4	土師器	坏	[14.4]	-	-	磨耗して不明	口縁-胴部破片	良	褐色 磨り黄褐色 鈍い黄褐色
5	土師器	坏	[13.6]	-	-	口縁横ナデ	口辺破片	良	明黄褐色 鈍い黄褐色
6	土師器	高坏	-	-	-	胴部外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	胴部破片	良	褐色 黄色
7	土師器	甗	[16.0]	5.5	15	口縁横ナデ 外面ヘラ削り 内面縦いヘラナデ	30	良	鈍い黄褐色 淡黄褐色
8	土師器	甗	[16.8]	-	-	口辺横ナデ 外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	口縁-胴部破片	良	明赤褐色 鮮褐色
9	土師器	甗	-	6.5	-	外面ヘラ削り ナデ 内面ヘラナデ	底部破片	良	明赤褐色 褐色
10	土師器	甗	-	[9.8]	-	外面ヘラ削り 内面ミガキ・黒色処理	底部付破片	良	鮮褐色 黒色

第13表 H 8号住居址遺物観察表

番号	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
11	煮き石	安山岩	7.9	5.25	2.85	210

第14表 H 8号住居石類観察表

H 9号住居址



- 1層 黒褐色土(10YR2/3) 炭化物少量。
- 2層 暗褐色土(10YR3/3) 炭土・炭化物多量。火床。
- 3層 暗褐色土(10YR3/4) 炭土・炭化物少量。H11'下方
- 4層 暗褐色土(10YR3/3) 炭土・炭化物少量。H11'経道。



第28図 H 9号住居址・遺物実測図

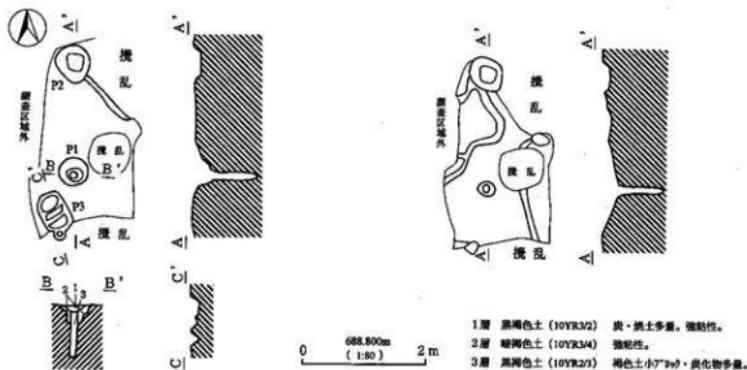
遺構はF区南端えー118グリッドに位置する。確認できた範囲は北壁に構築されたカマド周辺の一部分及び煙道である。規模、平面形は不明である。壁高は35cm内外を測る。カマド本体は破壊され形状は不明だが、火床と思われる位置に焼土の堆積が認められた。煙道はカマド火床から北壁に沿って15cm立ち上がった後、幅30cm、深さ15cmで北に70cm延び、先端部はH12に切られる。カマド火床の東壁際には周溝と思われる溝が僅かに確認できた。

遺物は完形品はなく土師器片が出土した。図示したのは3点である。1は高坏坏部の口縁破片である。2は高坏脚部の破片で、外面に縦方向の細いミガキを施す。3は鉢の底部破片と思われる。本住居址は古墳時代と考えられる。

番号	器種	器形	口径cm	底径cm	器高cm	調整・文様	残存率・部位	焼成	色調(外側) (内側)
1	土師器	高坏	[12.0]	-	-	坏部口辺横ナデ 外面ヘラ削り 内面黒色処理	坏部破片	良	鈍い褐色 灰褐色
2	土師器	高坏	-	-	-	脚部外面ミガキ 内面ヘラナデ	脚部破片	良	明赤褐色 褐色
3	土師器	鉢	-	-	-	外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	底部破片	良	淡黄褐色 褐色

第15表 H 9号住居址遺物観察表

H10号住居址



第29図 H10号住居址実測図

遺構はF区お-115グリッドに位置する。西側は調査区外、その他周辺は攪乱によって大きく破壊されている。確認できたのは僅かな東壁と床面で、規模、平面形は不明である。床面は固く、ピットは3個確認できたが、確認規模が僅かなためいずれも支柱穴であるかの確定はできない。遺物は完形品はなく、土師器の破片が出土した。図示したのは3点である。1は明瞭な稜を有する坏で体部に稜を持った後口辺は直上し立ち上がる。2は丸底の坏で外面へラ削り後ナデ、内面ミガキを施す。3は甕の底部周辺の破片である。本住居址からは古墳時代5～7cの遺物が認められた。



第30図 H10号住居址遺物実測図

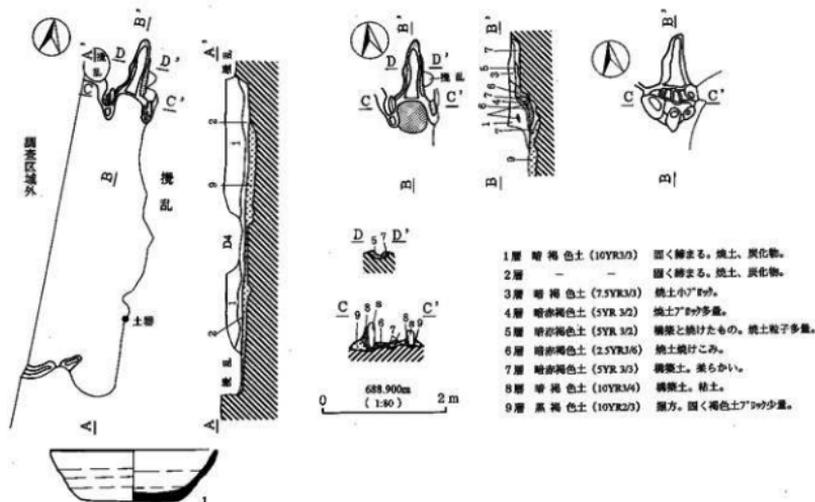
番号	器種	器形	口径cm	底径cm	器高cm	調査・文様	残存率・部位	焼成	色調 (外側) (内側)
1	土師器	坏	[12.4]	-	-	口辺後ナデ 外面へラ削り 内面ナデ	口縁-体部破片	良	明黄褐色 暗褐色
2	土師器	坏	[13.6]	-	-	外面へラ削り 内面ミガキ	口縁破片	良	褐色 明黄褐色
3	土師器	甕	-	[8.5]	-	外面へラ削り 内面へラナデ	底部破片	良	褐色 明黄褐色

第16表 H10号住居址遺物観察表

H11号住居址

遺構はF区お-114グリッドに位置する。西側は調査区外、東側は攪乱に大きく破壊されて、D12に切られる。確認できたのはカマドと一部の床面で、正確な規模、平面形は不明である。床面までの掘り込みは40cm内外を測り、床面は固い。ピットは確認できなかった。カマドは北壁に構築され袖の一部及び火床、煙道が残存していた。袖は北壁から内側に50cmほど入り込み粘土を構築材の主体とし、火床を積み込んでいる。火床には円形に焼土の堆積が認められた。煙道は火床からやや立ち上がった後北壁外80cmまでのび立ち上がる。煙道側面の壁面は火を受け赤く焼き締まっていた。掘方は5～15cmの厚みがあり、黒褐色土、褐色土が埋め込まれ上面を床面として利用していた。

遺物は土師器の坏・壺と須恵器が僅かに出土したが、ほとんどが小破片である。図示したのは1点である。1は須恵器の坏で口縁部が一部破損している。形態はヘラ削りされた底部からやや開き、内碗気味に立ち上がる。本住居址は、薄く仕上げた甕の存在及び須恵器坏の特徴から8世紀中頃と考えられる。



第31図 H11号住居址・遺物実測図

番号	器種	器形	口径cm	底径cm	高さcm	調査・文様	残存率・部位	焼成	色調 (外側) (内側)
1	須恵器	坏	13.6	7.7	4.2	底部ヘラ削り ロクロナデ	50	良	薄オリーブ灰色 薄オリーブ灰色

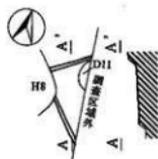
第17表 H11号住居址遺物観察表

H12号住居址

遺構はF区えー117グリッドに位置し、東西方向は調査区外となり、北側はH 8に、住居内はD23・26と切り合い関係にあるが、新旧は不明である。確認できたのは南壁の一部と住居址掘方の掘り込みで、床面は既に認められなかった。ピットは4個確認できたが本住居址に関係するかは不明である。

遺物は完形品はなく、土師器片、須恵器片が出土し土師器片が大半を占める。図示したのは9点である。1は須恵器の甕で天井部周辺の破片である。2～4は坏で、2は底部から丸みを持って立ち上がり、口縁付近で外反する。外面はヘラ削り後のナデにより光沢を持ち、内面は黒色処理、ミガキを施す。3、4は明瞭な稜を有する坏で他の土器に比してやや新しいため混入の可能性がある。3は体部に稜を持った後、口辺部はやや外傾し立ち上がる。4は明瞭な稜を持った後口辺部は直上する。5は坏の底部付近の破片と考えられ、外面ヘラ削り後ミガキを施し、部分的に光沢を持つ。内面は黒色処理、ミガキを施す。6は甕の口縁付近の破片である。7は小型壺の口辺部から体部の破片で内外面ミガキにより光沢があり、外面口縁付近、内面に黒色処理を施す。外面は横方向のミガキを施し光沢を持つ。内面は輪積み痕が認められる。8は鉄製の鎌と考えられ、長さ15.0cm、最大幅3.35cm、厚さは刃先の背で0.42cm、重さ92.6gを測る。9は滑石製の白玉である。本住居址は6c中頃、古墳時代後期と考えられる。

H13号住居址

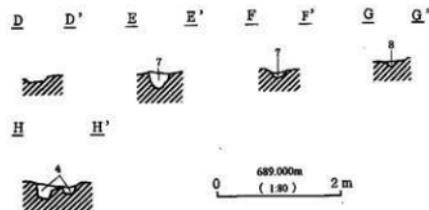
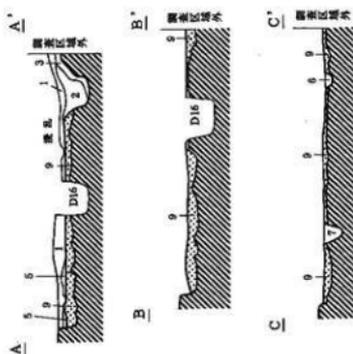
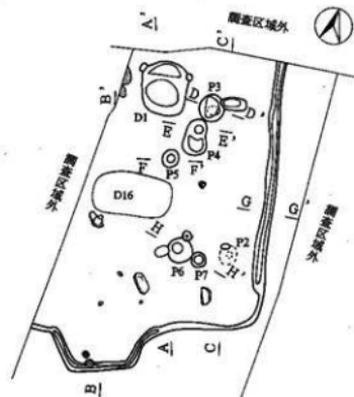


遺構はF区え-117グリッドに位置し、住居の大半が西側調査区外に入り込むため、確認できたのは北西コーナーの僅かな壁と床面で、そのコーナーもH8に僅か切られる。確認できた規模は北壁40cm、西壁60cm、深さは10cm内外を測る。床面と考えられる底面は、ほぼ平坦で固さを持つ。

遺物は土師器片が僅かに出土したが本住居址に伴うかは不明である。

0 689.100m (1:80) 2m 第33図 H13号住居址実測図

H14号住居址

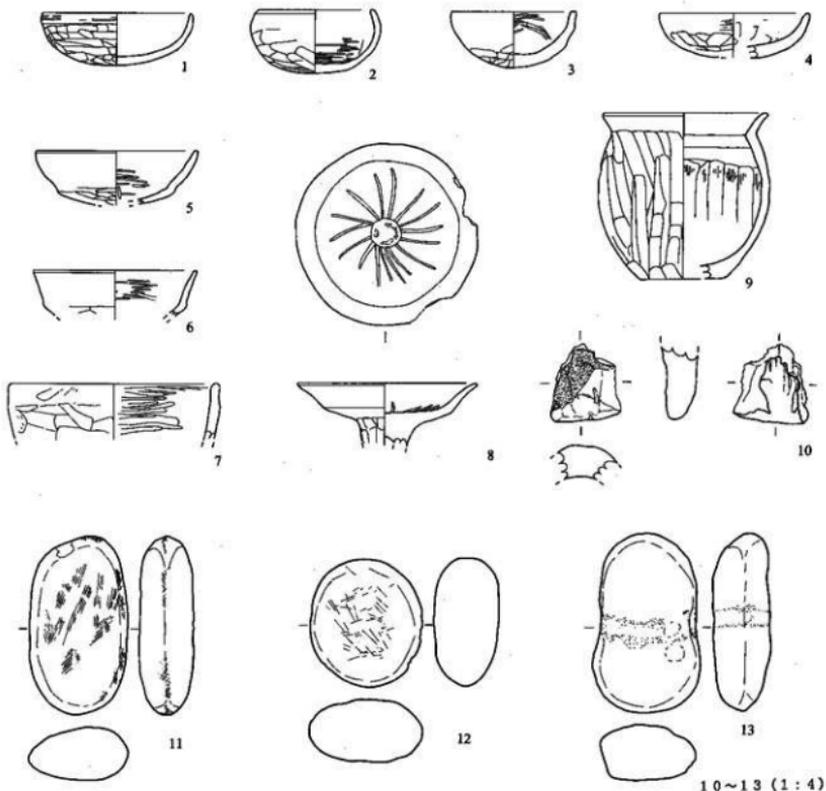


- | | |
|--------------------|--|
| 1層 黒褐色土 (10YR2/0) | 細かい黄褐色土アワック、赤褐色土アワック少量。D 8 以北炭化物多。強粘性。 |
| 2層 黒褐色土 (10YR2/0) | 炭化物・焼土小アワック少量。粘質土。 |
| 3層 黒褐色土 (10YR2/0) | 焼土小アワック・炭化物多。粘質土。 |
| 4層 暗赤褐色土 (10YR3/4) | 細かい黄褐色土アワック多。強粘性。 |
| 5層 黒褐色土 (10YR2/0) | 褐色土小アワック。固い。 |
| 6層 暗褐色土 (10YR3/0) | 砂質土。 |
| 7層 暗褐色土 (10YR3/0) | 焼土・炭化物粒子多。強粘性。 |
| 8層 暗褐色土 (10YR3/0) | 河溝。 |
| 9層 暗褐色土 (10YR3/0) | 暗赤褐色土・褐色土アワック多。固い。 |

0 689.000m (1:80) 2m 第34図 H14号住居址実測図

遺構はF区え-108グリッドに位置し、北、西側は調査区外となり、D16に切られる。確認できた規模は東壁4.4m、南壁4.1m、深さは20cm内外を測る。平面形は残存状況から南壁に張り出し部を持つ隅丸方形と思われる。壁際にはコーナー付近を除き周溝が存在する。床面は固く平坦である。床面上からはピット6個、土坑1基が、掘方からピット1個が確認できた。西側調査区外の際からは焼土の堆積が認められた。カマドは確認できなかった。掘方は8~16cmの厚みで、暗褐色土が埋め込まれ固く締まっており、上面を床面として利用していた。

遺物は土師器の坏・鉢・高坏・甕・羽口等が出土した。図示したのは13点である。1は丸底の坏で内外面とも黒みを帯び、外面へら削り、内面ミガキを施す。2は小型の鉢で内外面ともに黒みを帯び外面へら削り、内面ミガキを施す。3、4は丸底の坏で外面へら削り、内面ミガキを施す。5、6は明瞭な稜を有する坏の口縁破片である。5の口辺は開き気味に立ち上がり、口縁付近でやや内拗する。6の口辺は後から開き気味に立ち上がる。7は鉢の口縁破片と思われる。8は高坏である。坏部は一部欠損しているが完形に近い。脚部は坏部との接合部付近のみ残存している。坏部は脚部との接合部から開き気味に立ち上がり、口辺との境でやや角度が立ち、わずかに外反気味に立ち上がる。内面に中央の円から放射状に広がる暗文が施され特徴的である。9は小型甕で口辺横ナデ、外面縦方向のへら削りを施す。小型の底部から丸みを持って立ち上がり、頸部は「く」の字に折れ曲がり口縁に至る。10は羽口の破片で先端部の大半は欠損している。11は多目的石器、12は擦り石、13は編み物石である。本住居址は7c中頃、古墳時代後期と考えられる。



10~13 (1:4)

第35図 H14号住居址遺物実測図

番号	器種	器形	口径cm	底径cm	器高cm	調査・文様	残存率・部位	焼成	色調 (外側/内側)
1	土師器	坏	12.1	丸底	4.3	口縁横ナデ 外面へラ削り 内面ミガキ	95	良	灰黄色 黄い灰褐色
2	土師器	鉢	9.1	丸底	5.2	口辺横ナデ 外面へラ削り 内面ミガキ	90	良	灰黄色 灰黄色 灰黄色
3	土師器	坏	10	丸底	4.5	口辺横ナデ 外面へラ削り 内面ミガキ	100	良	灰黄色 褐色
4	土師器	坏 [12.0]	-	-	-	口縁横ナデ 外面へラ削り 内面ミガキ	口縁一帯破片	良	褐色 黄い褐色
5	土師器	坏 [12.1]	-	-	-	口辺横ナデ 外面へラ削り 内面ミガキ	口縁一帯破片	良	黄い褐色 黄い褐色
6	土師器	坏 [13.2]	-	-	-	口縁横ナデ 外面へラ削り	胴部破片	良	褐色 黄い褐色 灰黄色
7	土師器	鉢 [16.6]	-	-	-	口辺横ナデ 外面へラ削り 内面ミガキ	口辺部破片	良	灰黄色 灰黄色
8	土師器	高坏	14.6	-	-	口辺横ナデ 外面へラ削り 内面ミガキ	坏部90	良	褐色 赤灰色
9	土師器	壺 [13.3]	[6.8]	13.5	口辺横ナデ 外面へラ削り 内面ヘケナデ	60	良	赤灰色 黒褐色	
10	銅門	-	-	-	-	坏部口辺横ナデ 外面へラ削り 内面放射状文 胴部外面へラ削り 内面ヘラナデ	本器破片	良	黄い赤褐色 赤褐色

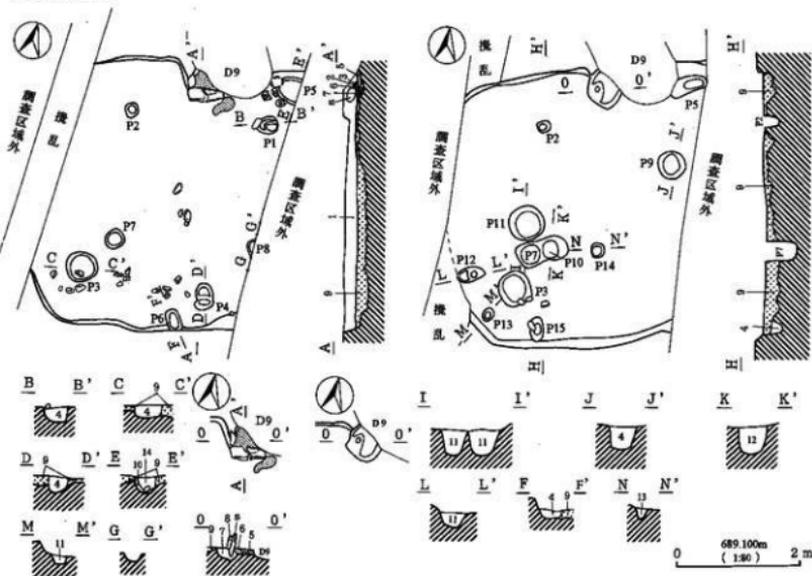
第20表 H14号住居址遺物観察表

番号	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
11	多目的石器	輝石安山岩	14.5	8.1	4.4	780
12	掘り石	粗粒安山岩	10.3	9.1	5.1	690

番号	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
13	掘り物石	輝石安山岩	14.5	8.8	4.6	900

第21表 H14号住居址石頭観察表

H15号住居址



- 1層 黒褐色土 (10YR2/3) 炭化物粒子少量。褐色の砂・小?P?。粘質土。
 2層 明赤褐色土 (2.5YR5/8) 焼土。
 3層 黒褐色土 (10YR2/3) 焼土?P?少量。粘質土。

- 8層 黒褐色土 (10YR2/3) 砂質。固く締まる。
 9層 暗褐色土 (10YR3/4) 固く締まる。褐色土?P?少量。
 10層 黒褐色土 (10YR2/3) 砂質。固く締まる。

4層	黒褐色土 (10YR2/3)	褐色土ブロック少量。葉灰出。	11層	黒褐色土 (10YR2/3)	砂質土。長方形板状多。
5層	明褐色土 (2.5YR5-8)	焼土。固く焼けている。	12層	黒褐色土 (10YR2/3)	細かい黄褐色の砂質土-ブロック多量。ビット多。
6層	明褐色土 (7.5YR2/3)	葉灰出。	13層	黒褐色土 (10YR2/4)	砂質土。ビット多。
7層	緑い黄褐色土 (10YR2/3)	砂質土。	14層	黒褐色土 (10YR2/3)	細かい黄褐色の砂ブロック多量。

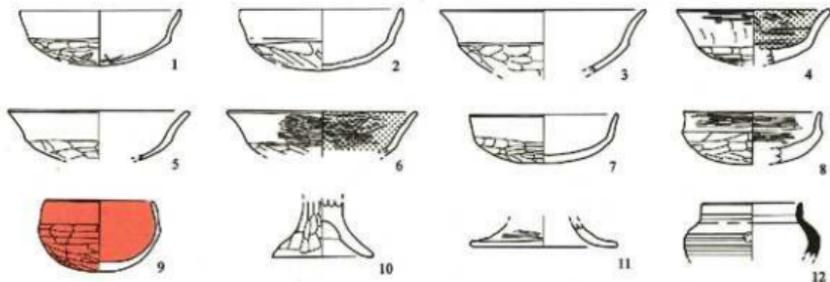
第36図 H15号住居址実測図

遺構はF区え-110グリッドに位置する。東側は調査区外、西側は掘削に破壊され、北壁の一部はD9に切られる。規模は南北4.5m、東西は確認できた規模で3.5m、床面までの深さ20cmを測る。平面形は残存状況から隅丸方形と考えられる。床面は固くほぼ平坦で、床面上からはビットが8個確認できた。P1、2、7、8が支柱柱、P3、5はともにコーナー付近に存在することから土坑の要素が強い。P4、6は入り口部に関係するビットと思われる。カマドは北壁に構築されているが、火床付近から北の煙道付近及び東袖周辺はD9によって破壊され、火床の一部及び、西袖、焚き口部の天井石がかろうじて確認できた。

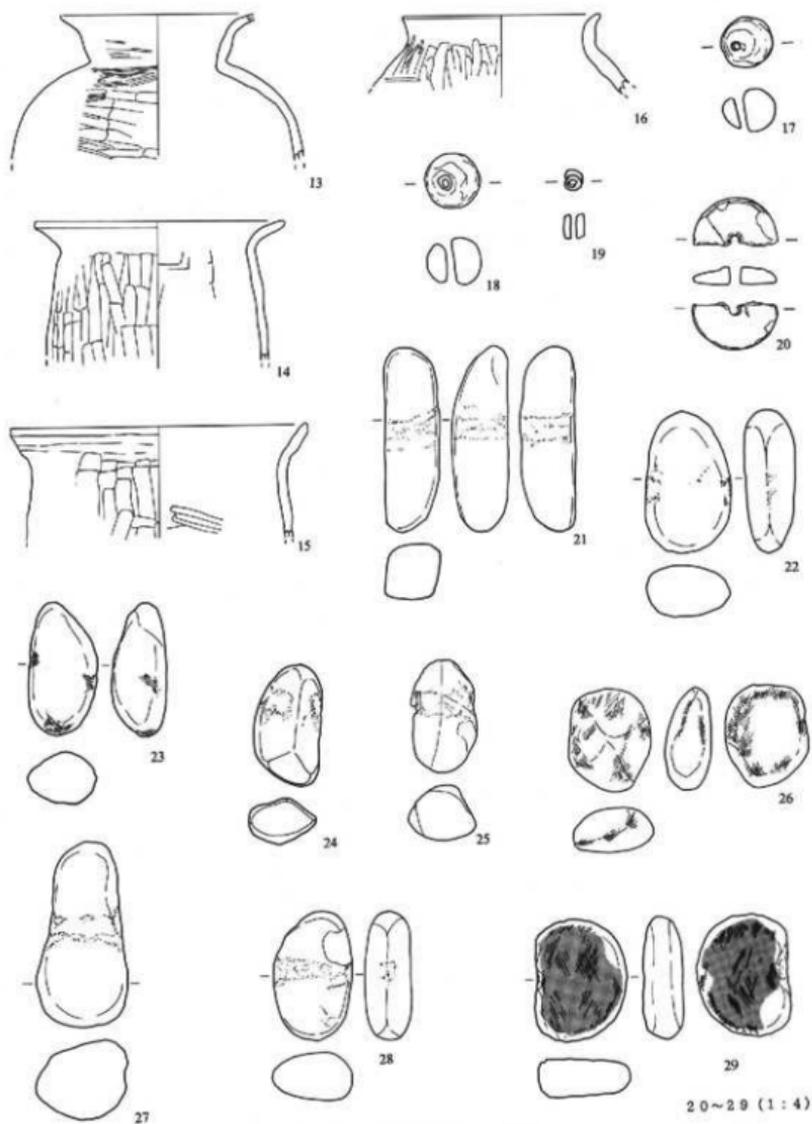
袖は北壁から60cm内側に入り、その先端付近に焚き口部の補強材とした石が埋め込まれ、更にその手前へ天井石として利用されていたと思われる長方形の石が横たわっていた。火床には焼土が8cm内外の厚みで多量に堆積し、東袖先端部付近と思われる地点にも焼土の散布が認められた。

掘方は5~20cmの厚みで、暗褐色土が埋め込まれ固く締まっており、上面を床面として利用していた。掘方から新たに6個のビットが確認できた。

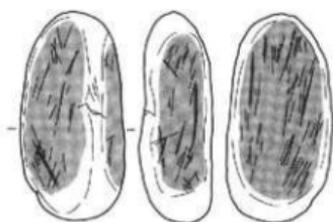
遺物は土器器の坏・鉢・高坏・壺・壺、丸玉、ガラス小玉、紡錘車、編み物石等が出土した。図示したのは39点である。1~8は明瞭な後を有する坏で1、2は後から外傾気味に立ち上がり口縁付近で僅かに内反する。3~6は後から外形気味に立ち上がり、口縁付近で外反する。4、6は内面黒色処理を施す。7、8は後から口縁部までが短く、ほぼ直上する。9は完形の鉢で内外面ともに赤色塗彩を施す。10、11は高坏の脚部である。12は須恵器壺の破片である。13は壺の口縁から胴上半部の破片で、胴部外面にヘラ削り後ナダ、ミガキ、頸部外面に磨き、口辺部内面にミガキを施す。14は長胴壺の口縁から胴上半部で最大径は口縁部にくるとと思われる。口縁は「く」の字を呈し、外面縦方向のヘラ削りを施す。15は壺の口縁から胴上半部の破片で口縁は「く」の字を呈するが14程返りは深くない。16は壺である。外面に縦方向のヘラ削りを施す。17、18は土製丸玉で表面は磨かれ黒色の光沢を持つ。19はガラス小玉である。20は土製紡錘車である。21~39は安山岩、輝石安山岩などの擦り石、編み物石、また敷き、擦り、編み物石など多目的に使用されたと考えられる石製品である。本住居址は6c後半、古墳時代後期と考えられる。



第37図 H15号住居址遺物実測図(1)



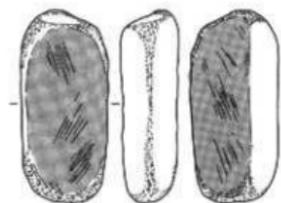
第386图 H15号住居址遺物実測図(2)



30



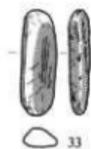
32



36



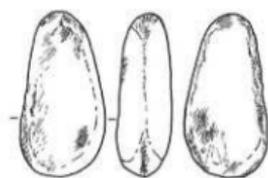
38



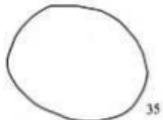
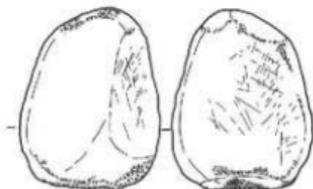
33



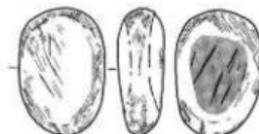
34



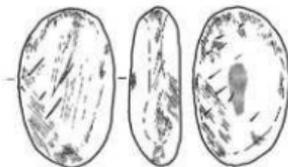
31



35



37



39

30~39 (1:4)

第39回 H15号住居址遺物実測図(3)

番号	部 種	形 状	口径cm	底径cm	高さcm	調 整・文 様	残存率・部位	焼 成	色 調 (外側) (内側)
1	土師器	坏	13.1	九底	4.4	口辺ロクロナデ 外面ヘラ削り 内面横ナデ	60	良	褐色 緑色
2	土師器	坏	13.2	九底	5	口辺ロクロナデ 外面ヘラ削り 内面縦線敷しい	60	良	明褐色 明褐色
3	土師器	坏	[16.7]	九底	—	口辺横ナデ 外面ヘラ削り	30	良	褐色 褐色
4	土師器	坏	[12.4]	—	—	口辺ミガキ 外面ヘラ削り・ミガキ 内面ミガキ・黒色焼	30	良	鈍い黄褐色 褐色
5	土師器	坏	[14.8]	—	—	口辺横ナデ 外面ヘラ削り 内面横ナデ	20	良	鈍い褐色 鈍い黄褐色
6	土師器	坏	[15.6]	—	—	口辺ミガキ 外面ヘラ削り・ナデ 内面ミガキ・黒色焼	20	良	褐色 褐色
7	土師器	坏	12	九底	4	口辺横ナデ 外面ヘラ削り 内面横ナデ	40	良	褐色 褐色
8	土師器	坏	[11.0]	九底	—	口辺横ナデ 外面ヘラ削り 内面ミガキ	20	良	褐色 褐色
9	土師器	鉢	8.8	九底	5.8	口辺横ナデ 外面ヘラ削り 内面ヘラナデ 内外赤色塗彩	100	良	赤褐色 赤褐色
10	土師器	高坏	—	8.2	—	胴部外面ヘラ削り 内面ヘラナデ 胴部横ナデ	胴部破片	良	暗赤褐色 赤褐色
11	土師器	高坏	—	[12.0]	—	胴部外面ミガキ 内面ヘラナデ 胴部横ナデ	胴部破片	良	灰褐色 鈍い褐色
12	須恵器	壺	[7.6]	—	—	ロクロナデ	口縁～胴部破片	良好	暗灰黄色 暗灰黄色
13	土師器	壺	—	—	—	口辺内内面ミガキ 外面ヘラ削り後ミガキ 内面ヘラナデ	口縁～胴部破片	良	明赤褐色 鈍い赤褐色
14	土師器	壺	20.3	—	—	口辺横ナデ 外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	口縁～胴部破片	良	鈍い赤褐色 褐色
15	土師器	壺	[24.0]	—	—	口辺ヘラナデ 外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	口縁～胴部破片	良	褐色 明褐色
16	土師器	壺	[16.0]	—	—	口辺横ナデ 外面ヘラ削り 内内面かいヘラナデ	口縁～胴部破片	良	褐色 褐色

第22表 H15号住居址遺物観察表

番号	出土位置	種 別	長さ (mm)	径 (mm)	孔径 (mm)	重さ (g)	材 質	色 調
17	Ⅲ区床下	丸玉	8.2	10.1	2.3	0.9	土質	灰褐色
18	床上	丸玉	9	10.8	2.7	1.3	土質	暗褐色
19	P3	ガラス小玉	4.75	3.6	1.3	0.1	ガラス	ブルー

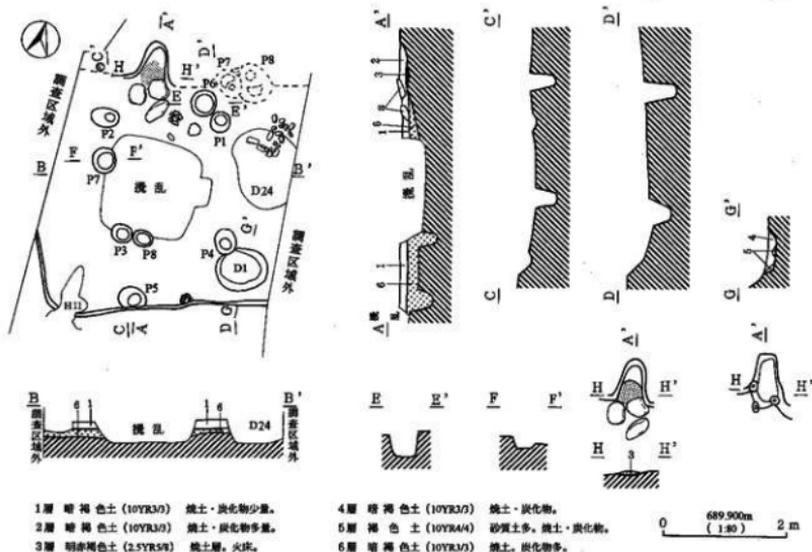
第23表 H15号住居址玉類観察表

番号	部 種	石 材	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)	番号	部 種	石 材	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)
21	瀬川物石	安山岩	15	4.4	4.4	540	31	瀬川物石 (振り石)	安山岩	13.3	6.9	4.5	540
22	瀬川物石	角閃石安山岩	11.5	7	4.1	460	32	瀬川物石	輝石安山岩	13.8	8.3	3.6	960
23	瀬川物石 (磨石)	輝石安山岩	10.8	5.6	4.5	330	33	振り石 (磨石)	輝石安山岩	8.7	2.9	1.6	57.6
24	瀬川物石	安山岩	9.8	5.4	3.8	260	34	振り石	輝石安山岩	7.5	3.2	2.3	69.7
25	瀬川物石	輝石安山岩	9.2	5.4	4.6	280	35	振り石	粗粒安山岩	14.8	11.4	9.4	1900
26	瀬川物石 (磨石)	輝石安山岩	8.4	6.8	3.9	285	36	多目的石器	輝石安山岩	15.5	7	4.7	800
27	瀬川物石	角閃石安山岩	15	7.4	6.5	860	37	瀬川物石 (多目的石器)	安山岩	10.4	7	3.7	405
28	瀬川物石	角閃石安山岩	10.4	6.4	3.8	320	38	多目的石器	花崗岩	14.7	8.3	6	1000
29	瀬川物石 (磨石)	角閃石安山岩	9.9	7.7	3.4	398	39	瀬川物石 (多目的石器)	輝石安山岩	13	8.8	4.2	605
30	瀬川物石 (磨石)	輝石安山岩	17	8.4	16	1290							

第24表 H15号住居址石頭観察表

H16号住居址

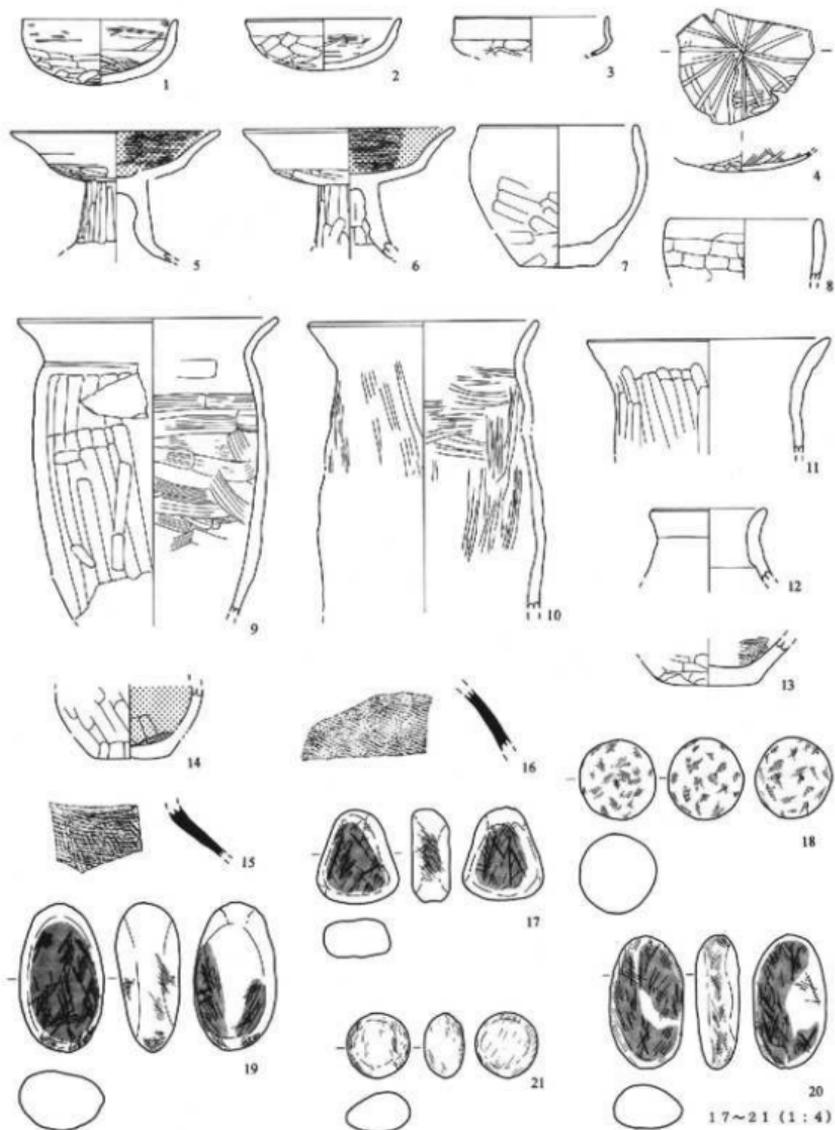
遺構はF区え-113グリッドに位置する。西側の一部及び東側は調査区外となり、遺構の中央は攪乱に破壊され、D24、H11の運道に切られる。規模は南北3.8m、南壁は確認規模で3.7m、床面までの深さは12cm内外を測る。床面は平坦で固く、東側調査区外との際には石が散在してる。壁際に周溝は認められない。



第40図 H16号住居土築測図

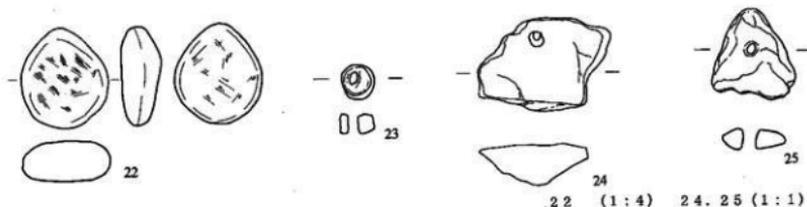
床面上からはピット8個、南壁際の東側から土坑1基が認められた。P1、2、3、4が柱穴と思われる。カマドは北壁に構築され、壁外に張り出すと思われる火床部が確認でき、焼土の堆積が認められた。掘方は15cm内外の厚みで焼土、炭化物を含む暗褐色土が埋め込まれ、固く締まり、上面を床面として利用していた。掘方から2個のピットが確認できた。

遺物は土師器の坏・高坏・甕・鉢、須恵器の甕、編み物石、白玉、石製模造品が出土した。図示したのは25点である。1は丸底の坏、2～4は坏である。1はヘラ削りされた底部から丸みを持って立ち上がり、口辺部は直上する。3、4は同一個体で内面に放射状の暗文が施される。5、6は高坏でともに脚部裾部が欠損する。坏部はヘラ削りされ、底部から立ち上がり途中明瞭な稜を持った後、僅かに角度を立ち上げ外反気味に口縁部に至る。内面は黒色処理を施す。脚部は縦方向のヘラ削りを施し、裾部は大きく開く。7は鉢で平底の底部からやや開きぎみに立ち上がり、胴上半部から内腕気味に口縁部に至る。8は鉢の口縁破片と思われる。9、10、11は長胴甕の破損品で9は最大径が口縁部にあり、外面はヘラ削り後ナデを施し光沢がある。内面はハケ目痕を残すナデである。10は最大径が胴部中央にあり、篋目状工具による調整後ナデを施し篋目の半分が痕跡を残している。11は口縁から胴部上半部の破片で外面に縦方向の細かいヘラ削りを施す。12は厚手の小型壺の口縁から頸部にかけての破片と考えられる。13は甕の底部、14は鉢の底部と思われる内面黒色処理を施す。15、16は須恵器甕または壺の破片である。17～22は安山岩、輝石安山岩などの擦り石、編み物石、また敷き、擦り、編み物石など多目的に使用されたと考えられる石製品である。23は滑石製の白玉である。24、25は石製模造品でともに小さな孔が認められる。本住居址はH15同様6c後半、古墳時代後期と考えられるが、H15よりはやや新しい住居址と思われる。



第41图 日16号住居址遗物实测图(1)

17~21 (1:4)



第42図 H16号住居址遺物実面図(2)

番号	器種	器形	口径cm	底径cm	器高cm	調査・文様	残存率・部位	状態	色調(外側/内側)
1	土埴器	坏	12.6	丸底	5.3	口辺横ナデ・ミガキ 外面ヘラ削り 内面ミガキ	100	良	黄 黄褐色 黄褐色
2	土埴器	坏	[12.4]	丸底	4.2	口辺横ナデ 外面ヘラ削り 内面横ナデ	40	良	黄 黄褐色 黄褐色
3	土埴器	坏	[12.4]	-	-	口辺横ナデ 外面ヘラ削り 内面ヘラナデ 4と同一個体	35	良	黄褐色 黄褐色
4	土埴器	坏	-	丸底	-	外面ヘラ削り 内面放射状縮玉 3と同一個体	底部のみ残存	良	黄褐色 黄褐色
5	土埴器	高坏	17.1	-	-	口辺外面横ナデ 坏・脚部外面ヘラ削り 外部内面ミガキ・黒色処理 脚部内面ヘラナデ	80	良	黄褐色 黄褐色
6	土埴器	高坏	17	-	-	口辺外面横ナデ 坏・脚部外面ヘラ削り 外部内面ミガキ・黒色処理 脚部内面ヘラナデ	70	良	黄褐色 黄褐色
7	土埴器	鉢	12.5	6.4	11.5	口辺横ナデ 外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	70	良	黄褐色 赤褐色
8	土埴器	鉢	[12.0]	-	-	口辺横ナデ 外面ヘラ削り 内面横ナデ	口縁～体部破片	良	黄褐色 黄褐色
9	土埴器	甕	[21.2]	-	-	口辺横ナデ 外面ナデ 内側ハケ目状ナデ	口縁～胴部破片	良	黄褐色 黄褐色
10	土埴器	甕	18.8	-	-	口辺横ナデ 外面磨目削り後ナデ 内面磨目ナデ	40	良	黄褐色 黄褐色
11	土埴器	甕	[19.5]	-	-	口辺横ナデ 外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	1.脚～体部破片	良	黄褐色 黄褐色
12	土埴器	甕	[9.4]	-	-	口辺横ナデ	口縁～胴部破片	良	黄褐色 黄褐色
13	土埴器	甕	-	7.8	-	外面ヘラ削り 内面ハケナデ	底部破片	良	黄褐色 黄褐色
14	土埴器	鉢	-	6.4	-	外面ヘラ削り 内面ヘラナデ・黒色処理	口縁～体部破片	良	黄褐色 黄褐色
15	須臾器	-	-	-	-	外面磨目叩き 内面当具痕	胴部破片	良好	黄褐色 黄褐色
16	須臾器	-	-	-	-	外面平行叩き・自然軸付着	口縁～胴部破片	良	黄褐色 オリーブ褐色

第25表 H16号住居址遺物観察表

番号	器種	石材	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重量(g)	番号	器種	石材	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重量(g)
17	磨み物石(砥石)	安山岩	7.6	6.6	3.1	258	20	磨み物石(砥石)	輝石安山岩	10.9	5.9	3.6	349
18	磨り石	安山岩	6.6	6.2	6.2	396	21	磨み物石(磨り石)	破鴨居安山岩	5.3	5.1	3.2	120.3
19	磨み物石(砥石)	安山岩	12	6.7	5.2	550	22	磨り石	安山岩	8.1	7.1	3.3	259

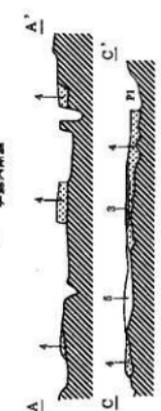
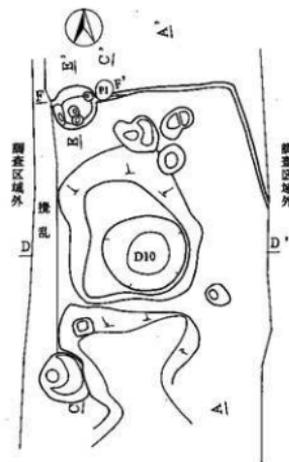
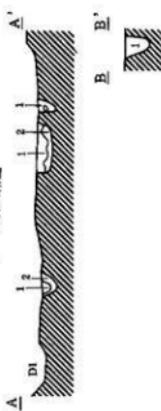
第26表 H16号住居址石類観察表

番号	出土位置	種別	長さ(m)	径(m)	孔径(m)	重量(g)	材質	色調
23	床上	白玉	3.9	7	2.3	0.3	滑石	黄褐色

第27表 H16号住居址玉類観察表

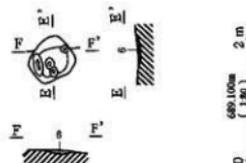
H17号住居址

遺構はF区エー-109グリッドに位置する。南東コーナー付近は調査区外、西側は掘削に破壊され、その更に西側は調査区外となる。遺構内はD9、10、17に切られ、南にH15がある。規模は確認できる規模で南北4.6m、東西3.5m、床面までの深さ5cm内外を測る。ピットは床面上から3個確認できた。カマドは北壁に構築



され火床及びカマド掘方のみ確認できた。火床には、ほぼ円形に焼土の堆積が認められた。住居址の掘方は中央及び南側が大きく窪み、5～16cmの厚みでしまりのない砂質土、強固な褐色土が埋め込まれ、砂質土上には厚み3cm内外の貼り床が認められ、褐色土上は、その上面を床面として利用していた。

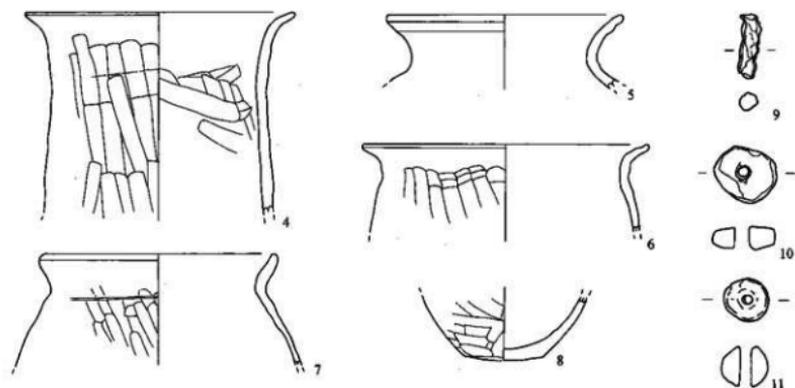
遺物は土師器の破片多数と、須恵器片、鉄製品、白玉、丸玉が出土した。図示したのは11点である。1は須恵器の坏底部で底はヘラ削りされほぼ平らである。2は須恵器蓋の破片と考えられる。3は高坏の脚部破損品で外面縦方向のヘラ削りを施す。4～8は甕で、4の胴部はほぼ垂直に立ち上がり口縁部で僅かに外反する。外面に縦方向のヘラ削りを施す。5、6、7は口縁から頸部の破片で5は口縁部にやや厚みを持たせている。6は口縁附近で大きく外反する。7は最大径が口縁より胴部にあると思われる。8は底部の破損品で外面にヘラ削りを施す。9は鉄製品で器種は不明である。10は滑石製の白玉、11は土製丸玉で表面は黒色の光沢を持つ。本住居址は7c後半、古墳時代後期と考えられる。



- 1層 暗褐色土 (10YR3/3) 砂?の付。強粘性。
- 2層 暗褐色土 (10YR3/4) 炭・炭化物。強粘性。
- 3層 黒褐色土 (10YR2/3) しまり強固。貼り床。
- 4層 黒褐色土 (10YR3/2) 砂質土・ア?の付。炭化物。
- 5層 褐色土 (10YR4/4) 砂質土多。強粘性。
- 6層 明赤褐色土 - 焼土層。火床。



第43図 H17号住居址・遺物実測図



第44図 H17号住居址遺物実測図

番号	器種	器形	口径cm	底径cm	器高cm	調整・文様	残存率・部位	状況	色澤 (外側) (内側)
1	須恵器	坏	-	8	-	底部ヘラ削り	底部100	良	緑灰色 緑灰色
2	須恵器	重	-	-	-	天井部自然焼付着	天井部破片	良	灰色 灰色
3	土師器	高坏	-	[9.1]	-	胴部外面ヘラ削り 胴縁ナデ 内面ヘラナデ	胴部破片	良	褐色 黒褐色
4	土師器	壺	22.2	-	-	胴部外面ヘラ削り 口辺ナデ 胴部内面ヘラナデ	口縁～胴部破片	良	明赤褐色 灰白色
5	土師器	壺	[19.2]	-	-	口辺ナデ	口縁～胴部破片	良	灰い褐色 灰い褐色
6	土師器	壺	[20.2]	-	-	胴部外面ヘラ削り 口辺ナデ 胴部内面ヘラナデ	口縁～胴部破片	良	灰い褐色 灰い褐色
7	土師器	壺	[19.5]	-	-	胴部外面ヘラ削り 口辺ナデ 胴部内面ヘラナデ	口縁～胴部破片	良	灰い赤褐色 暗赤褐色
8	土師器	壺	-	6.4	-	外側部・胴めヘラ削り 内面ヘラナデ	底部～胴部破片	良	灰い褐色 灰褐色

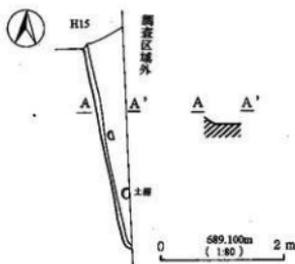
第28表 H17号住居址土器観察表

番号	出土位置	種別	長さ (mm)	径 (mm)	孔径 (mm)	重さ (g)	材質	色澤
10	床上	白玉	4.3	12.2	3.15	0.9	燻石	灰白色
11	床上	丸玉	8.8	8.5	2.25	0.6	土質	黒色

第29表 H17号住居址玉類観察表

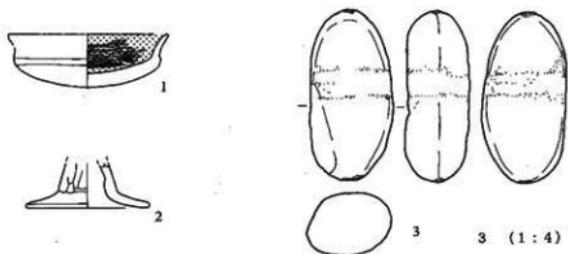
H18号住居址

遺構はF区えー111グリッドに位置する。東側は調査区外、北側はH15に切られる。南側はH23を切る。確認できたのは西壁と南西コーナーの一部と僅かな床面である。確認できた西壁は3.4mである。床面はほぼ平坦でやや固い。ピットは認められず、掘方も確認できなかった。遺物は土師器片が多数出土したが、図示できたのは3点である。1は明瞭な稜を有する坏で丁寧に調整された丸底の底部から緩やかに立ち上がり明瞭な稜に至る。その後外反気味に口縁部に至る。底部から体部にかけて厚みがありかなりの重量感がある。内面は丁寧にミガキと黒色処理を施す。2は高坏脚部の破片で裾部は大



第45図 H18号住居址実測図

大きく広がる。3は安山岩製の編み物石である。本住居址は6c後半、古墳時代後期と考えられる。



第46図 H18号住居址遺物実測図

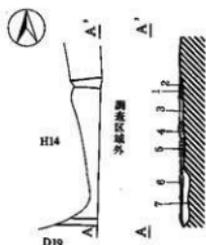
番号	器種	器形	口径cm	底径cm	器高cm	調査・文様	残存率・部位	構成	色調 (外側) (内側)
1	土師器	環	[13.0]	丸底	4.3	口辺模ナア 外環ヘラ削り 内面黒色処理・ミガキ	95	良	鈍い褐色 黒色
2	土師器	高環	-	[10.1]	-	外環縁ヘラ削り 基部模ナア 内面ヘラナア	脚環破片	良	鈍い褐色 鈍い褐色

第30表 H18号住居址遺物観察表

番号	器種	石材	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)
3	編み物石 (磨き石)	安山岩	13.9	6.8	5.1	772

第31表 H18号住居址石類観察表

H19号住居址



- 1層 暗赤褐色土 (2.5YR3/6) 焼土層。火灰。
- 2層 黒褐色土 (10YR2/7) 砂・焼土少量。
- 3層 黒褐色土 (10YR2/7) 砂、焼土、黄褐色土アワケ。
- 4層 暗褐色土 (10YR3/4) 砂質土・アワケ多。埴り床。
- 5層 鈍い黄褐色土 - 砂質土、黄褐色土の張り土。
- 6層 暗褐色土 (10YR3/5) 焼土。炭化物。赤褐色土多。埴り床。
- 7層 黒褐色土 (10YR2/7) 焼土。炭化物少量。

0 689.100m
(1:80) 2 m

第47図 H19号住居址実測図

遺構はF区え-108グリッドに位置する。西側はH14に切られ、東側は調査区外となる。確認できたのは僅かな南北壁と床面である。規模は南北2.4m、東西は最大0.5m、深さ16cm内外である。床面は固く平坦である。ピット、カマドなどの施設、掘方は認められなかった。

遺物は土師器片が多数、弥生式土器数片、石製品が出土した。土器はいずれも小破片で図示できたのは砥石の1点である。遺物は丸底坏、厚手の甕と思われる土器片が多数を占める事から、本住居址は古墳時代である可能性が高い。



第48図 H19号住居址遺物実測図

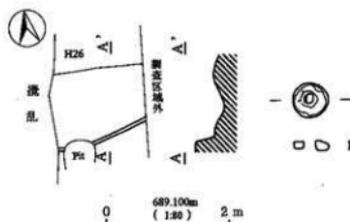
番号	器種	石材	長さ(m)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)
1	砥石	砂岩	5	3.5	1.5	42.5

第32表 H19号住居址石類観察表

H20号住居址

遺構はF区の南え-115グリッドに位置する。西側は擾乱に破壊され、東側は調査区外となる。北側はH26に切れ、南壁の一部は単独ピットに切られる。確認できたのはわずかな南壁と掘方である。

遺物は土師器片が多数、須恵器、弥生式土器を数点、滑石製の白玉が出土したが、土器はいずれも小破片で図示できたのは滑石製の白玉1点である。遺物は丸底坏、厚手の甕の土器片が多数をしめる事から、本住居址は古墳時代である可能性が高い。

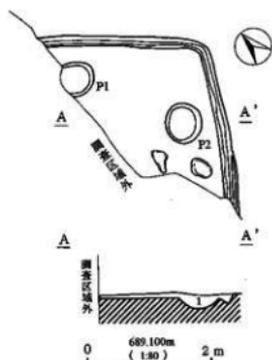


第49図 H20号住居址・遺物実測図

番号	出土位置	種別	長さ (mm)	径 (mm)	孔径 (mm)	重さ (g)	材質	色調
1	床上	白玉	1.85	7	2.1	0.1	滑石	黄灰色

第33表 H20号住居址玉類観察表

H21号住居址

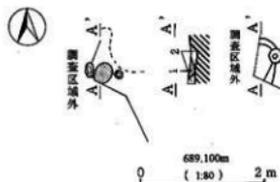


1層 黒褐色土 (10YR2/3) 砂質土粒・7~9%、炭化物、強粘性
第50図 H21号住居址実測図

遺構はF区え-112グリッドに位置する。西側は調査区外となる。西側調査区際にH22のカマドが残存していたことから本住居址はH22に南側を切られていると考えられた。確認できたのは東壁2.8m、北壁2.6mの南東コーナー周辺である。深さは5cm内外と浅い。平面形は残存状態から隅丸方形と考えられる。壁際には周溝が存在し、床面はほぼ平坦で固い。ピットは60cm、深さ20cm内外の物が2個存在したが、支柱穴かは不明である。カマドは確認できなかった。掘方は5cm内外と薄く、砂粒を含む黒褐色土が埋め込まれ、固く締まっており、上面を床面として利用していた。

遺物は土師器片が多数出土したが図示できる物は存在しなかった。遺物は丸底坏、厚手の甕と思われる土器片が多数を占めたことから、本住居址は古墳時代である可能性が高い。

H22号住居址



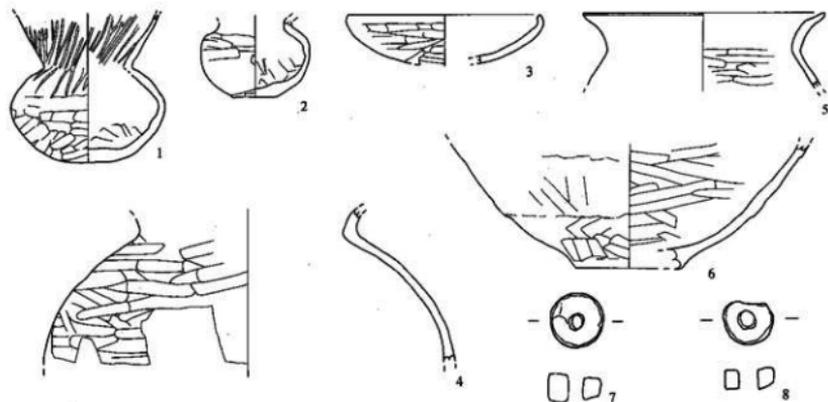
1層 暗赤褐色土 (5YR 3/4) 焼土層、火床。
2層 黒褐色土 (10YR2/2) 焼土、炭化物。

第51図 H22号住居址実測図

遺構はF区お-112グリッドに位置する。遺構のプランは確認できなかった。H21と切り合い関係にあり、本住居址のカマドが残存していることからH21を切ると思われる。確認できたのはカマドと思われる火床、西袖の補強に使用されたと考えられる石材及びカマド掘方である。火床には径35cmで厚さ8cmの焼土が堆積していた。

遺物は土師器片多数及び僅かな須恵器片が出土した。また付近から白玉が2個出土している。図示できたのは8点だが、遺構の掘り込みが確認できなかったことから、すべての遺物が本住居址

に伴うとは断定できず、混入品も含まれていると考えられる。1は小型丸底壺で胴部3分の1、口辺部は大半が失われている。口辺内外面は横ナゲ後縦方向のミガキを施し、このミガキは胴上半部にまで至る。胴部は胴中央部から底部にかけてヘラ削りが施される。2は小型壺の破損品で胴部半分弱が残存している。底部は平底で胴中央部から胴下半部にかけてヘラ削りを施す。3は丸底杯の口縁から体部にかけての破損品である。4、5、6は甕である。7、8は滑石製の白玉である。本住居址は5c後半、古墳時代と考えられる。



第52図 H22号住居址遺物実測図

番号	器種	器形	口径cm	高さcm	器高cm	調査・文様	残存率・部位	産地	色調 (外側) (内側)
1	土器壺	小型丸底壺	-	丸底	-	胴部外面横・斜のヘラ削り 口辺外面から胴上半部縦ミガキ 口辺内面縦ミガキ 胴部内面ヘラナゲ	50	良	明褐色 褐色
2	土器壺	小型壺	-	3.4	-	胴部外面横ヘラ削り 内面ヘラナゲ	40	良	明褐色 明褐色
3	土器器	杯	[15.5]	-	-	外側ヘラ削り 口辺横ナゲ 内面ナゲ	口縁～体部破片	良	明褐色 鈍い褐色
4	土器器	甕	-	-	-	胴部外面横ヘラ削り 内面ヘラナゲ	胴部～胴部破片	良	赤色 灰赤色
5	土器器	甕	[19.6]	-	-	胴部外面ヘラ削り 内面ヘラナゲ 口辺横ナゲ	口縁～胴部破片	良	明褐色 鈍い褐色
6	土器器	甕	-	[8.8]	-	胴部外面ヘラ削り 内面ヘラナゲ 輪縁み度	底部～胴部破片	良	鈍い赤褐色 暗灰色

第34表 H22号住居址遺物観察表

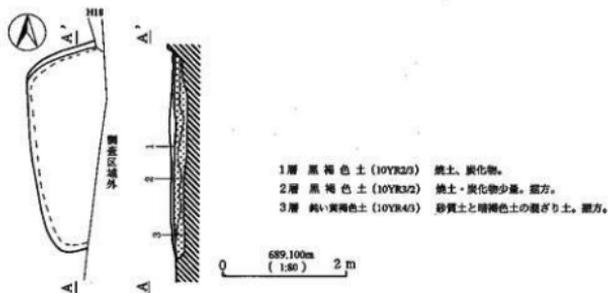
番号	出土位置	種類	長さ (mm)	径 (mm)	孔径 (mm)	重さ (g)	材質	色調
7	床上	白玉	5.3	10.5	2.9	1	滑石	灰黄色
8	床上	白玉	4.1	9.85	3.1	0.5	滑石	灰黄色

第35表 H22号住居址玉類観察表

H23号住居址

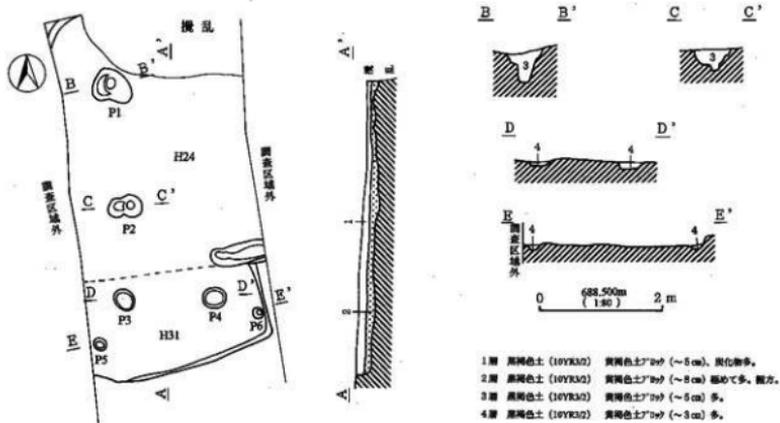
遺構はF区えー112グリッドに位置する。東側は調査区外となり、北側は一部H18に切られる。確認できたのは遺構西側部分である。規模は南北3.2m、東西は確認規模で最大1.2mを測る。深さは北壁のみ計測可能で12cmを測る。その南側は範囲のみ確認できた。平面形は残存状況から隅丸方形と考えられる。床面はほぼ平坦で全体的に固い。ピット、カマドは確認できなかった。掘方は全体に20cm内外の厚みで焼土炭化物を含む黒褐色土及び砂質土と暗褐色土の混合土である鈍い黄褐色土が埋め込まれ、固く締まり、上面を床面として

利用していた。遺物は出土しなかった。



第53図 H23号住居実測図

H24・31号住居址



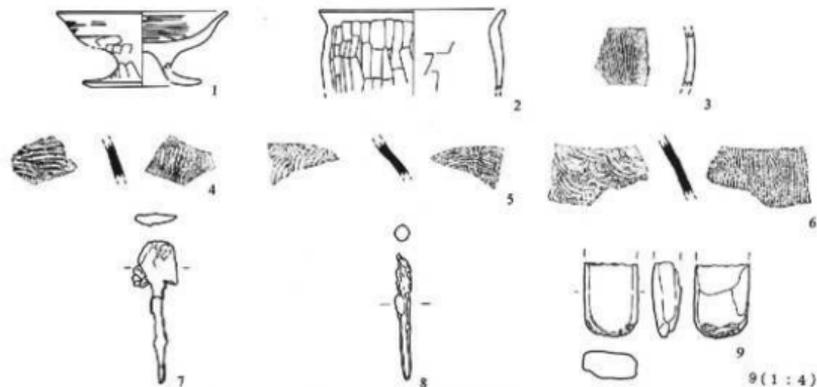
第54図 H24・31号住居址実測図

遺構はE区お-100グリッドに位置する。東西は調査区外となり、北側は攪乱に破壊されている。南側はH31と切り合い関係にある。土層断面は通して観察を行ったが新旧関係は不明であった。H24の壁は北西コーナー及び南壁が僅かに確認された。深さは15cm内外を測る。床面はほぼ平坦で全体的に固く、ピットは2個確認できた。位置的に主柱穴の可能性が高い。南壁際には一部周溝らしき溝が存在する。カマドは確認できなかった。掘方は5~10cmの厚みを持ち、黄褐色土ブロックを多く含む黒褐色土が埋め込まれ、固く締まり、上面を床面として利用していた。

H31は確認できた規模で東壁1.2m、南壁2.8m、床面までの深さは12cm内外を測る。床面はほぼ平坦で固く、ピットは4個確認できたが、主柱穴であるかは不明である。掘方は10cm内外の厚みで、黄褐色土ブロックを含む黒褐色土が埋め込まれていた。

H24の遺物は土師器の坏・高坏・鉢・甕、須恵器の坏・蓋・甕、鉄製品、石製品が出土し、弥生式土器も僅かに混入していた。いずれも小破片で図示したのは9点である。1は土師器の高坏で口縁付近で大きく外反する坏部に、低く裾部が大きく開く脚部を持つ。坏部口辺部は横ナデ後ミガキ、体部外面がヘラ削り、内面はミガキ及びび完全ではないが黒色処理を施す。脚部は外面ヘラ削り、裾部横ナデを施す。2は鉢の口縁から体部にかけての破片で口縁は僅かに反り返り、体部は縦方向のヘラ削りを施す。3は土師器の破片と思われる外面に櫛目の調整痕を施す。4～6は須恵器の破片で混入遺物の可能性が考えられる。4は外面平行叩き、内面当て具痕を施す。5、6は外面平行叩きに文字あるいは記号的な物が認められる。内面は同心円の当て具痕を施す。7は鉄簇で長さ8.56cm、厚さ0.4cm、最大幅2.67cm、重量9gを測る。8は断面方形、長さ7.7cmの棒状で片側は欠損している。器種は不明である。9は安山岩製の打製石斧である。本住居址は7c中頃、古墳時代と考えられる。

H31の遺物は土師器片が多数出土したがH24との切り合いも明確でなく、確認された規模も僅かであるため、本住居址と断定できる遺物は認められなかった。



第55図 H24号住居址遺物実測図

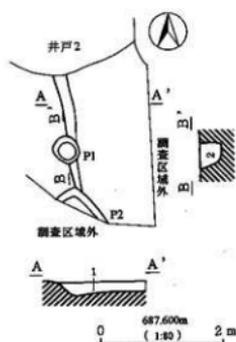
番号	器種	器形	口径cm	底径cm	器高cm	調整・文様	残存中・部位	焼成	色調 (外製) (内製)
1	土師器	高坏	[11.9]	[9.8]	6.1	坏部口辺部ナデ 低ミガキ 坏部外縁ヘラ削り 内面ミガキ 内面一部黒色 表部外縁ヘラ削り 裾部横ナデ 内面ヘラナデ	65	灰	黒い赤褐色 黒褐色 黒褐色
2	土師器	鉢	[10.1]	-	-	胴部外縁ヘラ削り 口辺部ナデ 内面ヘラナデ	口縁・胴部破片	灰	赤褐色 黒褐色
3	土師器	-	-	-	-	外面平行叩き	胴部破片	灰	黒い赤褐色 赤褐色
4	須恵器	-	-	-	-	内外面ツタキ	胴部破片	灰	黒い赤褐色 黒い赤褐色
5	須恵器	-	-	-	-	内外面ツタキ	胴部破片	灰	赤褐色 赤褐色
6	須恵器	-	-	-	-	内外面ツタキ	胴部破片	灰	赤褐色 黒い赤褐色

第36表 H24号住居址遺物観察表

番号	器種	石種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
9	打製石斧	三色麻密 表山岳	6	4.3	2.3	93.5

第37表 H24号住居址石類観察表

H25号住居址



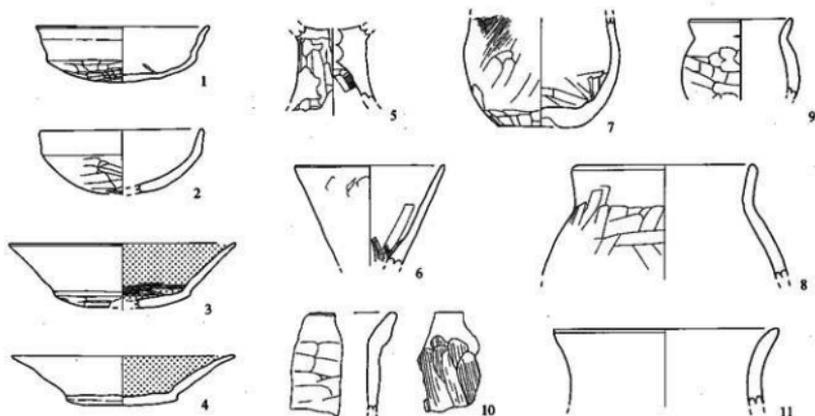
- 1層 暗褐色土 (10YR3/2) 黄褐色土(P1)等 (~2cm) 多。
2層 黒褐色土 (10YR3/2)

第56図 H25号住居址実測図

近の破片、11は甕の口辺破片である。本住居址は7c前半、古墳時代後期と考えられる。

遺構はE区の南端え-106グリッドに位置する。東、南側は調査区外となる。西側はH4に切られ、北側は2号井戸跡に切られる。確認できたのは西壁の一部と僅かな床面である。確認できた西壁は2.2mを測り深さは床面までで15cm内外を測る。床面はほぼ平坦で固い。ピットは壁際に2個確認できた。掘方は存在しなかった。

遺物は土師器の坏・高坏・壺・鉢・甕が出土した。図示したのは11点である。1~4は坏である。1は有稜の坏で焼きの良い薄作りである。2は丸底の底部から緩やかに立ち上がり、口辺部で急激に立ち上がる。3、4は平坦に近い丸底の底部から立ち上がり、明瞭な稜の後、大きく開き口縁部に至る。底部へう割り、外面横ナダ、ミガキ、黒色処理を施す。1は他の土器に比して異なることが多い。5は高坏脚部の破損品である。6は小型壺の口辺部の破片である。7は鉢の底部から胴部にかけての破損品である。8、9は甕の口縁から胴部の破片、10は甕または瓶の口縁付近の破片、11は甕の口辺破片である。



第57図 H25号住居址遺物実測図

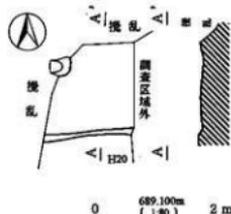
番号	器種	器形	口径cm	底径cm	器高cm	調整・文様	残存率・部位	焼成	色調 (外側) (内側)
1	土師器	坏	14	丸底	4.5	口辺横ナダ 体部外面へう割り 内面ミガキ	50	良	黄褐色 黄褐色
2	土師器	坏	[12.4]	丸底	4.2	口辺横ナダ 外面へう割り 内面横ナダ	40	良	黄褐色 黄褐色
3	土師器	坏	[18.4]	丸底	-	口辺横ナダ 体部・底部へう割り 内面黒色処理	口縁~体部破片	良	黄褐色 黄褐色
4	土師器	坏	[18.0]	[9.0]	[4.0]	口辺内外面横ナダ 底部・体部へう割り 内面黒色処理	口縁~体部破片	良	黄褐色 黄褐色
5	土師器	高坏	-	-	-	胴部外面へう割り 内面へうナダ	脚部破片	良	黄褐色 黄褐色

第38表 H25号住居址遺物観察表 (1)

6	土師器	小型甕	[12.0]	-	-	口辺内外面ヘラナデ	口辺破片	良	黄い赤褐色 黒赤褐色
7	土師器	鉢	-	[6.7]	-	胴部外面ハケ目痕 ヘラ削り 内面ヘラナデ	底部-胴部	良	黄い赤褐色 黄い褐色
8	土師器	甕	[15.0]	-	-	口辺横ナデ 胴部外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	口縁-胴部	良	黄い赤褐色 黄い赤褐色
9	土師器	小型甕	[6.0]	-	-	口辺横ナデ 胴部外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	口縁-胴部破片	良	黄い赤褐色 黒赤褐色
10	土師器	-	-	-	-	口辺横ナデ 外側縦ハケ目 内面横ヘラナデ	口縁-胴部破片	良	黒赤褐色 黒赤褐色
11	土師器	甕	[18.0]	-	-	口辺横ナデ	口縁-底部破片	良	黄褐色 黄褐色

第39表 H25号住居址遺物観察表(2)

H26号住居址



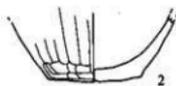
第58図 H26号住居址実測図

遺構はF区えー115グリッドに位置する。北、西側は掘削に破壊され、東側は調査区外となる。南側はH20を切る。確認できたのは南壁の一部と僅かな床面である。確認できた南壁は1.3mを測り、深さは5cmと浅い。床面はほぼ平坦で固く、ピットは西側掘削との境に1個認められた。確認範囲が僅かなためピットの性格は不明である。カマドの痕跡、掘方は確認できなかった。

遺物は土師器片多数及び須恵器片が僅かに出土した。図示したのは2点である。1は手づくね土器で小型の鉢形である。2は土師器甕の底部から胴下半部の破片で底部、胴部外面ともにヘラ削りを施す。遺物は丸底の坏、厚めの甕といった古墳時代と思われる土器片が多数を占めた。



1



2

第59図 H26号住居址遺物実測図

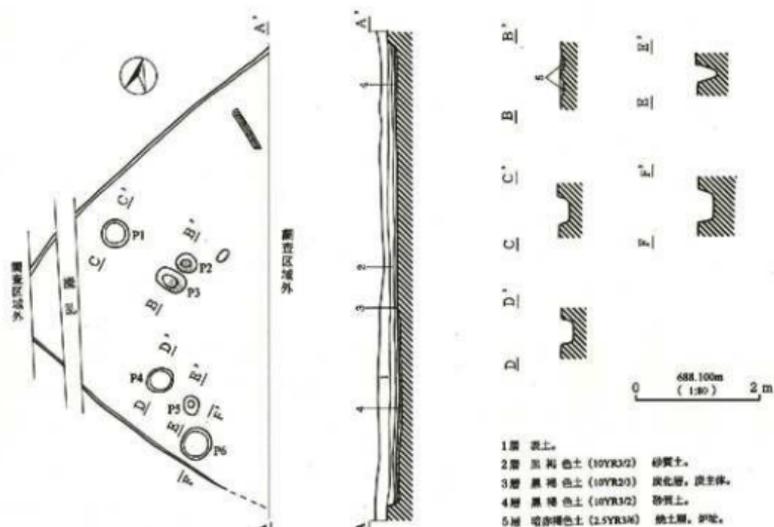
番号	器種	器形	口径cm	底径cm	器高cm	調整・文様	残存率・部位	状況	色調(外側) 色調(内側)
1	てづくね	鉢形	6.4	3.4	4.6	外面削り 内面ナデ	90	良	黄い赤褐色 黒赤褐色
2	土師器	甕	-	[7.6]	-	外面縦ヘラ削り 内面ヘラナデ	底部-胴部破片	良	黄褐色 灰白色

第40表 H26号住居址遺物観察表

H27号住居址

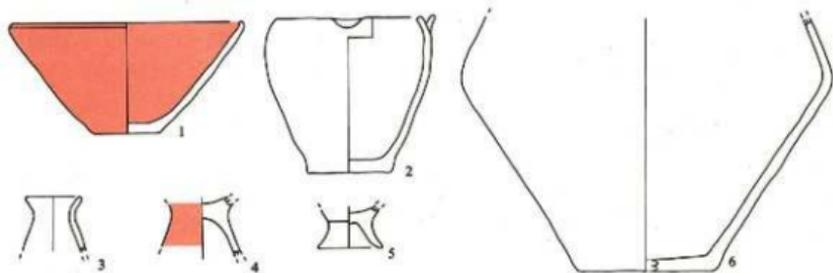
遺構はD区しー76グリッドに位置する。西、東側は調査区外となる。確認できた範囲は西壁5.2m、南壁4.2mの西側半分程度である。深さは最大で12cmと浅く、平面形は残存状況から方形と考えられる。床面は固く2~4cmの厚みで貼り床され、上面には炭化材及び炭化層が堆積していた。このことから焼失住居である可能性が考えられる。ピットは4個確認できたが、位置的に支柱穴であるかの断定はできない。床面上からは円形の焼土散布物が2ヶ所認められ、調査の結果、掘り込みが認められることから炉址と考えられた。貼り床下の住居址掘方は存在しなかった。

遺物は床面上から弥生式土器の鉢・甕・高坏・ミニチュア土器、鉄製品、石製品などが出土した。図示したのは27点である。1は鉢で底部から直線的に開きながら立ち上がり、口縁部で僅かに内脣する。内外面ともに赤色塗彩を施す。2は片口の鉢で、底部からやや外傾気味に立ち上がり、体部上半部から内脣しながら口縁部に至る。3はミニチュアの壺型土器の胴中央部から口縁部に至る欠損品である。4、5は高坏脚部の

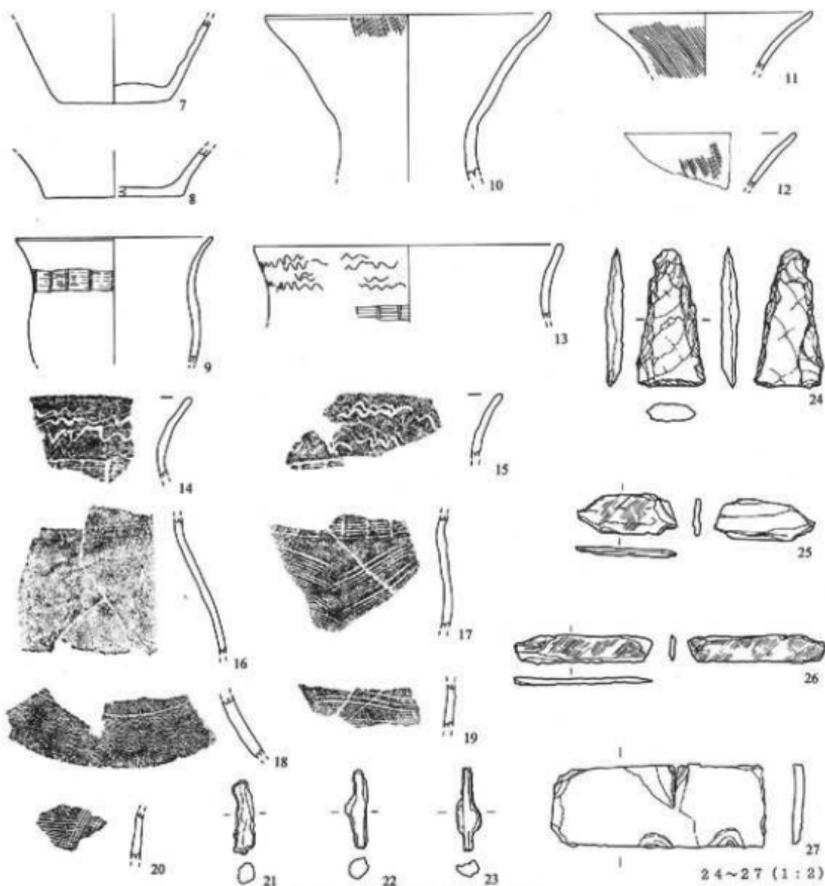


第60図 H27号住居址実測図

破損品で4の外側は赤色塗彩を施す。6は壺の底部から胴中央部にかけての破損品である。7、8は甕または壺の底部、9は壺の口縁から胴部にかけての破片で頸部に簾状文を施す。10～12は壺の口縁付近の破片と考えられ11、12は外面口辺部にハケ目痕を施す。13～15は壺の口縁付近の破片と思われ、口辺部に波状文、頸部に簾状文を施す。同一個体の可能性も考えられる。16～20は甕・壺の破片と考えられ16の外側は頸部に簾状文、頸部の上下に波状文を施す。17は頸部に簾状文、胴部櫛羽状文、18は頸部に上から斜状文、波状文、下向き鋸歯文を施す。19は櫛歯文、20は櫛羽状文を施す。21～23は棒状の鉄製品だが芯が固いため混入の可能性が高い。24は石匙、25・26石包丁、27は磨製石鏃等に利用される千枚岩で、図示したほか多数剥片が出土していることから、製品の製作を行っていた可能性が推察できる。本住居址は弥生時代後期前半と考えられる。



第61図 H27号住居址遺物実測図(1)



第62図 H27号住居址遺物実測図(2)

24~27 (1:2)

番号	器種	器形	口径cm	高径cm	器底cm	調査・文様	残存率・破損	形状	色調(外観) (内観)
1	丸中式土器	鉢	18.5	5.2	9	内外赤色塗彩	50	片	赤色 赤色
2	丸中式土器	鉢	11.1	6.7	12.5	外周へラナゲ	60	片	緑・褐色 緑・褐色
3	丸中式土器	ミニチュア 壺型	4.9	-	-	外周赤褐色不明 内面へラナゲ	40	片	緑・褐色 緑・褐色
4	丸中式土器	高杯	-	-	-	外周赤色塗彩 内面へラナゲ	破断断片	片	赤色 紅色
5	丸中式土器	高杯	-	-	-	内外面塗彩し洗擦不明	破断断片	片	褐色 褐色
6	丸中式土器	壺	-	[11.0]	-	摩滅し不明 壺上下部内面に黒塗彩	高径・破断断片	片	浅茶褐色 浅茶褐色

第41表 H27号住居址遺物観察表(1)

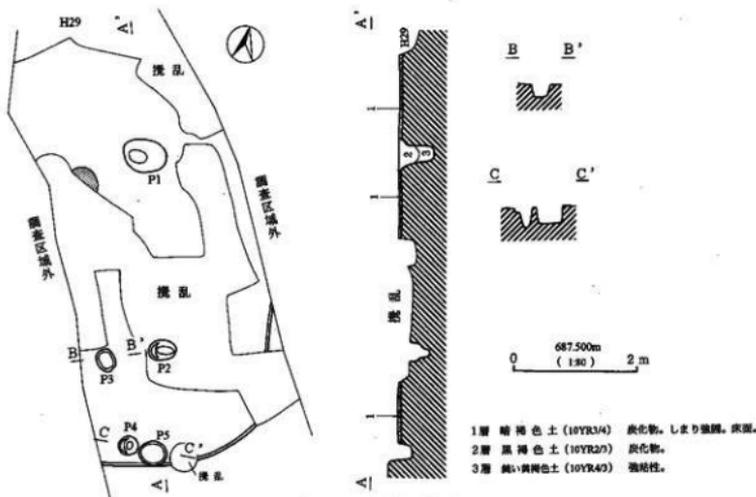
7	弥生式土器	-	-	9	-	内外摩耗し調整不明	底部100	良	褐色 黒色
8	弥生式土器	-	[16.0]	-	-	内外摩耗し調整不明	底部破片	良	褐色 鈍い褐色
9	弥生式土器	葉	-	[11.2]	-	頸部皺状文	口縁~頸部破片	良	淡黄色 褐色
10	弥生式土器	瓶	[23.2]	-	-	口縁部糸縁 口辺横ナメ 口辺内面一部赤色染付痕	口辺破片	良	褐色 鈍い褐色
11	弥生式土器	瓶	[17.5]	-	-	口辺外面ハケ目	口辺破片	良	褐色 褐色
12	弥生式土器	瓶	-	-	-	口辺外面ハケ目	L口辺破片	良	褐色 褐色
13	弥生式土器	葉	[25.2]	-	-	口辺外面磨損痕状文 頸部皺状文	口縁~頸部破片	良	灰褐色 褐色
14	弥生式土器	葉	-	-	-	口辺磨損痕状文 頸部皺状文	口辺~頸部破片	良	赤褐色 暗赤褐色
15	弥生式土器	葉	-	-	-	口辺磨損痕状文 皺状文	口辺破片	良	赤褐色 暗赤褐色
16	弥生式土器	瓶	-	-	-	頸部外面皺状文	頸部破片	良	鈍い褐色 褐色
17	弥生式土器	葉	-	-	-	頸部外面皺状文 磨損羽状文	頸部破片	良	暗赤褐色 鈍い赤褐色
18	弥生式土器	葉	-	-	-	頸部斜状文 磨損痕状文 下向糸縞痕文	頸部~頸部破片	良	明灰褐色 鈍い赤褐色
19	弥生式土器	葉	-	-	-	磨損羽状文	頸部破片	良	灰褐色 褐色
20	弥生式土器	葉	-	-	-	磨損羽状文	頸部破片	良	黒色 黒色

第42表 H27号住居址遺物観察表(2)

番号	器 種	石 材	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)	番号	器 種	石 材	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)
24	石彫	安山岩	5.7	2.8	0.7	11.4	26	石包丁	千枚岩	1.2	5.6	0.3	2
25	石包丁	千枚岩	1.6	4.1	0.25	2.4	27	銅片	千枚岩	3.5	8.7	0.55	28.6

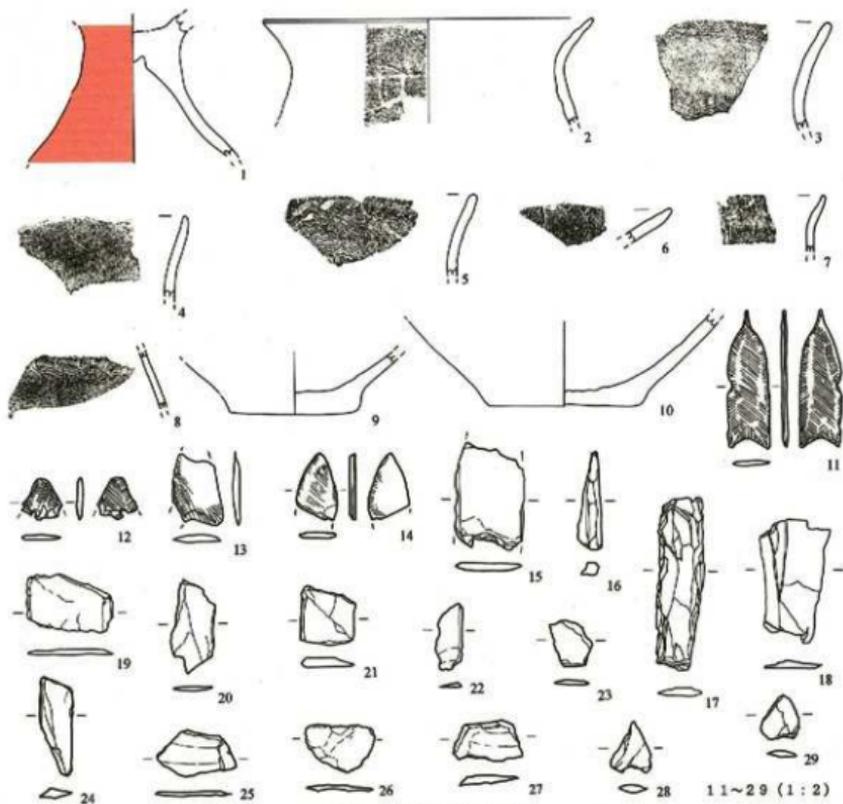
第43表 H27号住居址石類観察表

H28号住居址



第63図 H28号住居址実測図

遺構はC区で-60グリッドに位置する。西、東側は調査区外となる。北側はH29に切られる。遺構は周辺の攪乱による破壊が激しく、確認できたのは南、東壁の一部と床面である。形態は現状での判断はできない。深さは残存壁から最大10cmを測る。床面の残存部分は固く、全体に3cm内外の厚みで貼り床されていた。ピットは5個確認でき、P1、2が支柱穴と思われる。P1の西側50cmには西側半分を攪乱に破壊され残存した半円形の焼土の堆積が認められた。位置的に竈址である可能性が高い。貼り床下の住居址掘方は存在しなかった。遺物は弥生式土器の甕、高坏などが出土した。図示したのは29点である。1は高坏の脚部で外面に赤色塗彩の痕跡が一部認められる。2～8は甕・壺の口縁付または胴部の破片で、外面に波状文あるいは縞状文が施される。9,10は甕または壺の底部である。11～14は千枚岩製の磨製石鏃で11はほぼ原型をとどめる。12は破損品で、径1mmほどの孔が認められる。13も破損品で僅かな破片である。14は未製品の破損品である。15～29は磨製石鏃製作に使用される千枚岩で多数出土していることから、製品の製作を行っていた可能性が推察できる。本住居址は弥生時代後期前半と考えられる。



第64図 H28号住居址遺物実測図

番号	器種	器形	口径cm	底径cm	器高cm	調査・文様	残存率・部位	状況	色調(外側/内側)
1	弥生式土器	高坏	-	-	-	外面一部赤色塗彩痕 内面ヘラナデ	胴部60	良	赤色 褐色
2	弥生式土器	壺	[27.0]	-	-	胴部縞状文 内外面赤色塗彩	口縁-胴部破片	良	赤褐色 褐色
3	弥生式土器	甗	-	-	-	外面縞線流波状文 内面ヘラナデ 内側赤色塗彩痕	口縁破片	良	鈍い褐色 鈍い褐色
4	弥生式土器	甗	-	-	-	外面縞線流波状文 内面ヘラナデ 内側赤色塗彩痕	口縁破片	良	鈍い褐色 鈍い褐色
5	弥生式土器	甗	-	-	-	外面縞線流波状文	口縁破片	良	鈍い褐色 灰褐色
6	弥生式土器	甗	-	-	-	外面縞線流波状文	口縁破片	良	暗褐色 暗褐色
7	弥生式土器	壺	-	-	-	口縁外面縞線流波状文 胴部縞状文	口縁破片	良	明赤褐色 黒褐色赤褐色
8	弥生式土器	壺	-	-	-	胴部縞状文 外面縞線流波状文	胴部破片	良	褐色 黒褐色赤褐色
9	弥生式土器	-	-	8.8	-	内外面磨削し調整不明	底面100	良	褐色 淡黄褐色
10	弥生式土器	-	-	9.8	-	内外面磨削し調整不明	底面50	良	淡黄褐色 淡黄褐色

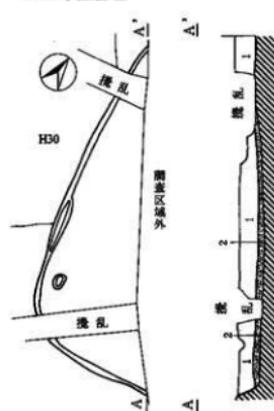
第44表 H28号住居址遺物観察表

番号	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
11	磨製石鏃	千枚岩	5.6	1.7	0.2	2.6
12	磨製石鏃 (尖製品)	千枚岩	1.7	1.6	0.2	0.7
13	磨製石鏃 (尖製品)	千枚岩	2.9	2.1	0.23	1.8
14	磨製石鏃 (尖製品)	千枚岩	2.7	1.65	0.25	1.2
15	剥片	千枚岩	4.3	2.8	0.26	5
16	剥片	千枚岩	4	1	0.5	1.7
17	剥片	千枚岩	7	2	0.35	6.7
18	剥片	千枚岩	5.05	2.9	0.3	5.2
19	剥片	千枚岩	3.5	2.4	0.2	2.2
20	剥片	千枚岩	3.9	1.8	0.2	1

第45表 H28号住居址石類観察表

番号	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
21	剥片	千枚岩	2.5	2.3	0.4	3.2
22	剥片	千枚岩	2.7	1.1	0.2	0.5
23	剥片	千枚岩	1.9	1.7	0.25	0.9
24	剥片	千枚岩	4.1	1.4	0.37	2.2
25	剥片	千枚岩	2	3.3	0.37	2.2
26	剥片	千枚岩	1.9	2.8	0.25	1.3
27	剥片	千枚岩	1.7	2.9	0.37	1.8
28	剥片	千枚岩	2.1	1.7	0.25	0.7
29	剥片	千枚岩	1.8	1.7	0.25	0.9

H29号住居址



遺構はC区と-59グリッドに位置する。東側は調査区外となり、H28、H30を切る。確認できたのは北壁4.8m、南壁2.4mの南西コーナー付近の範囲で、深さは25cm内外を測る。床面はほぼ平坦で固い。ピットは1個確認できたが性格は不明である。カマド等の施設は確認できなかった。掘方は全体に10cm内外の厚みで炭化物、砂質土を含む暗褐色土が埋め込まれ、固く締まっており、上面を床面として利用していた。

遺物は土師器の破片が出土したが図示できる物はなかった。本住居址の時期は不明である。

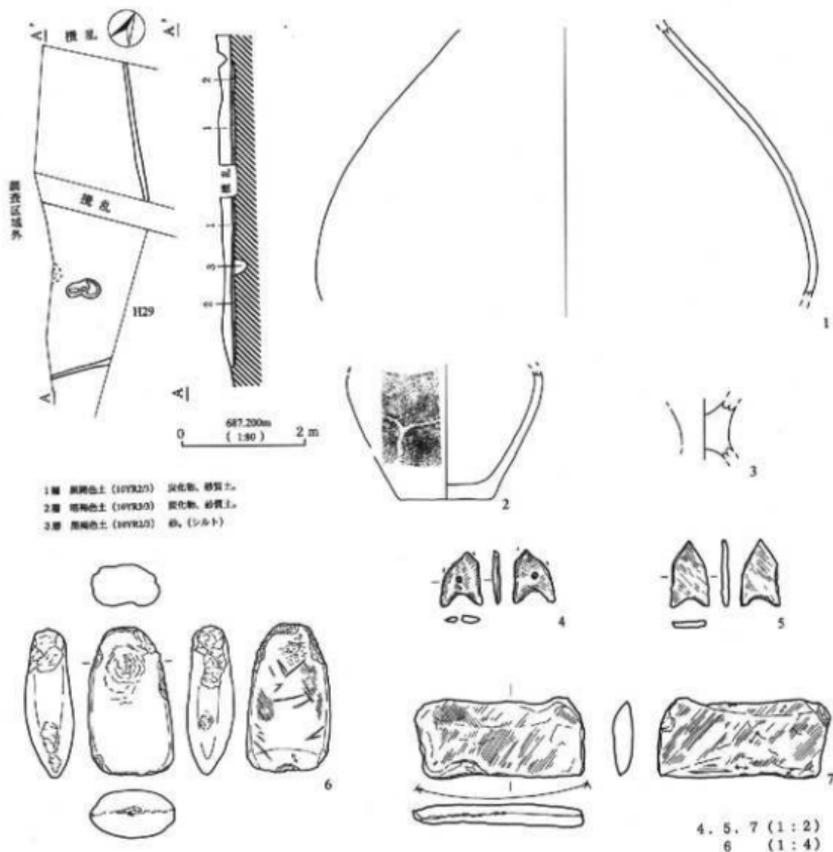
- 1層 暗褐色土(10YR3/3) 炭化物、砂質土。
- 2層 暗褐色土(10YR3/4) 炭化物・砂質土多。上面一部しまり硬固。床底。

第65図 H29号住居址実測図

H30号住居址

遺構はC区と58グリッドに位置する。北、西側は調査区外、東はH29に切られる。確認できた規模は南壁1.0m、東壁2.2m、床面までの深さ8cm内外である。床面はほぼ平坦で固く、ピットは住居址南寄りから2個確認できたが、性格は不明である。掘方は全体に3～8cmの厚みで、貼り床状に暗褐色土が埋め込まれ、上面を床として利用していた。

遺物は弥生土式土器、磨製石斧、磨製石鎌が出土した。図示したのは7点である。1は壺胴部の破片である。2は甕の底部から胴部にかけての破損品で胴部下半にハケ目を施す。3は高坏の脚部破損品である。4、5は千枚岩製の磨製石鎌である。4には径2mmほどの孔が穿たれる。6は磨製石斧である。7は横刃型の石器で穂積み具と考えられる。本住居址は弥生時代後期前半と考えられる。



第66図 H30号住居址・遺物実測図

番号	器種	器形	口径cm	底径cm	器高cm	調査・文様	残存部・部位	焼成	色調(外側) 内側
1	弥生式土器	甕	-	-	-	内外面ともに摩耗	胴部破片	良	鈍い黄色 灰白色
2	弥生式土器	壺	-	6.2	-	外郭周縁文残響り消し	底部-胴部破片	良	明赤褐色 明赤褐色
3	弥生式土器	高坏	-	-	-	坏底内面赤色塗彩	坏底部-脚部	良	黄色 明赤褐色

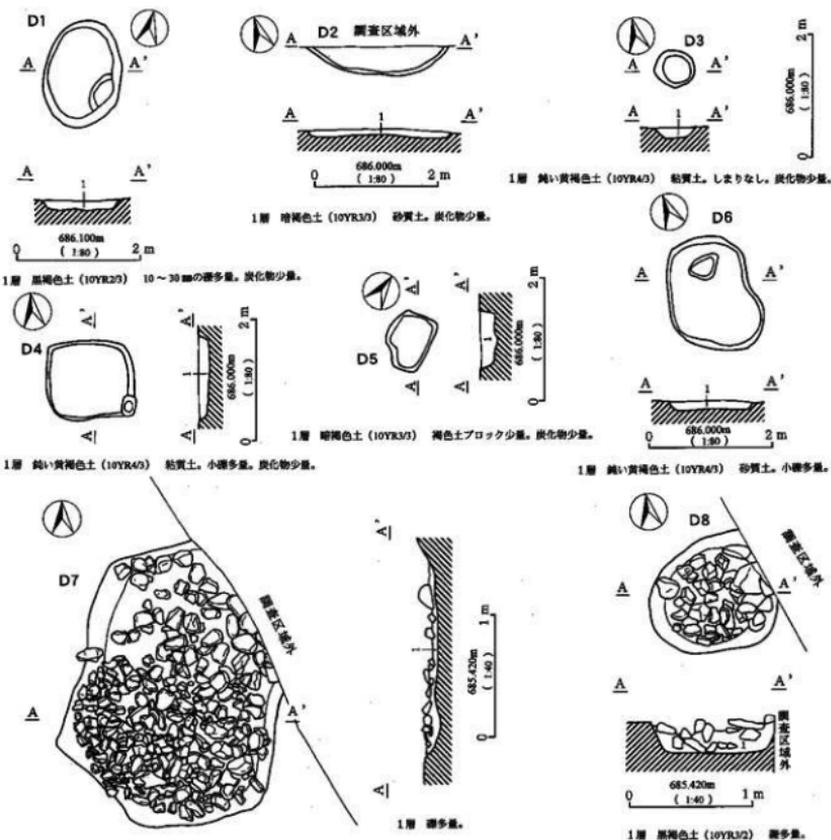
第46表 H30号住居址遺物観察表

番号	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
4	磨製石鏃	千枚岩	2.2	1.7	2.5	1
5	磨製石鏃	千枚岩	2.7	1.6	2.3	1.4

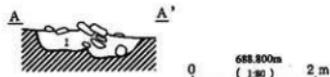
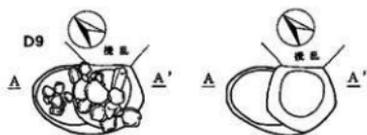
番号	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
6	磨製石斧	閃輝岩	12	6.8	4	512
7	横刃形石器	雲山岩	3.5	6.9	0.8	28.2

第47表 H30号住居址石類観察表

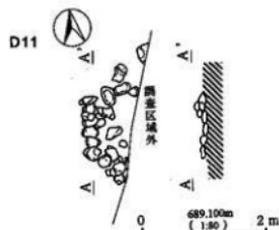
第2節 土坑



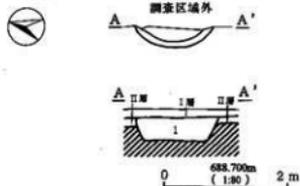
第67図 土坑実測図(1)



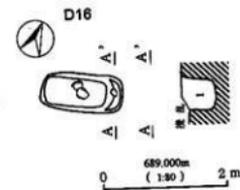
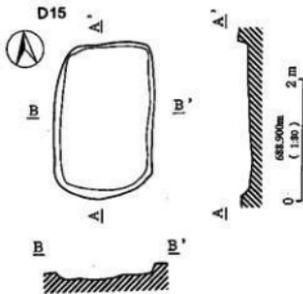
1層 黒褐色土 (10YR3/2) 焼土粒子・炭1%, 強粘質, 粘子粗い。



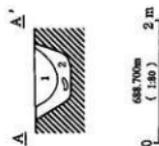
D13



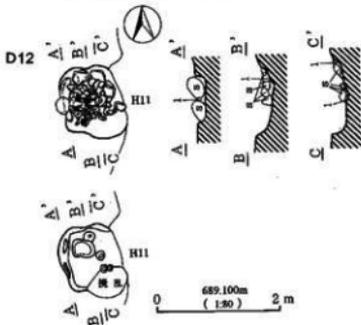
1層 黒褐色土 (10YR2/2) 10YR5/6 (黄褐色土) 7%~3cm を極めて多量に含む。
炭化物片 (1~5mm) を僅かに含む。



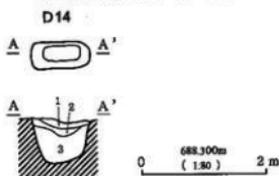
1層 黒褐色土 (10YR2/2) 柔らかい, しまりなし。



1層 黒褐色土 (10YR2/2) 7.5YR3/4 アダク 30% 焼土粒子・炭2%,
5~10cm大の礫, 強粘性, 固い。
2層 黒褐色土 (10YR2/2) 強粘性, 固い。



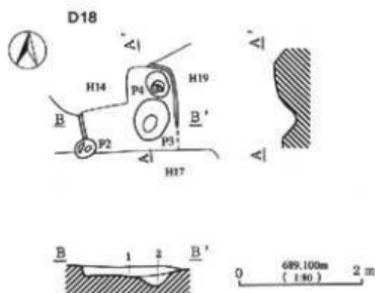
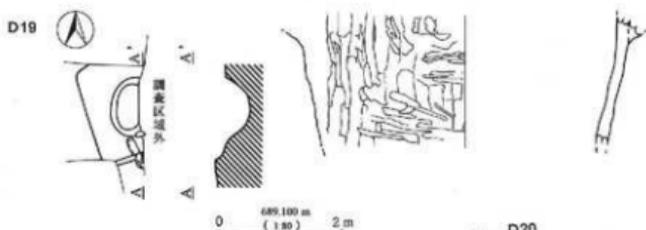
1層 黒褐色土 (10YR2/2) 焼土粒子少量, 粘質強い。



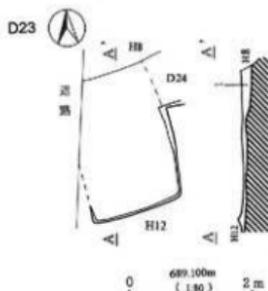
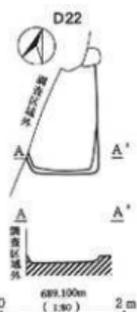
1層 黒褐色土 (10YR2/2) 黄褐色土 7%~9% (~6cm) 多い。
2層 黒褐色土 (10YR2/2) 黄褐色土 7%~9% (~6cm) 多い。
3層 黒褐色土 (10YR2/2) 黄褐色土 7%~9% (~1cm) 様多い。



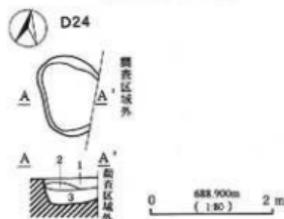
第68図 土坑実測図 (2)



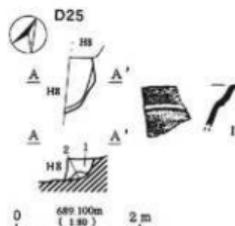
- 1層 黄-灰褐色土 (10YR6/3) 砂粒, 7%砂量に含む。
2層 黄褐色土 (10YR5/3) 砂粒, 7%砂量に含む。



- 1層 暗褐色土 (10YR3/4) 炭化物、砂含む。



- 1層 暗褐色土 (10YR3/2) 磁土・炭化物多し。
2層 暗赤褐色土 (7YR3/5) 焼土多し。
3層 黄褐色土 (10YR5/2) 磁土・炭化物多し。



- 1層 暗褐色土 (10YR3/2) 炭化物・黄褐色土含む。
2層 暗褐色土 (10YR3/4) 褐色土主体。暗褐色土含む。

第69図 土坑実測面 (3)

遺構名	検出位置	平面形	東西(cm)	南北(cm)	深さ(cm)	出土遺物	重複遺構
D 1	B区6-36	楕円形	62	88	8		
D 2	B区6-36	不明	[12]	[24]	6		北調査区外
D 3	B区6-36	円形	24	25	8		
D 4	B区6-37	方形	72	68	12		
D 5	B区6-37	不整形	36	48	12		
D 6	B区6-36	不整形	73	87	6		
D 7	B区8-24	不整形	168	232	12	漆多量	北東調査区外
D 8	B区8-25	円形	104	96	36	漆多量	北東調査区外
D 9	F区8-110	楕円形	184	112	40		H15・17
D10	F区8-109	円形	136	120	576		H17
D11	F区8-117	円形	—	160	—		H13
D12	F区8-114	隅丸方形	104	108	24		H11
D13	E区8-102	[円形]	—	128	34	土師器片	H2・5
D14	E区8-102	隅丸長方形	96	42	72		攪乱
D15	F区8-112	隅丸長方形	160	256	15	土師器片	H21
D16	F区8-118	隅丸長方形	132	56	55		
D17	F区8-110	[円形]	[64]	90	32	土師器片	H15・17
D18	F区8-109	[方形]	[156]	[136]	30	弥生式土器・土師器片	H14・17
D19	F区8-108	[円形]	[112]	[168]	56	土師器片	H17・19
D20	F区8-118	不明	[75]	[112]	24		H12
D21	F区8-116	[方形]	[83]	[58]	32		H20
D22	F区8-116	[方形]	116	[176]	10		H8
D23	F区8-117	[方形]	148	232	16		H12・D26
D24	F区8-113	不整形	96	132	40		H16
D25	F区8-116	不明	[42]	[96]	32	土師器片・須恵器片	H8
D26	F区8-117	[方形]	[80]	[104]	12		H8・12・D23

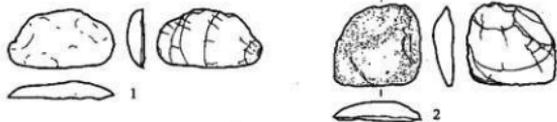
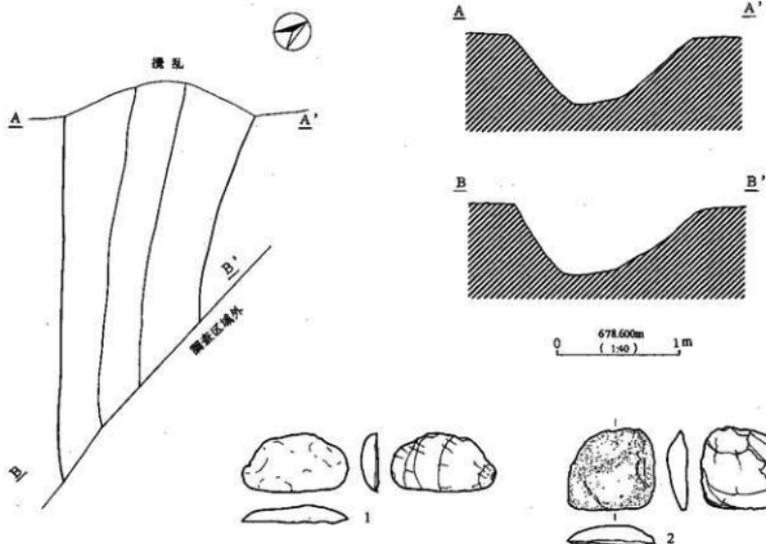
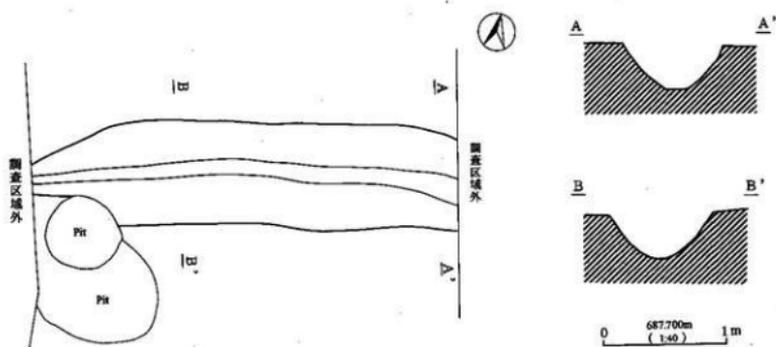
第48表 土坑観察表

番号	器種	器形	口径cm	底径cm	器高cm	調査・文様	残存率・部位	産地	色調 (外側) (内側)
D13	土師器	高杯	—	—	—	脚部外周にミガキ 内面ヘラナデ	脚部70	良	褐色 褐色
D19	土師器	壺	—	—	—	外面縦ヘラ削り・ヘラナデ 内面ヘラナデ	胴部破片	良	褐色 褐色
D25	須恵器	壺	—	—	—	ロクロナデ	口沿破片	良	黄灰色 黄灰色

第49表 土坑遺物観察表

第3節 溝状遺構

溝状遺構はD区から東西方向にのびると考えられる2条が確認された。M1はD区南端け-83グリッドに位置し、確認規模は長さ3.5m、確認面上での幅0.8m、底面幅0.2m内外、深さ40cm内外を測る。遺物は出土しなかった。M2はD区北側さ-79グリッド、H27の南に位置し、西側は攪乱によって破壊されている。確認された規模は長さ3.0m、確認面上での幅は1.1~1.4m、底幅0.4m内外、深さ60cm内外を測る。覆土内からは弥生式土器、土師器が出土したが、いずれも小破片で図示できるものは存在しなかった。



1. 2 (1:4)

第70图 M1・2号溝状遺構・遺物実測图

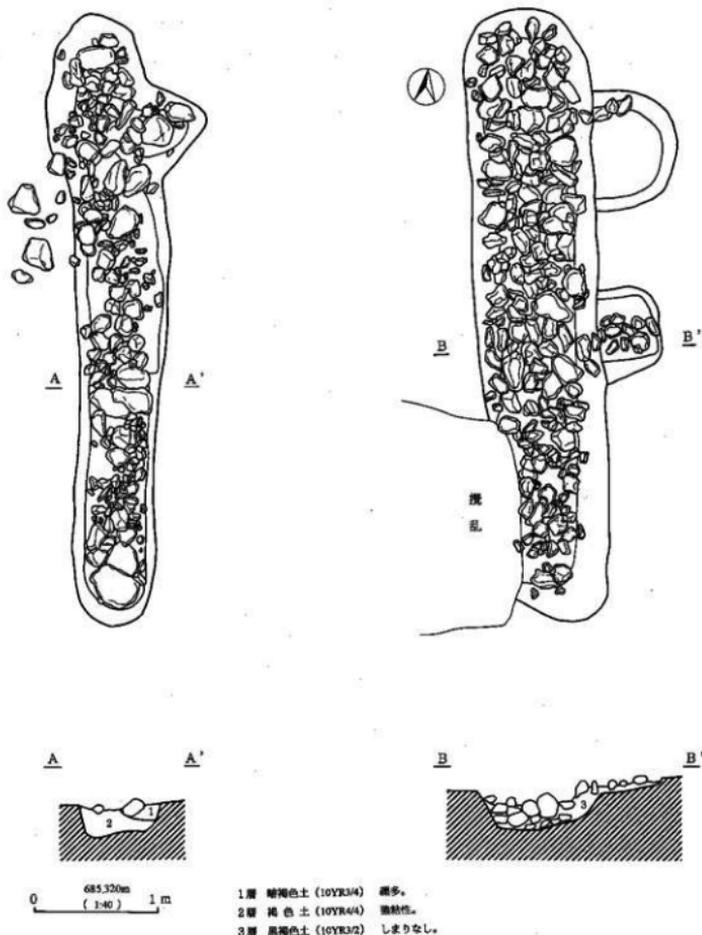
番号	部 種	石 材	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)
1	副片	硬質砂岩	4.8	8.5	1.4	65.8

番号	部 種	石 材	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)
2	副片	硬質砂岩	6.6	7	1.6	92.6

第50表 M2号溝状遺構石副観察表

第4節 竪穴状遺構

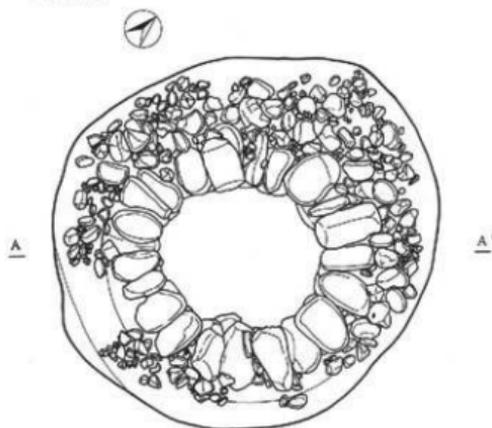
遺構は調査区北のB区ざ-25グリッドに位置する。確認当時はおよそ南北方向に2列の集石列が確認でき、調査を行った。その結果、集石は1列が長辺5.0m、短辺0.62~1.0m、深さ35cm内外の掘り込みを持つことが確認され、この掘り込みに5~30cm大の河原石が隙間なく詰め込まれていた。また、この集石を囲むようにほぼ1辺5~6mの方形の掘り込みが認められ、周辺から江戸中期から近代の陶磁器が出土した。本遺構は全体の状況から建物の基礎跡である可能性が考えられる。



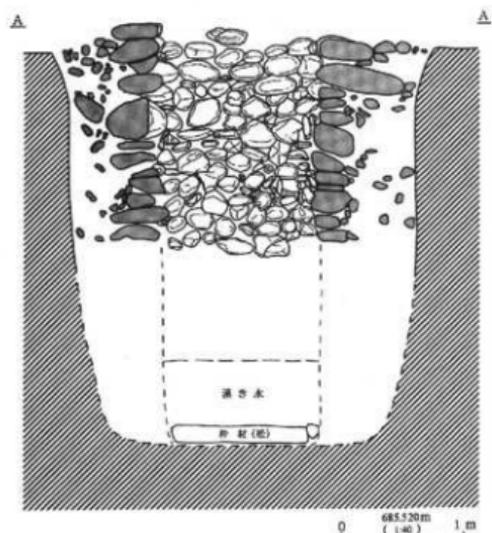
第71図 Ta1号竪穴状遺構実測図

第5節 井戸跡

1号井戸跡



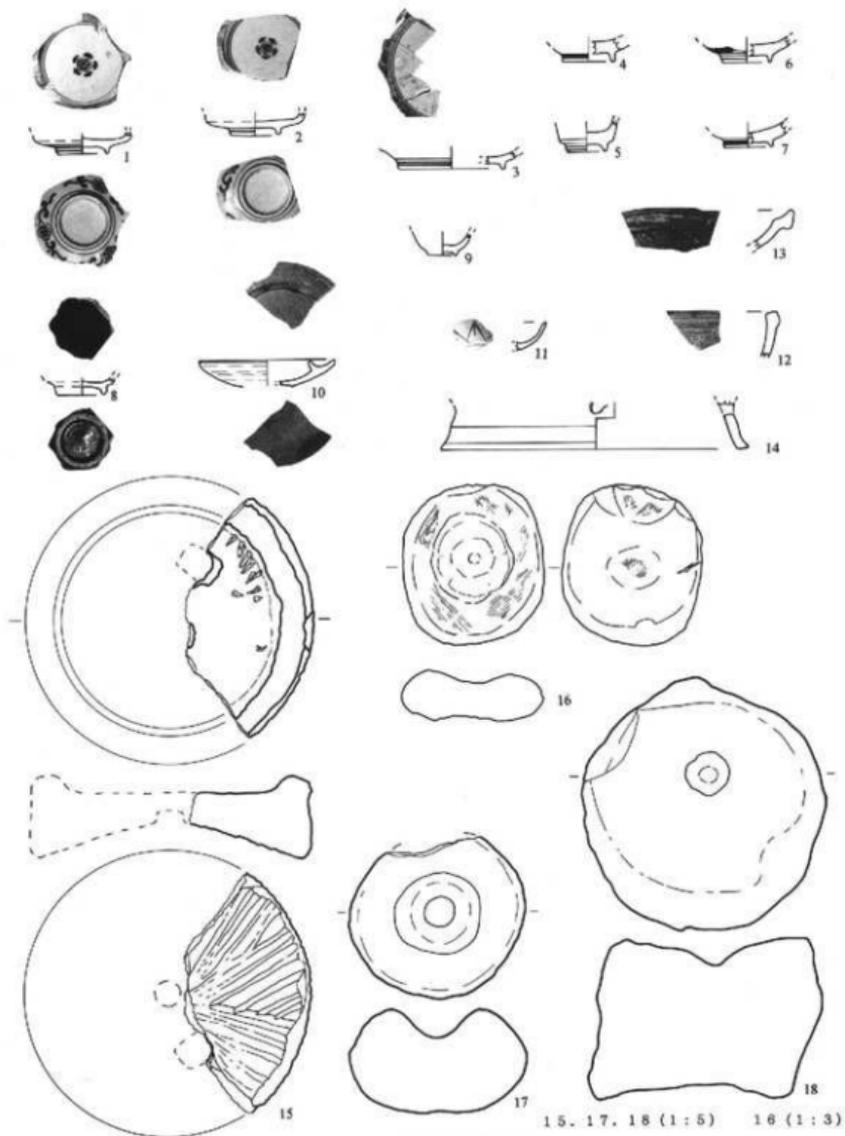
写2 井戸底面出土物時



第72図 1号井戸跡実測図

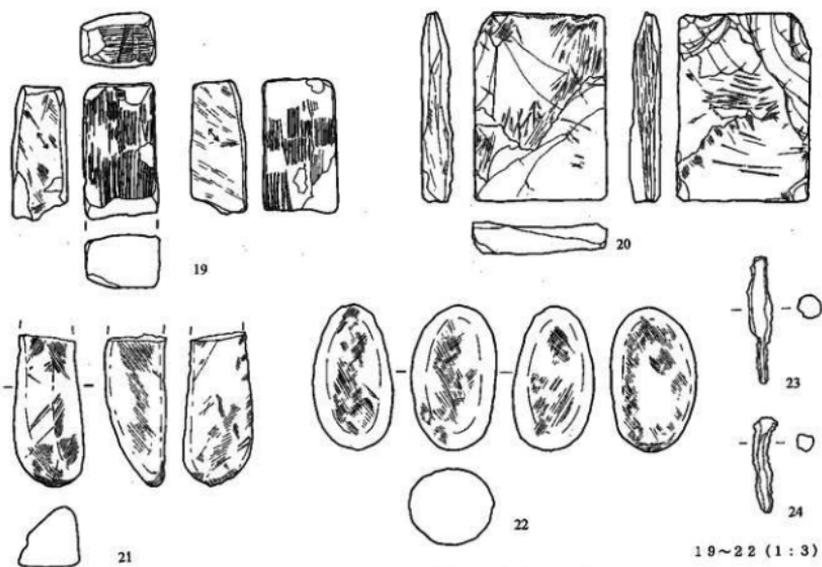
利用されたと同様の河原石の順に詰め込まれていた。調査中、確認面から2.7mまで湧水が認められた。遺物は底面付近から木材、江戸中期～近代にかけての陶磁器、石製品、硯が出土した。図示したのは24点である。

遺構は調査区中央のB区が-27グリッドに位置する。確認面は浅く、現地表から僅かな深さから壁面に積み上げられた石材最上段部が確認できた。平面形はほぼ円形で、確認面での内径(石材の範囲は除く)は最大1.28m、深さは4mを測る。調査は確認面から1.8m付近まで積み上げられた石材の状況確認を行い、それ以下の部分は安全性を考え、重機による底面までの半截作業を行った。結果、底面は松の丸材によって方形に枠組みされ、そのやや上部から石材の崩落を防ぐため僅かに逆ハの字状を呈し積み上げられていた。また、石材を積み上げる前に掘り込まれた掘方と石材の間には強粘性で練混じりの褐色土が埋め込まれていた。井戸は埋め戻しによると思われる土が、底から灰褐色の砂礫土、褐色の砂礫土、壁に



15. 17. 18 (1:5) 16 (1:3)

第73图 1号井戸跡遺物表圖(1)



第74图 1号井戸跡遺物実測図(2)

19~22 (1:3)

番号	時期	種類	器種
1	18C後	肥前系	碗
2	18C後	肥前系	碗
3	18~19C	肥前系	皿
4	18C後	肥前系	碗
5	18C	肥前系	器口

番号	時期	種類	器種
6	18C後	肥前系	碗
7	18C後	肥前系	碗
8	18C	瀬戸美濃系	碗
9	不明	瀬戸美濃系	小杯
10	不明	瀬戸美濃系	灯明皿

番号	時期	種類	器種
11	不明	瀬戸美濃系	小皿
12	不明	瀬戸美濃系	鉢
13	18C前	瀬戸美濃系	権持
14	不明	不明	火鉢

第51表 1号井戸跡遺物観察表

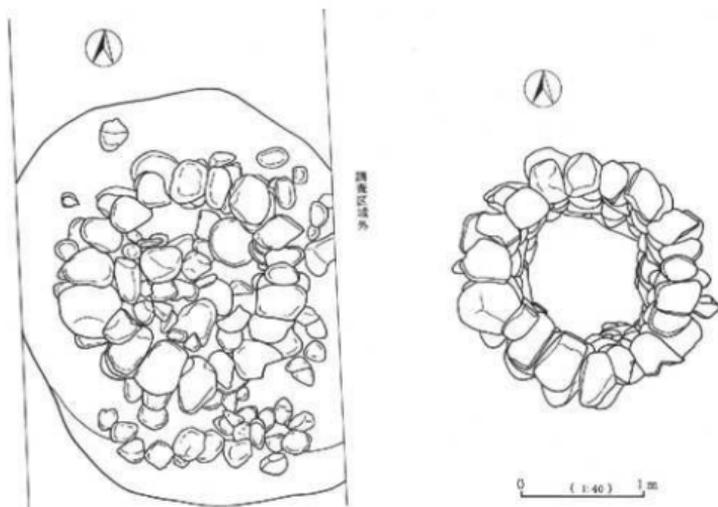
番号	器種	石材	底径(cm)	高さ(cm)	ふくみ(cm)
15	石臼	輝石安山岩	[29]	8.5	3.1
	芯棒径(cm)	供給口(cm)	回転方向	重量(g)	
	—	—	左	2,900	

番号	器種	石材	径(cm)	高さ(cm)	深さ(cm)	重量(g)
16	巴西	輝石安山岩	9.6	8.5	3.1	400
17	巴西	輝石安山岩	17.8	10.6	2.9	3,640
18	巴西	安山岩	24.4	16	2.6	

番号	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
19	砥石	凝灰岩	8.15	4.5	3.25	200.3
20	砥石用砥石	粘板岩	11.5	8.1	1.9	255
21	磨石・磨石	安山岩	9.3	4.3	3.7	185
22	磨石	輝石安山岩	8.7	5.2	4.9	300

第52表 1号井戸跡石類観察表

2号井戸跡



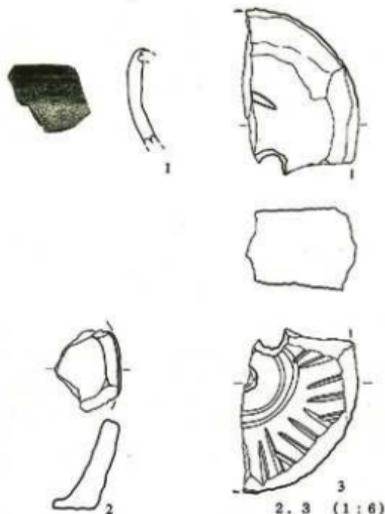
第75図 2号井戸跡実測図



写3 2号井戸跡干成状況

遺構はE区えー105グリッドに位置し、H 5、25を切る。確認面は地表から20cm内外と浅い。平面形はほぼ円形で、確認面での内径1.25m内外（石材の範囲は除く）底径1.8～1.9m、深さ2.5mを測る。構築材には扁平な河原石を多量に使用し、底壁面から石材の安定と崩落を防ぐためややハの字に傾斜を付け積み上げている。石を積み上げる以前に掘り込まれた掘方と石材の間には強粘性で小礫混じりの暗褐色土が埋め込まれていた。井戸内には壁に利用されたと同様の河原石が多量に詰め込まれていることから、埋め戻しに使用されたものと思われる。

遺物は陶器片1、石臼の上臼1点、石搗き石の破損品が1点出土した。時期は出土遺物が僅かなため確定できないが、試掘調査時に最近まで使用され、現在の瓦によって埋め戻されている同形態の井戸跡が確認されていることから、近世末から近代という比較的新しい時代であろう。



第76図 2号井戸跡遺物実測図

番号	品名	形状	口径cm	底径cm	壁厚cm	調査・支 持	残存率・部位	保存	色調 (外側・内側)
1	遺物	盤	-	-	-	ロクロナナ 自然附付壁	崩壊下破片	良好	外側光黄色、 内側赤褐色

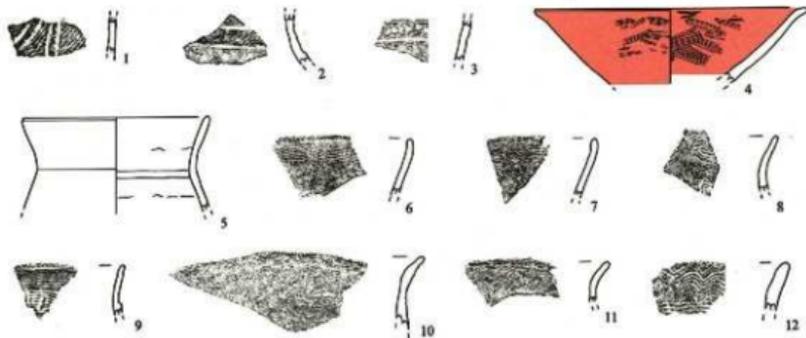
第53表 2号井戸跡遺物観察表

番号	品名	石材	長さ(cm)	高さ(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
2	磨鉢	輝石安山岩	-	11	10	425

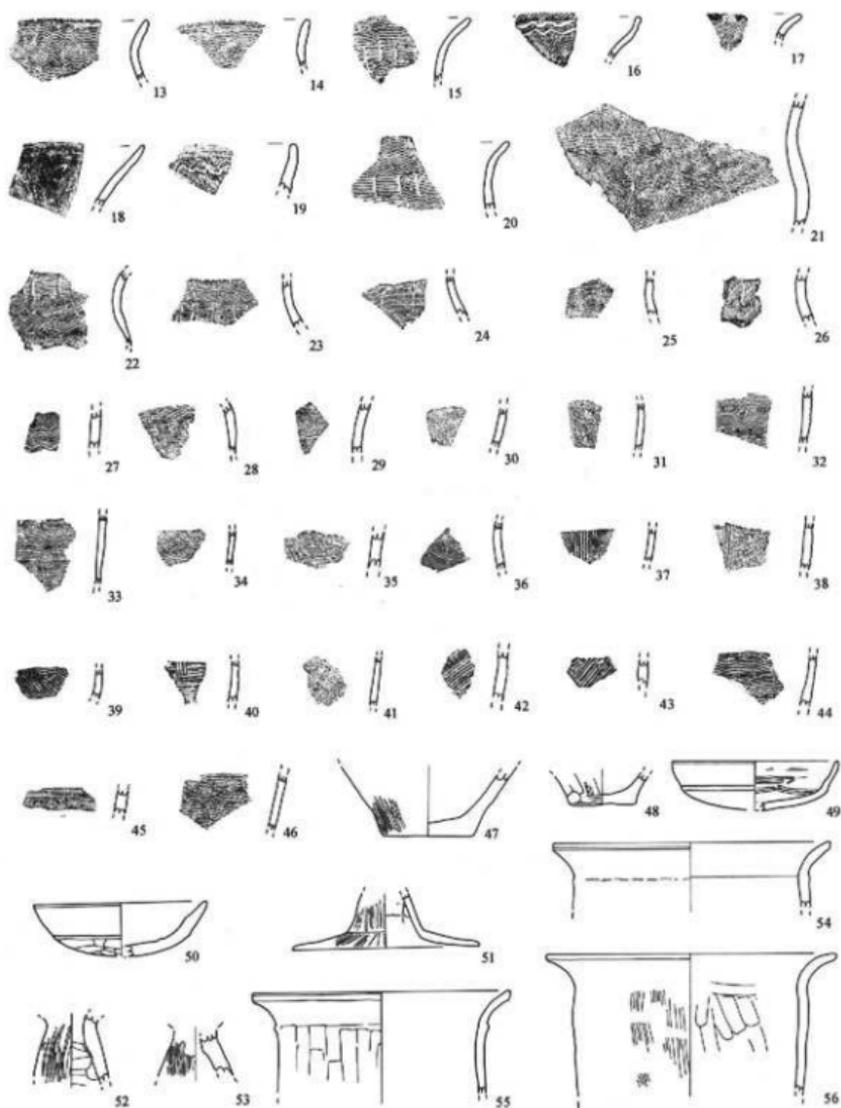
第54表 2号井戸跡石頭観察表

番号	部 位	石 材	直径(cm)	高さ(cm)	容み(cm)
3	石臼	褐色硬質安山岩	[20]	[10]	2
	芯棒(木)	鉄棒(鉄)	直径方向	重量(g)	
	-	-	左	2,800	

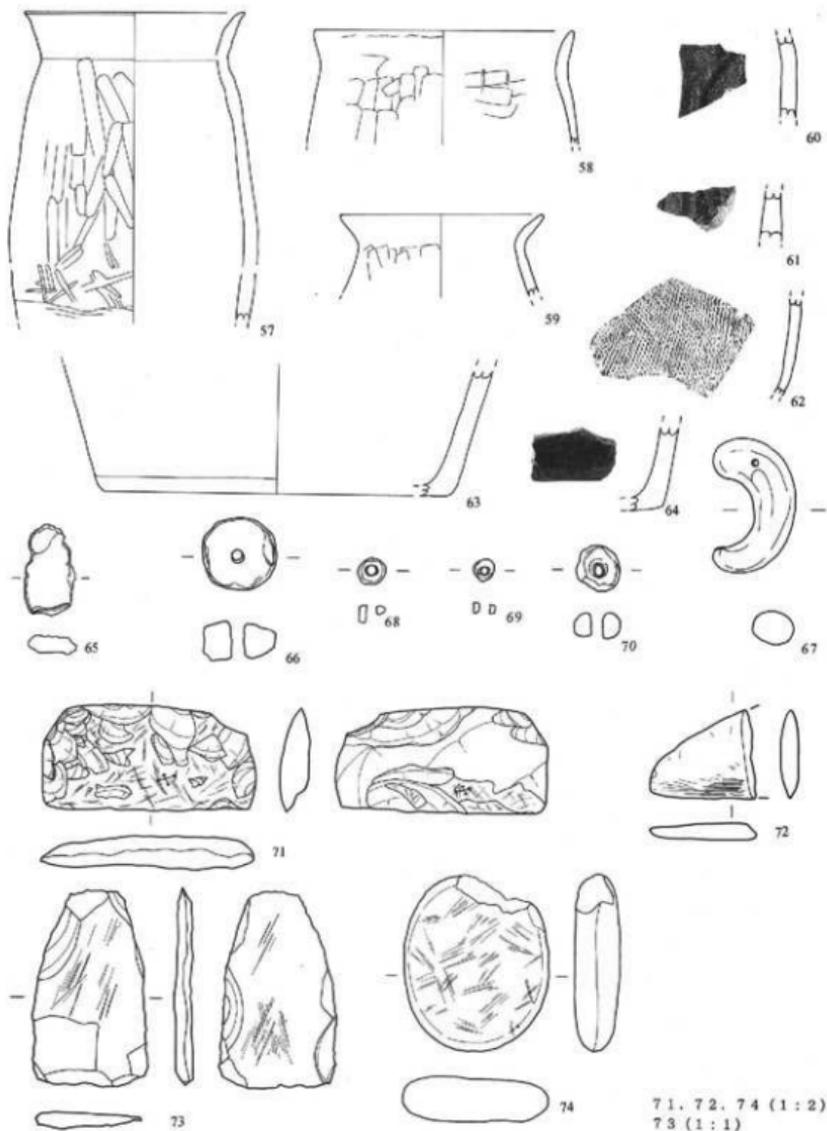
第6節 遺構外遺物



第77図遺構外遺物実測図(1)

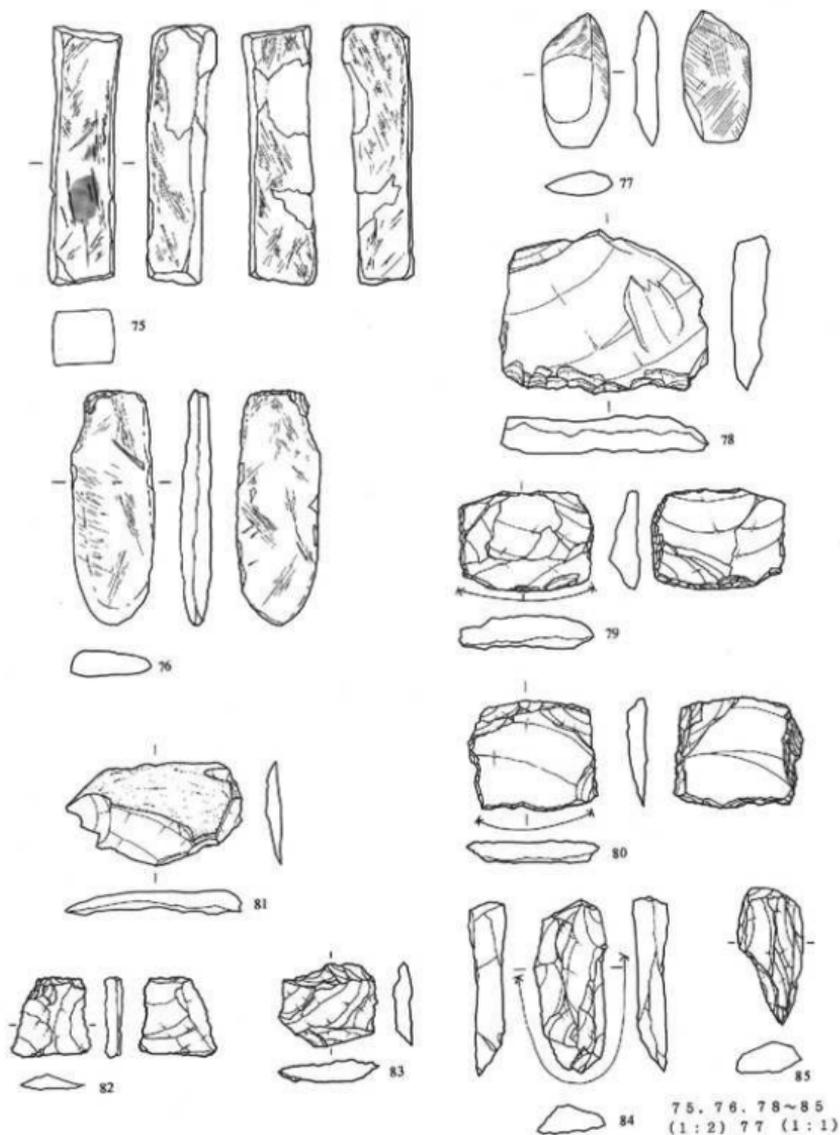


第78图 漆器外遗物表图(2)

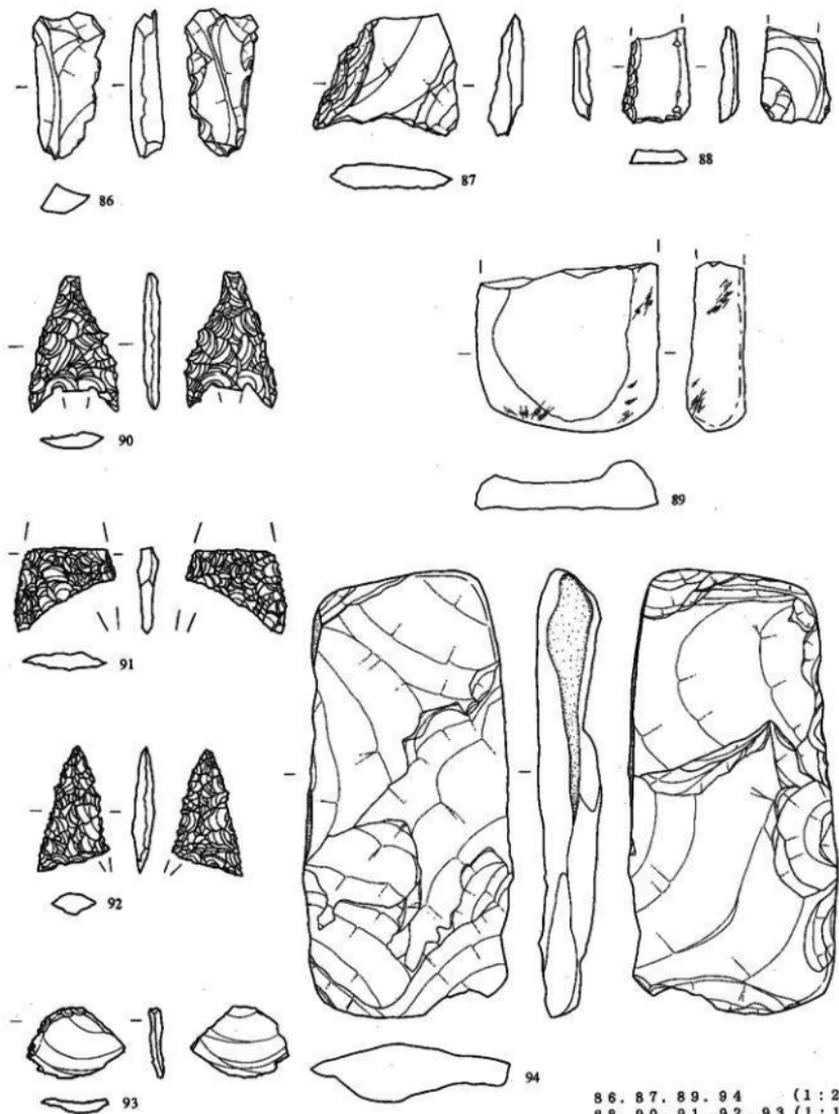


第79图 道镇外遗物实图(3)

71. 72. 74 (1:2)
73 (1:1)

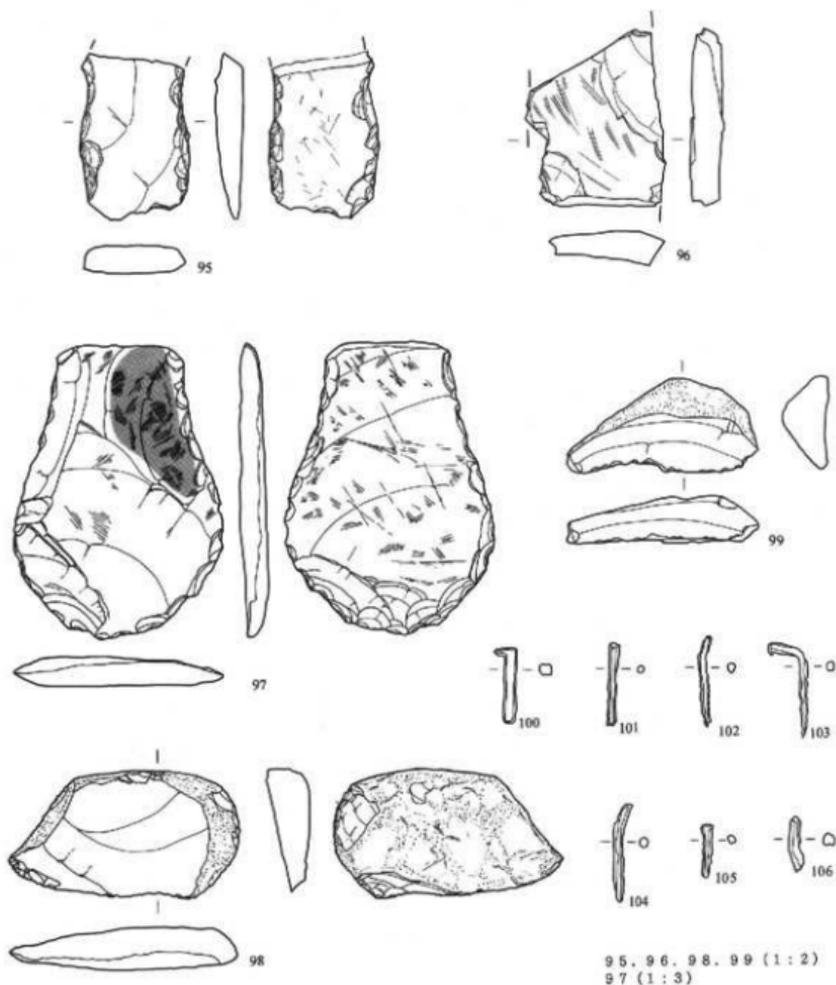


第80回 遺物外遺物実測図(4)



86. 87. 89. 94 (1:2)
 88. 90. 91. 92. 93 (1:1)

第81图 遗物外遺物实例图(5)



95, 96, 98, 99 (1:2)
97 (1:3)

第82図 遺構外遺物実測図(6)

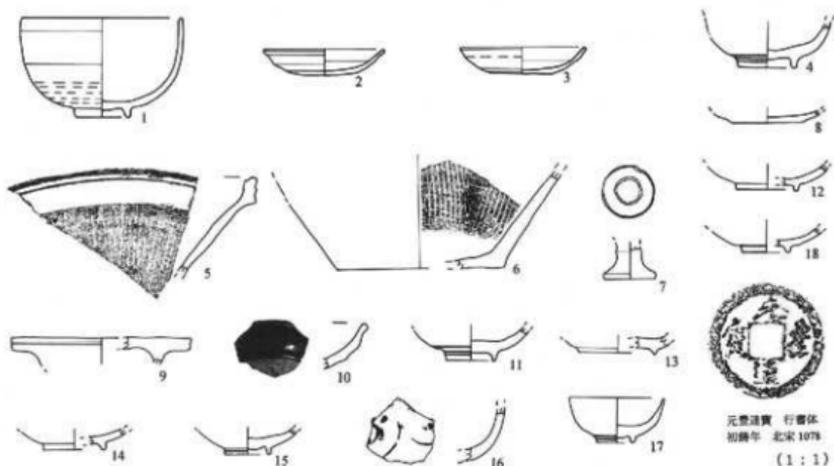
番号	出土位置	種類	長さ (mm)	幅 (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	材質	色澤
66	F-2-111	白玉	7.2	14.7	2.7	2.2	燧石	灰白色
67	A区グリップ	燧石	2.74	0.2×6.2	1.3	3.6	燧石	明黄褐色
68	F-2-112	白玉	3.1	5.4	1.9	0.1	燧石	灰オリーブ色
69	F-2-112	白玉	4.58	8.75	2.2	0.4	燧石	黒色
70	F-2-112	燧石	2.65	4.1	2	0.1	土粉	黒色

第55表 遺構外土類観察表

番号	器種	石材	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)
71	石製磨器具	砂岩	4.3	8.6	1.2	60
72	石製丁	粘板岩	3.6	4.3	0.7	12
73	磨製石匙	粘板岩	4	2.3	0.4	4.6
74	鏡石	安山岩	7.2	5.8	1.8	100.5
75	鏡石	凝灰岩	10.6	3	2.9	116.7
76	鏡石	輝石安山岩	9.6	3.4	1.3	46.2
77	石製磨道具	ホルンヘルス	2.7	1.4	0.5	1.9
78	棒状磨石器	褐色砂岩山岩	8.4	6.6	1.5	110.2
79	棒状磨石器	ホルンヘルス	4.1	5.4	1.3	36
80	棒状磨石器	ホルンヘルス	4.5	5.3	0.8	25.0
81	棒状磨石器	硬質砂岩	4.2	7.1	0.6	24.8
82	磨片	褐色細砂安山岩	3.2	3.2	0.73	7.1
83	磨片	褐色細砂安山岩	3.4	4.1	0.6	19.8
84	磨片	褐色細砂安山岩	7.1	3.1	1.5	34.9
85	不明	褐色細砂安山岩	0.5	2.6	1.28	16.3

番号	器種	石材	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)
86	磨片	灰色微安山岩	5	2.9	1.3	16.4
87	磨片	灰色微安山岩	5	6	1.4	31.8
88	スケレイバー	凝灰岩	2	1.4	0.4	1
89	磨り石	安山岩	6.9	7.5	2.4	128.3
90	石鏡	凝灰岩	2.7	1.8	0.25	1.2
91	石鏡(未製品)	凝灰岩	1.6	2	0.4	0.9
92	石鏡	凝灰岩	2.5	1.5	0.5	0.9
93	石鏡(未製品)	凝灰岩	1.4	2	2.5	0.5
94	打製石器(葉)	ホルンヘルス	18.2	8.5	2.75	480
95	打製石器	輝石安山岩	6.8	4.45	1.2	38.3
96	磨片	輝石安山岩	7.2	5.7	1.4	68.5
97	打製石器	輝石安山岩	17.8	12.7	1.8	400
98	棒状磨石器	硬質砂岩	3.8	7.8	1.0	64.5
99	棒状磨石器	輝石安山岩	5.2	9.3	1.2	63.7

第56表 遺構外石類観察表



元豐遺寶 行書体
初時年 北宋 1078
(1:1)

第83図 遺構外陶磁器実測図

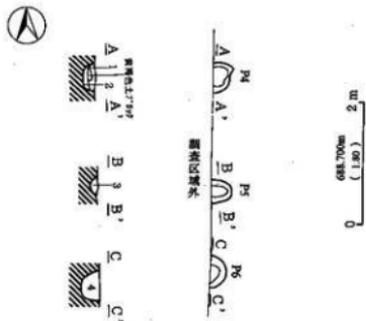
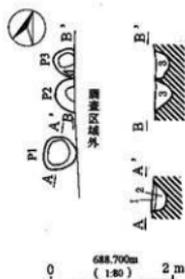
番号	時期	産地	器種
1	17C	瀬戸瓦遺系	碗
2	近世	不明	打明鉢
3	近世	不明	打明鉢
4	17C	瀬戸系	鉢
5	17C	谷汲系	磁鉢
6	17C	瀬戸瓦遺系	磁鉢

番号	時期	産地	器種
7	17C	肥前系	仏飯器
8	近世	不明	打明鉢
9	不明	土師質	平鉢
10	17C	瀬戸瓦遺系	碗
11	17C	肥前系	碗
12	18C~	瀬戸瓦遺系	碗

番号	時期	産地	器種
13	17C	瀬戸系	碗
14	18C~	瀬戸瓦遺系	小皿
15	近世	瀬戸系	碗
16	17C	肥前系	碗
17	17C	肥前系	碗
18	18C~	瀬戸瓦遺系	小皿

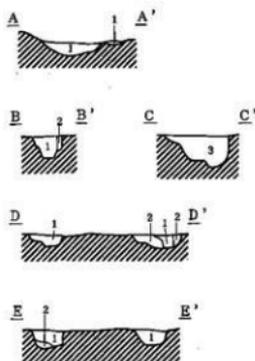
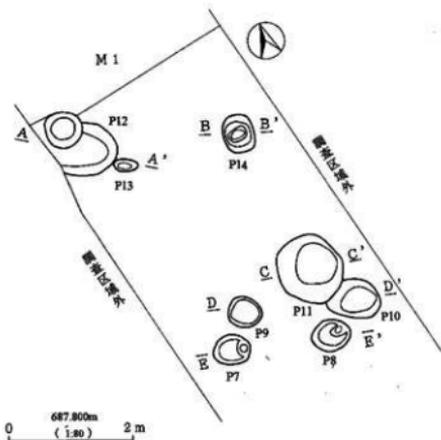
第57表 遺構外陶磁器観察表

第7節 ビット



- 1層 暗褐色土 (10YR3/3) E-4乾、粘土粒 (~1cm) を多量に含む。
- 2層 黒褐色土 (10YR2/2) E-12*99 (~2cm) を多く含む。
- 3層 黒褐色土 (10YR3/2) E-12*99 (~2cm) を多く含む。

- 1層 暗褐色土 (10YR3/3) しまりあり。
- 2層 暗褐色土 (10YR3/3) 炭褐色フツツ (~5cm) を多く含む。
- 3層 暗褐色土 (10YR3/3) しまりあり。炭化物片 (~2mm) を含む。
- 4層 黒褐色土 (10YR3/2) 炭化物 (~3cm) 粘土フツツ (~3cm) 黄褐色土フツツ (~5cm) を多く含む。



- 1層 黒褐色土 (10YR3/2) 強粘性。黄褐色土含む。
- 2層 鈍い黄褐色土 (10YR4/3) 強粘性。
- 3層 黒褐色土 (10YR3/2) 強粘性。黄褐色土フツツ含む。

第84図 ビット実測図

ま と め

今回の調査で、千曲川右岸の段丘端に沿って幅4m、長さ350m区間の調査を行い、弥生時代後期前半から平安時代の竪穴住居址、近世・近代の井戸跡等の遺構を発見した。

各遺構とも調査区の制約上全体像を伺える遺構は僅かで、大半が一部の調査にとどまったが、出土遺物から弥生時代後期前半4軒、古墳時代19軒、奈良時代1軒、平安時代2軒、不明5軒という調査結果を得ることができた。最も古い弥生時代の住居址は弥生時代後期の前半と考えられ、3軒の住居址からは弥生式土器に混じり、磨製石鏃の完成品、未製品及びこの石材として利用された千枚岩の剥片が多数出土した。これにより製品の製作を各住居単位で行っていた可能性も考えられたが、2軒は調査区の制限及び攪乱による破壊によって十分な調査が行えなかったことから断定は控え今後の課題としたい。古墳時代になると一気に住居址の件数は増し、特に後期の住居址は18軒を数える。遺構の分布としては本調査に限って見ると、調査区南端に所在する「離山」北裾付近に密集し、北にゆくほど希薄になる傾向が認められた。しかし、段丘縁辺の限られた範囲の調査であるため段丘内陸部での状況が一変する可能性も否定できない。奈良・平安時代になると確認できた件数は3軒と前代に比して激減する。同沖積地上におけるこの時代の遺跡は増大する傾向にあるが、いずれも小規模なものが多く、北方に位置する樺村遺跡の調査においても、住居址300軒中およそ280軒が古墳時代後期の住居址であり、奈良・平安時代の住居址は14軒と非常に低い割合となっている。こうした結果を考え合わせると奈良・平安時代、千曲川右岸の沖積地上には大規模な集落は形成されず、小規模な集まりが多数点在するような形態に変化していったのではないだろうか。

以上、久瀬添遺跡の調査から佐久市南部の千曲川右岸に広く形成された氾濫源沖積微高地には、弥生時代から現代に至る生活の痕跡を認めることができた。特に古墳時代には大規模な集落が営まれていた可能性を推察できる内容であり、僅かながら各時代の特徴を見いだせる調査となった。今後、周辺調査による新たな発見に期待したい。

参考文献

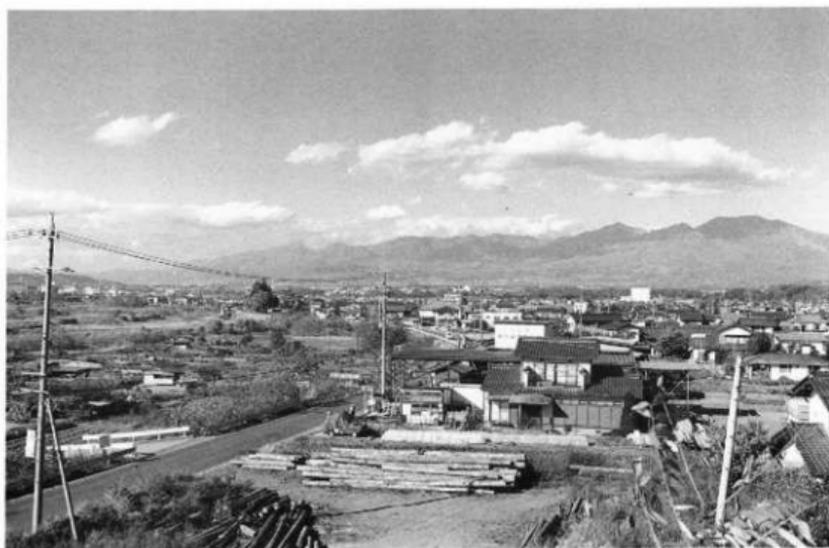
- | | | |
|----------|------|---------------|
| 佐久市教育委員会 | 1985 | 『樺村遺跡』 |
| 佐久市教育委員会 | 第51集 | 『寺中遺跡 中屋敷遺跡Ⅱ』 |



久彌泊湖跡C·D·E·F区重点写真



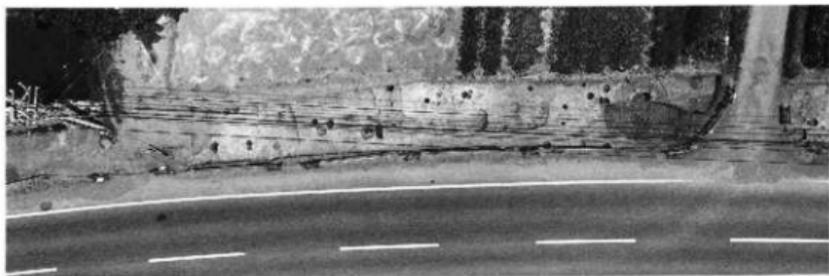
久瀬添遺跡遠景（千曲川左岸から）



久瀬添遺跡遠景（南から）



久留添道跡航空写真(南から)



久留添道跡 B区垂直写真



久留添道跡 F区垂直写真